

# 倉谷古墳群調査報告

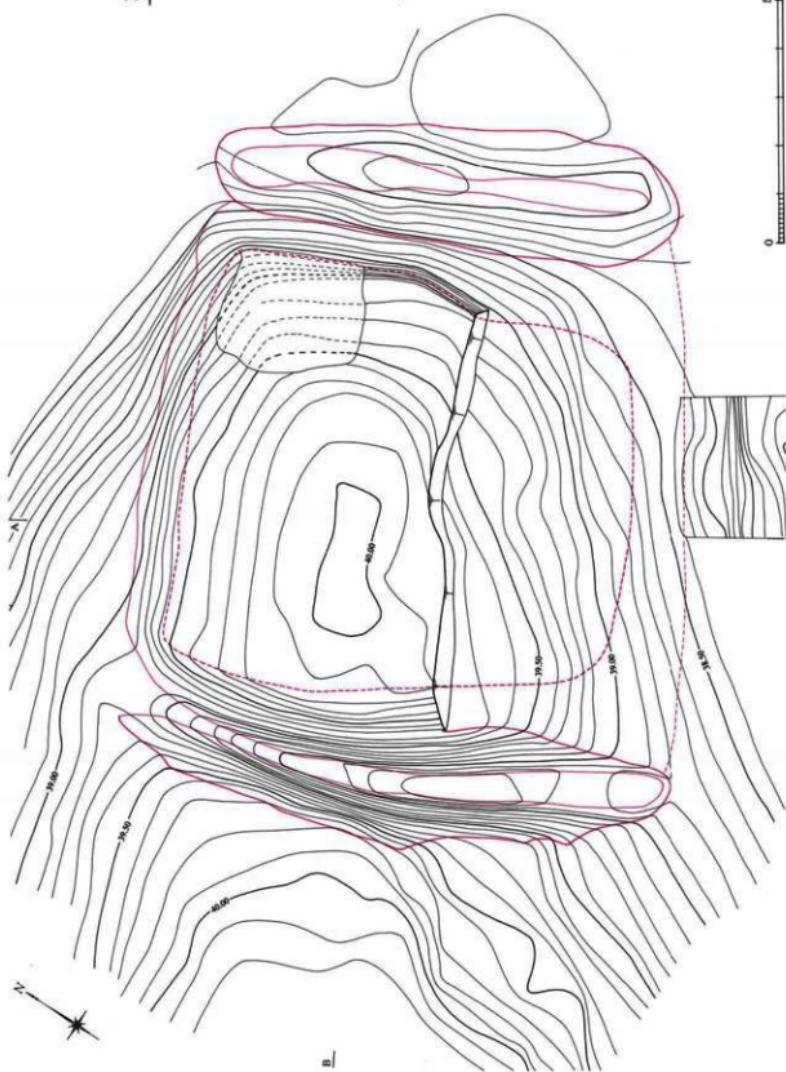
—能越自動車道造成土砂採取に伴う平成9～12年度の調査—

2002年3月

高岡市教育委員会

「倉谷古墳群調査報告」正誤表

図面三七 造構実測図



# 倉谷古墳群調査報告

—能越自動車道造成土砂採取に伴う平成9～12年度の調査—

2002年3月

高岡市教育委員会



## 序

高岡市域の西側には宝達山系の丘陵部が広がっており、西山丘陵と通称されています。丘陵の裾部には小矢部川左岸の狭隘な平野部が見られます。

小矢部川は北東方向に流れ富山湾に注いでいます。この左岸域には多くの遺跡が存在しています。特に平野部を見下ろす景勝地には、古墳が多数分布しています。これらは、弥生時代末の墳丘墓から飛鳥時代の横穴墓に至るまで、古墳時代の全時期に亘り、形態的にもさまざまなものから構成されています。

今回報告する倉谷古墳群は、この西山丘陵に分布する古墳の1つで、手洗野集落の背後の小丘陵の尾根上に構築されたものです。この丘陵の先端部には中世墳墓の手洗野古墓群も所在しています。周辺の平野部には、弥生時代末～中世に至る集落跡である間尽遺跡が、この集落を取り巻くように広がっています。北東側の別の丘陵上には大型円墳2基を基幹とする四十九古墳群が位置しています。

富山県西部と石川県の能登地域とを結ぶ高速道路である能越自動車道が建設されることになりました。小矢部川を渡河した後、この手洗野地区を通り、西山丘陵を越えて、水見市域を経由して石川県へ延びるもので、この道路建設と関連する事業として、土砂の採取や山地開発事業が当地に於いて行われることになり、倉谷古墳群の発掘調査を、平成9～12年度の4箇年に亘り実施いたしました。

倉谷古墳群は、現地踏査等により、3基の古墳から構成されているものと認識していました。発掘調査の結果、6基の方墳から構成されていることや、古墳時代初頭のものであることが確認されました。1つの丘陵全体の古墳群の様相が判明した意義は大きいと思われます。

最後になりましたが、長期間に亘るこの調査に御協力頂きました、関係各位、地元の皆様に感謝の意を表します。

平成14年3月

高岡市教育委員会

教育長 細呂木 六良

## 例　書

1. 本書は、能越自動車道造成にかかる土砂採取工事に伴い実施した、倉谷古墳群発掘調査の報告書である。

2. 当調査は、国土交通省北陸地方整備局（旧建設省北陸地方建設局）からの委託を高岡市（担当：高岡市建設部能越自動車道対策課）が受託した事業である。

3. 当調査は、高岡市教育委員会文化財課が主体となり実施した。

4. 調査地は、富山県高岡市手先野字倉谷である。

5. 現地調査は、平成9～12年度に実施した。各年度ごとの内容は以下の通りである。

平成9年度：倉谷1号墳の本調査

平成10年度：倉谷2号墳の本調査

平成11年度：倉谷3号墳の本調査、倉谷4号墳の試掘調査

平成12年度：倉谷4～6号墳の本調査

6. 報告書作成業者は、平成13年度に実施した。

7. 調査関係者は以下の通りである。

〔高岡市教育委員会文化財課〕

課長：田村靖彦（平成9年度）、宍村勝博（平成10～12年度）、大石茂（平成13年度）

課長補佐：大石茂（平成11・12年度）

《埋蔵文化財担当》

主幹：石浦正雄（平成9～11年度）、犬谷隆大（平成12・13年度）

主査：山口辰一

文化財保護主事：根津明義、荒井降、太田浩司

8. 当調査は山口が担当し、荒井が協力した。

9. 調査実務（現地調査及び報告書作成）は、山武考古学研究所へ委託して実施した。担当者等は以下の通りである。

〔山武考古学研究所〕

総括：平岡和夫（所長）

調査担当：間宮正光（調査係長）、口沖剛史（調査研究員）

現地調査補佐：作田尚輔（調査研究員）、久島博文（調査研究員）

報告書作成補佐：伊藤裕子（技術員）、河村公子（技術員）

10. 現地調査及び報告書作成において、以下の各氏より、御教示・御援助を得た。

木下良、小島俊彰、酒井清治、藤原正、西井龍儀、林寺巖州、古岡英明、丸山龍平

呂本顕亮（順不同・敬称略）

11. 本書の執筆担当は、以下の通りである。

第1章第1節：間宮

第1章第2節：山口

第1章第3節：口沖

第2～5章：間宮

## 凡例

1. 遺構実測図等における方位は、座標北を示している。
2. 今回報告する古墳は方墳6基である。これは東北東方向へ派生する支丘尾根状に、尾根を横断する形で構築されている。主軸方向は、座標北より45度近く振る北東～南西方向を示すものや東西方向に近いものもあるが、東北東～西南西方向を示すものが基本である。古墳の状況説明等においては、記述を簡潔するために方向を示す場合は、原則として以下の通りとした。

北東乃至東北東側→東側

南東乃至南南東側→南側

南西乃至西南西側→西側

北西乃至北北西側→北側

3. 古墳の墳丘範囲線については、上場線と下場線とで表現した。下場線は墳丘裾部をあて、上場線は現状での墳頂部から墳丘斜面への変換点とした。第1・2・4号墳については、盛土が残存していないことから、基盤層（地山）上の傾斜変換点を上場としている。

4. 本書における遺構記号は次の通りである。

S D - 道路址、S K - 土坑、S X - 開削地（平坦面）、S Z - 古墳

5. 本書における遺物番号は次の通りである。

1001～1003：第1号墳出土土器類

2001～2017：第2号墳出土土器類

3001～3003：第3号墳出土土器類

4001～4015：第4号墳出土土器類

5101～5121：第5号墳出土土器類、周溝内出土土器

5201～5230：第5号墳出土土器類、口表土上出土土器

6101～6107：第6号墳出土土器類、古墳本体出土土器

6201～6206：第6号墳出土土器類、付属する土坑SK02出土土器

6301：第6号墳出土金属製品、付属する土坑SK02出土土器

7001～7002：開削地（平坦面）出土陶磁器類

8101～8104：遺構外出土遺物、旧石器

8201～8209：遺構外出土遺物、土器・陶磁器

8301～8305：遺構外出土遺物、石製品

8401～8406：遺構外出土遺物、金属製品

6. 別表・遺物観察表で表記している計測値は、小括弧=○内の数値が復元値、大括弧=〈〉内の数値が残存値を示し、単位はcmである。



＜能越自動車道位置図＞

## 目 次

序

例言

凡例

<b>第1章 序 説</b>	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 調査による経緯	7
第3節 調査概観	9
<b>第2章 各地区の調査</b>	12
第1節 平成9年度調査地区	12
第2節 平成10年度調査地区	14
第3節 平成11年度調査地区	17
第4節 平成12年度調査地区	21
<b>第3章 古 墳</b>	25
第1節 第1号墳	25
第2節 第2号墳	27
第3節 第3号墳	29
第4節 第4号墳	31
第5節 第5号墳	33
第6節 第6号墳	35
<b>第4章 その他の遺構と遺物</b>	37
第1節 開削地(平坦面)	37
第2節 道路址	37
第3節 遺構外出土遺物	38
<b>第5章 結 語</b>	39

## 図面目次

- 図面01 遺跡実測図 遺跡全体図 (1/2,000)
- 図面02 遺跡実測図 平成9年度調査地区地形測量図 (1/300)
- 図面03 遺跡実測図 平成9年度調査地区地形断面図 (1/300)
- 図面04 遺跡実測図 平成9年度調査地区全体図 (1/300)
- 図面05 遺跡尖測図 1. 平成9年度調査地区断面図 (1/300)  
2. 第1号埴造物出土状態図 (1/300)
- 図面06 遺構実測図 第1号埴全体図 (1/100)
- 図面07 遺構尖測図 第1号埴上層断面図 (1/100)
- 図面08 遺跡実測図 平成10年度調査地区地形測量図 (1/300)
- 図面09 遺跡実測図 平成10年度調査地区地形断面図 (1/300)
- 図面10 遺跡実測図 平成10年度調査地区全体図 (1/300)
- 図面11 遺跡実測図 平成10年度調査地区断面図 (1/300)
- 図面12 遺構尖測図 第2号埴全体図 (1/100)
- 図面13 遺構実測図 第2号埴土層断面図 (1/100)
- 図面14 遺構尖測図 第2号埴造物出土状態図 (1/300)
- 図面15 遺跡実測図 平成11年度調査地区地形測量図面配置図 (1/500)
- 図面16 遺跡実測図 平成11年度調査地区西側地形測量図 (1/300)
- 図面17 遺跡尖測図 平成11年度調査地区東側地形測量図 (1/300)
- 図面18 遺跡実測図 平成11年度調査地区地形断面図 (1/300)
- 図面19 遺跡実測図 平成11年度調査地区全体図面配置図 (1/500)
- 図面20 遺跡実測図 平成11年度調査地区西側全体図 (1/300)
- 図面21 遺跡実測図 平成11年度調査地区東側全体図 (1/300)
- 図面22 遺跡尖測図 平成11年度調査地区断面図 (1/300)
- 図面23 遺構実測図 第3号埴上層断面図 (1/100)
- 図面24 遺構尖測図 第3号埴上層断面図 (1/100)
- 図面25 遺構実測図 第3号埴完形平面図 (1/100)
- 図面26 遺跡実測図 平成12年度調査地区地形測量図面配置図 (1/500)
- 図面27 遺跡実測図 平成12年度調査地区西側地形測量図 (1/300)
- 図面28 遺跡実測図 平成12年度調査地区東側地形測量図 (1/300)
- 図面29 遺跡実測図 平成12年度調査地区地形測量断面図 (1/300)
- 図面30 遺跡実測図 平成12年度調査地区全体図面配置図 (1/500)
- 図面31 遺跡尖測図 平成12年度調査地区西側全体図 (1/300)
- 図面32 遺跡実測図 平成12年度調査地区東側全体図 (1/300)
- 図面33 遺跡尖測図 平成12年度調査地区断面図 (1/300)
- 図面34 遺構実測図 第4号埴全体図 (1/100)
- 図面35 遺構尖測図 第4号埴土層断面図 (1/100)
- 図面36 遺構実測図 第4号埴造物出土状態図 (1/300)
- 図面37 遺構尖測図 第5号埴埴丘測量図 (1/100)

- 図面38 遺構実測図 第5号埴土層断面図（1／100）
- 図面39 遺構実測図 第5号埴光器平面図（1／100）
- 図面40 遺構実測図 1. 第5号埴遺物出土状態図・湖溝内（1／300）  
2. 第5号埴遺物出土状態図・旧表土上（1／300）
- 図面41 遺構実測図 第5号埴遺物山土状態図・西側周溝が南端部（1／40）
- 図面42 遺構実測図 1. 第6号埴地形測量図（1／300）  
2. 第6号埴全体図（1／300）
- 図面43 遺構実測図 第6号埴地形断面図（1／300）
- 図面44 遺構実測図 第6号埴埴丘測量図（1／100）
- 図面45 遺構実測図 第6号埴上層断面図（1／100）
- 図面46 遺構実測図 第6号埴土坑尖削図（1／40）
- 図面47 遺構実測図 1. 第6号埴遺物出土状態図（1／300）  
2. 第6号埴土坑SK02遺物出土状態図（1／40）
- 図面48 遺構実測図 開削地全体図・蹊敷遺構全休図〔1〕（1／100）
- 図面49 遺構実測図 開削地全体図・蹊敷遺構全体図〔2〕（1／100）
- 図面50 遺構実測図 道路址全体図・平成9・10年度調査地区（1／200）
- 図面51 遺構実測図 道路址全体図・平成11年度調査地区（1／200）
- 図面52 遺構実測図 道路址土層断面図（1／100）
- 図面53 遺物実測図 1. 第1号埴出土遺物（1／3）  
2. 第2号埴出土遺物（1／3）
- 図面54 遺物実測図 1. 第2号埴出土遺物（1／3）  
2. 第3号埴出土遺物（1／3）
- 図面55 遺物実測図 第4号埴出土遺物（1／3）
- 図面56 遺物実測図 第5号埴出土遺物（1／3）
- 図面57 遺物実測図 第5号埴出土遺物（1／3）
- 図面58 遺物実測図 第5号埴出土遺物（1／3）
- 図面59 遺物実測図 第5号埴出土遺物（1／3）
- 図面60 遺物実測図 第5号埴出土遺物（1／3）
- 図面61 遺物実測図 第6号埴出土遺物（1／3）
- 図面62 遺物実測図 1. 開削地出土遺物（1／3）  
2. 遺構外出土遺物・石器（1／2）
- 図面63 遺物実測図 1. 遺構外出土遺物・土器類（1／3）  
2. 遺構外出土遺物・石製品（1／3）
- 図面64 遺物実測図 1. 遺構外出土遺物・石製品（1／3）  
2. 遺構外出土遺物・金属製品（1／3）

## 図 版 目 次

- 図版01 遺跡写真 1. 遠景（西）  
2. 近景（南）
- 図版02 遺構写真 1. 第1号墳全景（西）  
2. 第1号墳遺物出土状態近景（南西）
- 図版03 遺構写真 1. 第2号墳全景（北東）  
2. 第2号墳近景（南西）
- 図版04 遺構写真 1. 第2号墳周溝堆積状態（南東）  
2. 第2号墳遺物出土状態近景（北西）
- 図版05 遺構写真 1. 第3号墳全景（北東）  
2. 第4号墳全景（南西）
- 図版06 遺構写真 1. 第4・5号墳完掘全景（東）  
2. 第5号墳全景（南）
- 図版07 遺壙写真 1. 第5号墳西侧周溝堆積状態（南）  
2. 第5号墳西側周溝内遺物出土状態近景（東）
- 図版08 遺構写真 1. 第6号墳調査状態（南西）  
2. 第6号墳周溝構築状態（南）
- 図版09 遺跡写真 1. 遠景（西）  
2. 近景（東）
- 図版10 遺跡写真 1. 平成9年度調査地区現況（北西）  
2. 平成9年度調査地区現況（北）
- 図版11 遺跡写真 1. 平成9年度調査地区現況（西）  
2. 第1号墳現況（北西）
- 図版12 遺跡写真 1. 平成9年度調査地区完掘遠景（西）  
2. 平成9年度調査地区完掘全景（垂直）
- 図版13 遺跡写真 1. 平成9年度調査地区完掘全景（西）  
2. 平成9年度調査地区完掘全景（北）  
3. 平成9年度調査地区完掘全景（南）
- 図版14 遺構写真 1. 第1号墳全景（西）  
2. 第1号墳全景（西）
- 図版15 遺構写真 1. 第1号墳全景（北東）  
2. 第1号墳周溝検出状態（南西）  
3. 第1号墳調査風景（北西）
- 図版16 遺跡写真 1. 平成10年度調査地区現況（南西）  
2. 平成10年度調査地区現況（北東）
- 図版17 遺跡写真 1. 平成10年度調査地区現況（南西）  
2. 第2号墳現況（北東）
- 図版18 遺跡写真 1. 平成10年度調査地区完掘遠景（南西）  
2. 平成10年度調査地区完掘全景（垂直）

- 図版19 遺跡写真 1. 平成10年度調査地区完掘全景（南）  
2. 平成10年度調査地1区完掘全景（北）  
3. 平成10年度調査地区完掘全景（北東）
- 図版20 遺構写真 1. 第2号墳近景（南西）  
2. 第2号墳全景（北東）
- 図版21 遺構写真 1. 第2号墳全景（北西）  
2. 第2号墳全景（南東）
- 図版22 遺構写真 1. 第2号墳周溝内遺物出土状態（西面）  
2. 第2号墳北斜面遺物出土状態（北西）  
3. 第2号墳北斜面遺物出土状態近景（北西）
- 図版23 遺構写真 1. 第2号墳北斜面遺物出土状態近景（北西）  
2. 第2号墳北斜面堆積状態（北東）  
3. 第2号墳北斜面遺物出土状態（北東）
- 図版24 遺跡写真 1. 平成11年度調査地区現況（南西）  
2. 平成11年度調査地区現況（北）
- 図版25 遺構写真 1. 第3号墳現況（北東）  
2. 第3号墳現況（南東）
- 図版26 遺跡写真 1. 平成11年度調査地区表土除去状態（南西）  
2. 平成11年度調査地区表土除去状態（北東）
- 図版27 遺構写真 1. 第3号墳表土除去状態（北）  
2. 第3号墳表土除去状態（南東）
- 図版28 遺跡写真 1. 平成10・11年度調査地1区完掘全景（北東）  
2. 平成11年度調査地区完掘全景（南西）
- 図版29 遺構写真 1. 第3号墳全景（北東）  
2. 第3号墳全景（北）
- 図版30 遺跡写真 1. 平成12年度調査地区現況（南西）  
2. 平成12年度調査地1区現況（北）
- 図版31 遺構写真 1. 第4号墳表土除去状態（南西）  
2. 第4号墳表土除去状態（南）
- 図版32 遺構写真 1. 第4号墳全景（南西）  
2. 第4号墳全景（北東）
- 図版33 遺構写真 1. 第4号墳東斜面遺物出土状態近景（東）  
2. 第4号墳東斜面遺物出土状態近景（東）  
3. 第4号墳調査底景（南西）
- 図版34 遺構写真 1. 第5号墳現況（南西）  
2. 第5号墳現況（北東）
- 図版35 遺構写真 1. 第5号墳現況（西）  
2. 第5号墳現況（南）
- 図版36 遺構写真 1. 第5号墳調査状態（南西）  
2. 第5号墳盛土土層断面（南東）  
3. 第5号墳西侧削溝堆積状態（北）

- 図版37 遺構写真 1. 第5号埴東側周溝堆積状態（南）  
2. 第5号埴南斜面堆積状態（北）  
3. 第5号埴南西斜面堆積状態（北）
- 図版38 遺構写真 1. 第5号埴全景（南西）  
2. 第5号埴全景（南）
- 図版39 遺構写真 1. 第5号埴盛土土層断面（北東）  
2. 第5号埴盛土土層断面（南西）  
3. 第5号埴沢表上遺物出土状態近景（北東）
- 図版40 遺構写真 1. 第5号埴西侧周溝内遺物出土状態近景（南）  
2. 第5号埴西侧周溝内遺物出土状態近景（北）  
3. 第5号埴闊丘風景（西）
- 図版41 遺跡写真 1. 平成12年度調査地区完掘全景（垂壁）  
2. 第5号埴完掘全景（南西）
- 図版42 遺構写真 1. 第6号埴現況（西）  
2. 第6号埴現況（東）
- 図版43 遺構写真 1. 第6号埴圓丘状態（北西）  
2. 第6号埴調査状態（東）
- 図版44 遺構写真 1. 第6号埴周溝堆積状態（南）  
2. 第6号埴南側埴丘基底部検出状態（西）  
3. 第6号埴周溝内遺物出土状態（東）
- 図版45 遺構写真 1. 第6号埴土坑SK01・02全景（南西）  
2. 第6号埴土坑SK02遺物出土状態近景（南西）
- 図版46 遺構写真 1. 第6号埴土坑SK02鉄製品出土状態近景（南西）  
2. 第6号埴土坑SK02遺物出土状態近景（東）  
3. 第6号埴土坑SK02全景（西）
- 図版47 遺構写真 1. 第6号埴土坑SK03全景（東）  
2. 第6号埴土坑SK03調査風景（東）  
3. 第6号埴調査風景（南）
- 図版48 遺構写真 1. 開削地現況（西）  
2. 開削地現況（東）
- 図版49 遺構写真 1. 開削地調査状況（西）  
2. 開削地調査状況（南東）
- 図版50 遺構写真 1. 平成9年度調査地区道路址確認検出状態（南東）  
2. 平成9年度調査地区道路址確認検出状態（南西）
- 図版51 遺構写真 1. 平成9年度調査地区道路址確認検出状態（東）  
2. 平成9年度調査地区開削地・道路址土層断面（西）
- 図版52 遺構写真 1. 平成9年度調査地区道路址西側土層断面（西）  
2. 平成9年度調査地区道路址東側土層断面（西）  
3. 平成9年度調査地区道路址調査風景（西）
- 図版53 遺構写真 1. 平成9年度調査地区道路址全景（西）  
2. 平成9年度調査地区道路址全景（東）

- 図版54 遺構写真 1. 平成10・11年度調査地区道路地全景（東）  
2. 平成10・11年度調査地区×道路地全景（西）
- 図版55 遺構写真 1. 平成11年度調査地区道路地構築状態（東）  
2. 平成11年度調査地区道路地構築状態（西）  
3. 平成11年度調査地区道路壁土層断面（東）
- 図版56 遺構写真 1. 古石器遺物出土状態近景（西）  
2. 中世遺物出土状態近景（南）  
3. 鉄製品出土状態近景（南）
- 図版57 遺物写真 第1・2号墳出土遺物
- 図版58 遺物写真 第2・3・4号墳出土遺物
- 図版59 遺物写真 第4・5号墳出土遺物
- 図版60 遺物写真 第5号墳出土遺物
- 図版61 遺物写真 第5号墳出土遺物
- 図版62 遺物写真 第5・6号墳出土遺物
- 図版63 遺物写真 潜削地・遺構外出土遺物
- 図版64 遺物写真 遺構外出土遺物

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図〔1〕(1/15万)	2
第2図 遺跡位置図〔2〕(1/5万)	3
第3図 遺跡地図〔1〕(1/1万5千)	4
第4図 遺跡地図〔2〕(1/1万5千)	5
第5図 工事区域位置図(1/1万5千)	7
第6図 調査地区位置図(1/5,000)	9
第7図 調査地区設定図(1/4,000)	11
第8図 平成9年度調査地区トレンチ設定図(1/400)	12
第9図 平成9年度調査地区全体図(1/400)	13
第10図 平成10年度調査地区トレンチ設定図(1/400)	15
第11図 平成10年度調査地区全体図(1/400)	16
第12図 平成11年度調査地区トレンチ設定図(1/400)	18
第13図 平成11年度調査地区全体図(1/400)	19
第14図 平成12年度調査地区トレンチ設定図(1/400)	20
第15図 平成12年度調査地区全体図(1/600)	22
第16図 平成12年度調査地区部分図〔1〕(1/400)	23
第17図 平成12年度調査地区部分図〔2〕(1/400)	24
第18図 谷谷古墳群古墳平面形・整図(1/300)	42
第19図 食谷古墳群上器集成図(1/8)	46

第20図 飯谷古墳群土器集成図 [2] (1/8) .....	47
第21図 富山県の出現期古墳分布図 (1/100万) .....	48

## 挿 表 目 次

第1表 飯谷古墳群一覧表 .....	43
第2表 富山県の出現期古墳一覧表 .....	48

## 別 表 目 次

別表 追跡観察表 .....	51
----------------	----

### 調査参加者名簿

#### 発掘

荒山益作、荒山睦子、安藤栄作、安藤政子、池田篤史、池田由香里、井浦利松、石川勢康子、石崎ます江  
 石田真理子、今町公子、上田工、氏家弘人、大島富子、大野孝吉、岡田一広、小川昭子、奥田あや子、奥原和子  
 桶谷潤、尾崎宏典、小野利宏、豊島久夫、川崎あづさ、川西祐介、川原正信、河原タツ子、河原康弘、金剛秀夫  
 木沢達也、木原そとえ、高坂知樹、小島善雄、小林正二、小林央、佐野賣、澤田和明、沢田一雄、澤田久信  
 佐伯ノブエ、柴田八重子、畠田健治、正力真由美、芹山美智代、高木則夫、高田美榮子、高広省二、中島祐子  
 中田典子、中田実、中村公治、中村雅子、中山賢富、野尻儀治、花崎由紀子、林ふさ、林みえこ、広沢隆太郎  
 広谷宏明、古岡弘之、前田きん子、前田清二、松林富士子、松原石様、松本直典、村井綱、森茂夫、森聰子  
 宮出由太郎、宮本友一、山川昭二、山崎一男、山崎亮、山城一夫、山田みつい、山田芳子、山西久儀、山元宅次郎  
 要藤仁司、要藤夏樹

#### 整理

石井百々子、今東部美、鎌仲勝子、神楚友里、小島あゆみ、佐藤洋子、末廣弘子、新谷晴紀子、惣元魚理子、藤律子  
 道谷美奈子、中三希子、松尾春枝、村田智恵子、村田理恵、室崎真弓、矢谷真治美、山崎美和、米田枝里子

#### 事務

片岡千賀子、田中美仙子

## 第1章 序 説

### 第1節 遺跡概観

#### 1. 環境

##### 地理的概観

高岡市の地形を概観すると、庄川及び小矢部川により形成された沖積地と、石川県宝達山より派生する丘陵地や、山周辺の丘陵地、金山丘陵西縁に発達した芦谷段丘に分けられ、大部分は庄川扇状地の先端部及び飛騨山中に源を発する庄川・小矢部川の形成した一角州と氾濫源が占める。これらの河川は幾度も氾濫を繰り返してきたものの、古来より穀物を生産するうえで大きな恵みをもたらし、現在においても平野部に広がる水田地帯に潤いを与えている。

丘陵地は、高岡市の北西部に広がるもので通称西山丘陵と呼ばれ、富山県と石川県の県境をなしている。西山丘陵は、新生代第一紀層の中新世・鮮新世の地層を主体とし、北東側は海老坂の断崖崖を経て二上丘陵へと続き、南西側は福岡町や小矢部市内の丘陵、さらには西砺波丘陵（石動丘陵）へと連なる。この丘陵には幾重にも開析谷があり込み、谷内には集落が点在する一方で小河川の水流を利用した棚状の水田が営まれている。

倉谷古墳群は、JR高岡駅の西方約5.2kmの手洗野地区に位置し、西山丘陵の一角に立地する。調査地は、国上山信光寺と三上神社背後の北東へ向け延びる尾根上を占め、眼下には蛇行しながら伏木港を目指す小矢部川や高岡市街が一望される。

##### 手洗野

西山丘陵より発し、小矢部川に注ぎ込む河川に頭川川と広谷川がある。二つの河川は開析谷を形成し、この開析谷に挟まれた丘陵上に倉谷古墳群があり、裾部に手洗野集落が位置する。現在地名は「タライノ」と呼び親しまれているが、以前は二上神社の社領で、ミタラシの水があったことから「ミタラシノ」と呼ばれたと伝えられている。

古代においては、砺波郡と射水郡との境界がこの付近に推定され、この付近から北東約2kmにある須田藤木遺跡へかけての一帯は、東大寺領莊園須加庄の比定地の一つとされる。また、古代の北陸道は、西山丘陵の山麓を通り伏木の越中國府方向へ進んでいく。近世に入ると場所を変えながら山根道となり、小矢部川周辺を通る水見街道とともに脇街道として利用されるなど、この地域は古くから交通の要衝として位置してきた。越中最古の曹洞宗寺院である国上山信光寺が手洗野に建立されていることからみても、この地域が交通の要衝であったことが伺われる。

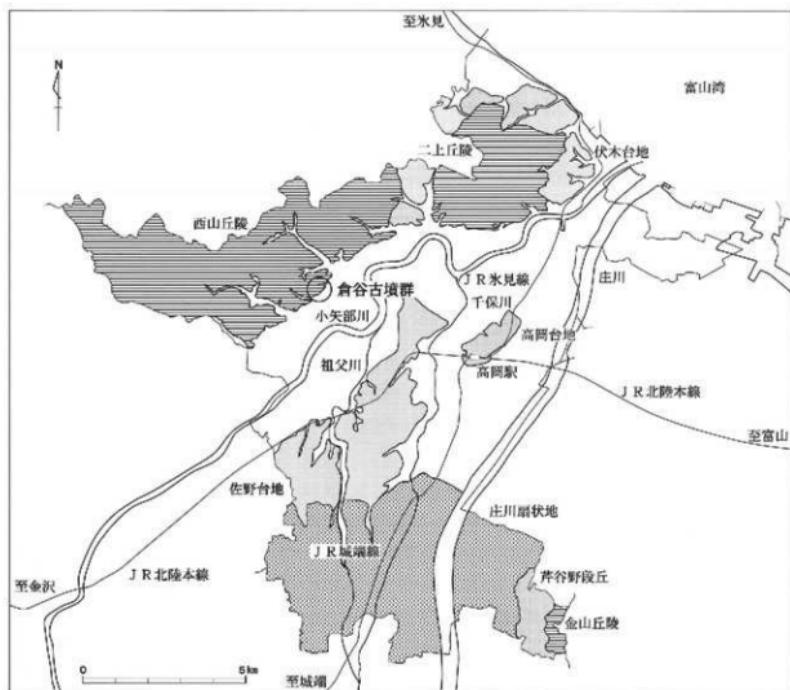
手洗野地区は、江戸時代から明治22年までは手洗野村であり、その後は、西砺波郡国吉村に所属した。昭和26年に国吉村が高岡市と合併することに伴い、高岡市の大字となり現在に至っている。この地区北側の頭川川の開析谷は頭川、東側の平野部は岩坪、南の広谷川の開析谷は月野谷である。

### 地質概観

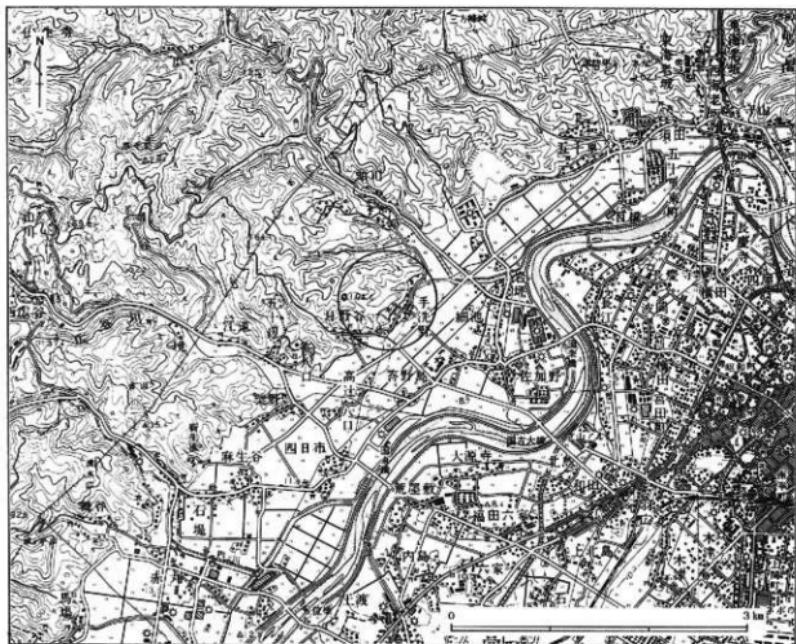
倉谷古墳群付近の西山丘陵は、主に新生代第三紀層の中中新世・鮮新世にあたる北陸層群が占め、地殻変動により海底が隆起して生成された地形である。このため基盤層の中位から下位は、地区毎に違いは確認されるものの、北陸層群の谷内層（尾岩層）・頭川層（石灰質砂岩層）などで構成され、基本的には小矢部川方向に約10～20度の傾斜で波状に堆積する。

第四紀層の洪積世・沖積世になると、河川は本遺跡の立地する尾根とほぼ同様の標高で富山湾に向か北流していたと考えられている。これにより北陸層群は開析あるいは堆積が繰り返され、富山層群が不整合に覆い上位の基盤層となる。本遺跡周辺においては、標高約30～40mにおいて河成の礫層を観察することができる。潮流と共に多量の砾を運んで堆積したいわゆる上田子礫層である。本遺跡で観察される上位礫層は、覆瓦構造を示しており、急激な水流を要因として堆積した状況が伺われる。

倉谷古墳群の南に広がる平野を砺波平野と呼び、小矢部川や庄川に代表される河川が貫流する。地形的に高岡市域は、扇状地の末端部及び三角州により構成され、扇状地の堆積層は砂利、砂が主で、三角州は粒子の細い粘土層となり、丘陵部とは異なる地質を示している。



第1図 遺跡位置図(1) (1/15万)



第2図 遺跡位置図(2) (1/5万)

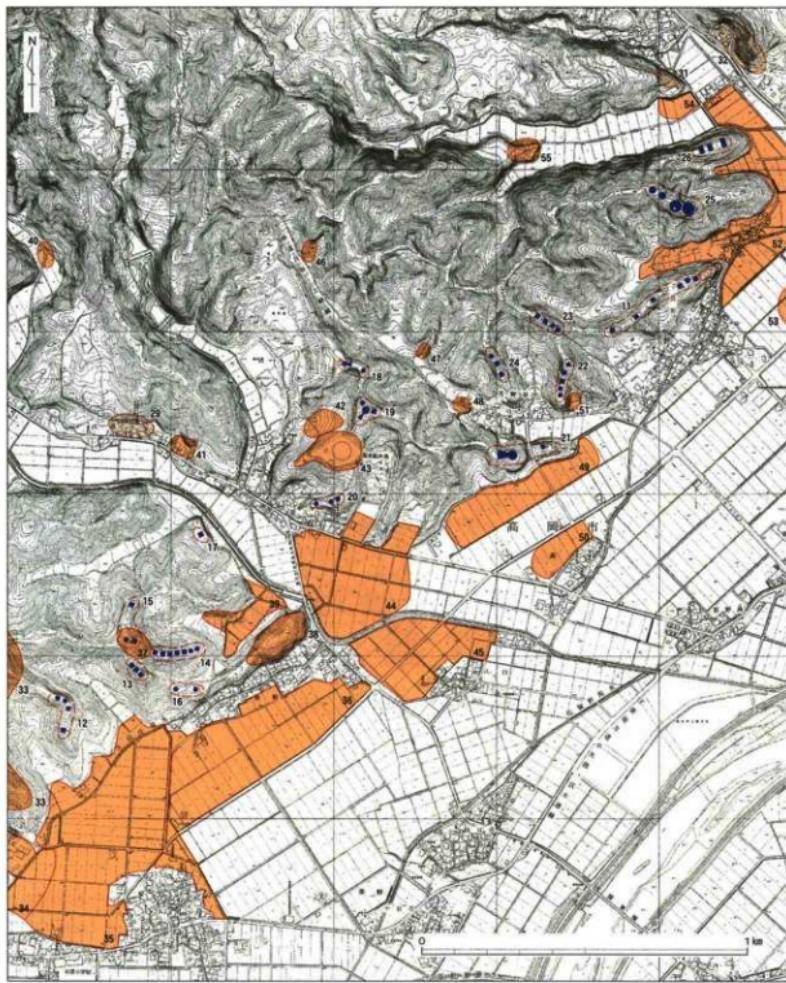
## 2. 従来の知見

### 古墳群の発見

倉谷古墳群は、手洗野の国上山信光寺及び三上神社背後の尾根上に位置し、西井龍儀氏による一連の西山丘陵の踏査により発見された遺跡である。古墳は3基が確認され、西側から東北東側の尾根先端へかけて第1～3号墳と命名された。

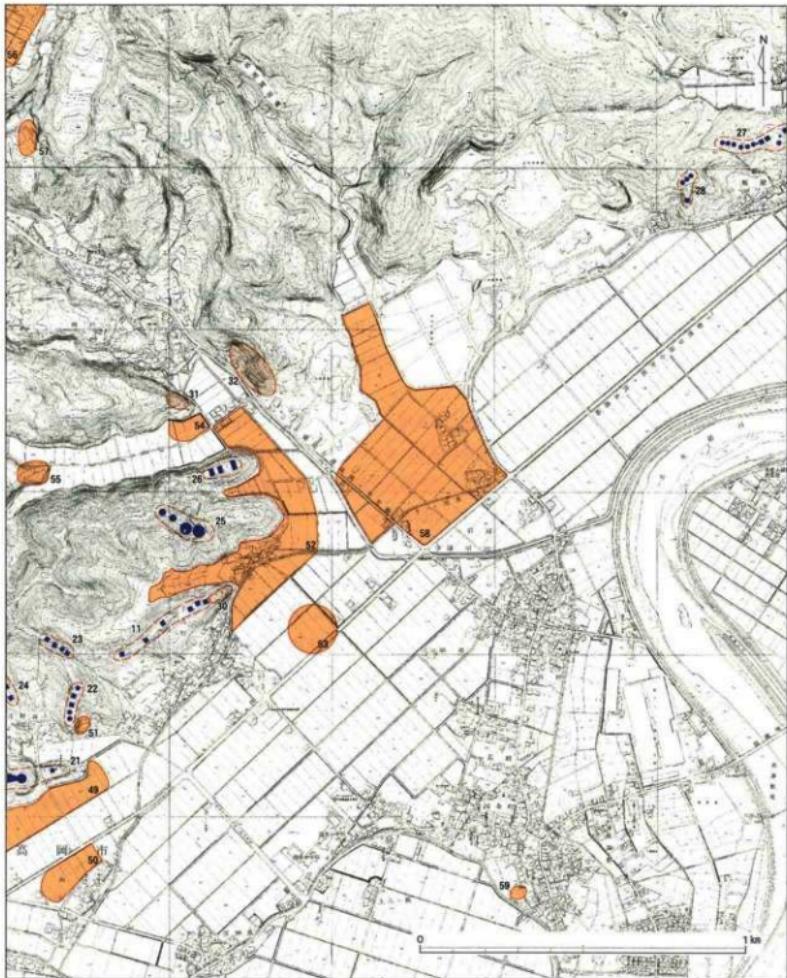
### 分布調査の実施

昭和59年度に本遺跡を含む国吉地区において、埋蔵文化財分布調査を高岡市教育委員会が実施し、遺跡の範囲と内容を提示した。この時の成果は『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ』として刊行されている。この報告書によると、倉谷古墳群は、3基の古墳で構成されており、第1号墳が直径8m、高さ1mを計測する円墳、第2号墳が全長30m、高さ2.5mの前方後方墳、第3号墳が東西8m、南北7m、高さ1mの方墳としている。さらに第2号墳と第3号墳の間には、幅3m程の空堀状の溝を確認しており、第2号墳が基壇状造構である可能性を指摘している。



第3図 遺跡地図(1) (1/1万5千)

11. 倉谷古墳群、12. 麻生谷殿谷内古墳群、13. 柴野口割Ⅰ古墳群、14. 柴野口割Ⅱ古墳群、15. 柴野口割Ⅲ古墳群、16. 柴野口割Ⅳ古墳群  
 17. 柴野春日古墳、18. 興遊堂古墳群、19. 男傍古墳群、20. 笹八口谷内古墳群、21. 立山古墳群、22. 道ヶ谷内Ⅰ古墳群  
 23. 道ヶ谷内Ⅱ古墳群、24. 道ヶ谷内Ⅲ古墳群、25. 四十九古墳群、26. 安居山古墳群、29. 江道横穴墓群、30. 手洗野古墓群  
 31. 須川古墓、32. 須川城ヶ平横穴墓群、33. 麻生谷殿谷内城跡、34. 麻生谷新生園遺跡、35. 麻生谷遺跡、36. 柴野遺跡  
 37. 柴野城ヶ平城跡、38. 柴野高の宮城跡、39. 柴野守善寺道路、40. 境久寺道路、41. 円通庵道路、42. 興遊堂道路、43. 笹八口勢跡  
 44. 笹八口道路、45. 八口道路、46. 月野谷石飛道路、47. 月野谷千草道路、48. 月野谷大谷地道路、49. 宮田道路、50. 高辻道路  
 51. 道ヶ谷内道路、52. 間尽道路、53. 手洗野赤浦道路、54. 道ヶ谷内Ⅰ道路、55. 道ヶ谷内Ⅱ道路



第4図 遺跡地図(2) (1/1万5千)

11. 倉谷古墳群、21. 立山古墳群、22. 道ヶ谷内 I 古墳群、23. 道ヶ谷内 II 古墳群、24. 道ヶ谷内 III 古墳群、25. 四十九古墳群  
 26. 安居山古墳群、27. 板屋谷内 B 古墳群、28. 板屋谷内 C 古墳群、30. 手洗野古墓群、31. 潟川古墓群、32. 潟川城ヶ平塚穴墓群  
 49. 宮田遺跡、50. 高辻遺跡、51. 道ヶ谷内遺跡、52. 間尽遺跡、53. 手洗野赤浦遺跡、54. 滝ヶ谷内 I 遺跡、55. 滝ヶ谷内 II 遺跡  
 56. 壱川オスキノ原遺跡、57. 頂川宮中遺跡、58. 岩坪岡田島遺跡、59. 佐加野ラントウ遺跡

### 3. 遺跡の分布

#### 遺跡分布の概観

倉谷古墳群が位置する手洗野周辺には、丘陵地に出現期から後期にかけての古墳群・横穴墓群が数多く分布し、さらに、沖積地周辺は東大寺領庄園須加庄比定地の一つであるなど、遺跡密度の高い地域である。

頭川、丹野谷、笛八口の谷の開口部付近には、大規模遺跡の存在が指摘され、各時代にわたる複合遺跡の傾向を示している。

#### 縄文時代の遺跡

縄文時代の遺跡は少ない。手洗野の南西側の丘陵斜面には道ケ谷内遺跡がある。頭川谷には、頭川オスキノ原遺跡、頭川中谷遺跡があり中期の遺物が採取されている。主要地方道高岡水見線が走る頭川谷の北西と西に分かれる分岐点から、西へ派生する谷の開口部付近には、滝ヶ谷内I遺跡が位置する。この遺跡は、縄文時代から古代・中世にわたる複合遺跡で、縄文晚期中葉の装飾突起を有する上器片が確認されている。

#### 弥生時代から古墳時代の遺跡

この時期の遺跡は、丘陵上に墓域、沖積地の微高地に坐落跡の存在が想定されるが、本格的な調査は実施されておらず実体は不明である。分布調査の成果によると、これらの遺跡は、弥生時代から奈良・平安時代や中世までの遺物が採取されており、連続とした宮みが推測される。周辺の遺跡では、倉谷古墳群の北東に間尽遺跡が位置する。間尽遺跡は昭和49年に上野章氏が『大境』において「頭川遺跡」として紹介した遺跡と同一であり、東日本を中心とする弥生土器型式である「天王山式土器」と、西日本を中心とする「櫛描文土器」が併出することで知られている。墓域は、倉谷古墳群を中心として半径2km以内には、現在確認されているだけで、安窟山、四十九、道ヶ谷内I～III、立山、男撰、笛八口谷内、軒迦堂などの9古墳群が、小矢部川の肥沃な沖積地を望む丘陵上に立地する。横穴墓群は、後期古墳に付随するものであろうか、その近辺に立地する傾向を示す。広谷川流域には江道横穴墓群が、間尽遺跡の対岸には23基からなる頭川城ヶ平横穴墓群が位置する。

#### 奈良・平安時代の遺跡

「延喜式」に記されている古代北陸道は、小矢部川の左岸で西山丘陵に挟まれた平野部を高岡市伏木の越中國府方面へ通じていたとされる。平成9年度に調査が行われた麻生谷新生園遺跡からは、平安時代前期に比定される石敷きの道路址が発見され、北陸道との関係が示唆された。このほか、「正倉院藏東大寺開田図」にある射水郡須加・鳴戸・模田などの耕田は、高岡市内に所在したと推定されている。主要地方道高岡水見線が走る頭川谷から平野の間は、古代の旧砺波郡（南西側）と旧射水郡（北東側）の都境推定地であり、この付近は須加庄比定地の一つとなっている。また、間尽遺跡からは、布目瓦や「梗令分」と記された墨書き土器が出土し、7世紀末の古代寺院あるいは窯跡、さらには、莊園との関係も指摘されている。

#### 中・近世の遺跡

間尽遺跡の南方約300mには中・近世の造構を検出した手洗野赤浦遺跡があり、北東600mには珠洲I・II期を主体とした中世前期の遺物が出土している岩坪岡田馬遺跡が位置する。倉谷古墳群の立地する尾根の先端部には、二段からなる削平地に板碑や五輪塔が確認される手洗野古墓群が所在する。尾根下には間尽遺跡が存在し、平成10年度に実施された急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査において、山岳寺院跡の可能性が指摘されている。手洗野には、越中最初の曹洞宗寺院である国上山信光寺が建立されるなど、この地域における中心的な役割を果たしていたものと推測される。

## 第2節 調査に至る経緯

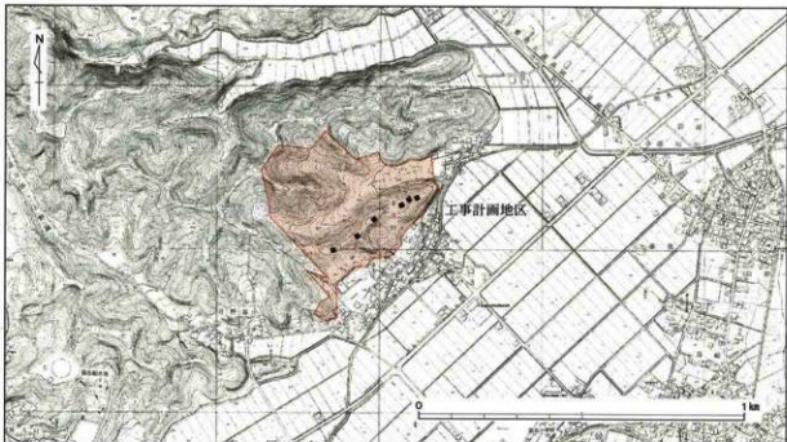
### 工事計画

昭和62年6月、高規格幹線道路網計画が策定された。道路交通の量的拡大と広域化、高速性等に対応するため、規格の高い広域幹線網の拡充を目的としたものである。この時に既定の計画に加えて新規の追加があり、全国で14,000kmの高規格幹線道路が決められた。能越自動車道は、この新規分に該当する自動車専用道である。

能越自動車道は、小矢部砺波ジャンクションから石川県輪島市へ至る延長約100kmの高規格幹線道路である。小矢部市に位置する小矢部砺波ジャンクションで、北陸自動車道・東海北陸自動車道と繋がり、小矢部市・福岡町を経て、高岡市笠川地内で市内に入る。高岡インターチェンジを通り、小矢部川を渡河し、小矢部川左岸の平野部を走り、仮称高岡北インターチェンジへ至る。ここから丘陵地帯へかかり、氷見市方面へ抜けるものである。

平成元年には、都市計画決定や基本計画決定があり、平成2年には起工式を迎えた。小矢部砺波ジャンクション方面から工事が開始され、平成12年7月には高岡インターチェンジまで共用がなされている。

この道路建設にかかる道路造成用土砂については、当該建設地の市町村で調達するとの原則があり、高岡市域内での土砂の調達地として手洗野山地が候補地として浮上した。土砂搬出地の跡地については、企業団地や住宅団地等を造成し、当該道路の波及効果を最大限に活用する方針が、高岡市建設部によって立案され、造成等が実施されることになった。



第5図 工事区域位置図（1／1万5千）

## 協議

高岡市の西部地区は西山地区とも呼ばれ、小矢部川が北西方に流れ、西方の丘陵地との間に狭隘な平野部を発達させている。手洗野地区はこの西山地区のほぼ中央部に位置し、丘陵裾部に集落が展開している。工事予定地及び周辺には、丘陵地に四十九古墳群・倉谷古墳群・道ヶ谷内Ⅰ古墳群・道ヶ谷内Ⅱ古墳群・道ヶ谷内遺跡が、平野部に間尽遺跡が知られていた。昭和54年に、富山考古学会会員の西井龍儀氏は、現地踏査により西山丘陵で多くの古墳群を確認した。手洗野地区的倉谷古墳群等も該当する。その後高岡市教育委員会では、西山丘陵埋蔵文化財分布調査事業の一環として、昭和59年度に手洗野地区等の国吉地域において分布調査を実施した。当地区における埋蔵文化財の分布状態については、これらが基礎資料となっている。

能越自動車道本線にかかる埋蔵文化財は、建設省（国土交通省）の委託を受けて、富山県教育委員会及び財团法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所が担当して進行していたが、関連事業である手洗野山地の開発工事にかかる埋蔵文化財は、高岡市側で協力することになった。高岡市の担当課である能越自動車道対策室（その後、能越自動車道対策課となる）と文化財の担当である高岡市教育委員会社会教育課（その後、文化財課となる）との協議は平成3年4月に行われた。周知の埋蔵文化財の内、四十九古墳群・道ヶ谷内Ⅰ古墳群・道ヶ谷内Ⅱ古墳群・道ヶ谷内遺跡は、計画段階より工事区域から除外されており、倉谷古墳群と間尽遺跡とが協議の対象となった遺跡であった。これらの遺跡については、工事区域から除外することができず、発掘調査を実施して記録保存する方向で、対処することになった。

これら4つの古墳群の内、四十九古墳群は大型の円墳2基を基幹とした古墳群であり、道ヶ谷内Ⅰ・Ⅱ古墳群は盛土も明確な方墳が尾根筋に連続して見られる古墳群であった。これに対して、倉谷古墳群は小型の円墳と方墳が各1基、前方後方墳状の高まりが1箇所からなる古墳群であり、他の古墳群と比べて、見劣りがし、指摘を受けなければ古墳と認識するのも難しい程度の高まりを有しているに過ぎないものであった。

本線工事並びに関連工事が進展してきた平成7年4月、建設省富山工事事務所・高岡市建設部能越自動車道対策課・高岡市教育委員会文化財課の3者で、協議と現地確認を実施した。

## 調査計画

平成9年度に至り、高岡市域において本線工事が着工されることになった。能越自動車道対策課と文化財課との具体的協議や現地踏査が実施され、調査実施についての具体的準備が開始されることになった。

倉谷古墳群に対する当時の認識は、手洗野集落背後の東北東方向に走る丘陵尾根上にある3基の小古墳からなる古墳群とするものであった。現地踏査により、第3号墳の東側に古墳の可能性がある高まり（第4号墳）を確認し、これも調査対象に含めることにした。

土砂の採取は建設省の工事であるので、建設省の委託を高岡市（建設部能越自動車道対策課）が受託する形で調査を実施することになった。調査主体・指導は高岡市教育委員会（文化財課）とし、私地の作業実務は、民間の調査機関、山武考古学研究所（所長：平岡和夫）に委託して行うこととした。1箇年で古墳を各1基発掘調査することにし、次のような計画を立てた。

平成9年度：第1号墳の発掘調査（本調査）

平成10年度：第2号墳の発掘調査（本調査）

平成11年度：第3号墳の発掘調査（本調査）、及び第4号墳の試掘調査

このような計画で実施に移されたが、平成11年度の試掘調査により、第4号墳を古墳と認識するに至り、平成12年度に第4号墳の発掘調査（本調査）を実施することになった。なお、平成12年度の発掘調査では、さらに東側から2基の古墳（第5・6号墳）が確認され、合わせて発掘調査を実施した。

### 第3節 調査概観

#### 1. 調査の方法

##### 調査地区的設定

倉谷古墳群は、西山丘陵に幾重にも延びる、樹枝状を呈する尾根の一部に構築されている。各古墳は、尾根の高所を1単位として立地し、これにより、調査地区は尾根上の鞍部を区切りとして設定された。調査は、平成9年度から平成12年度にわたって行い、年度を重ねるにつれて丘陵先端部へと調査地区を移していった。第5号墳は、平成12年度の第4号墳調査時に古墳であることが判明したものである。第6号墳は、これらの北東側で微細な高まりの部分に試掘坑を入れて確認したものである。

各年度の調査における現地調査期間・対象遺構・調査面積は以下の通りである。

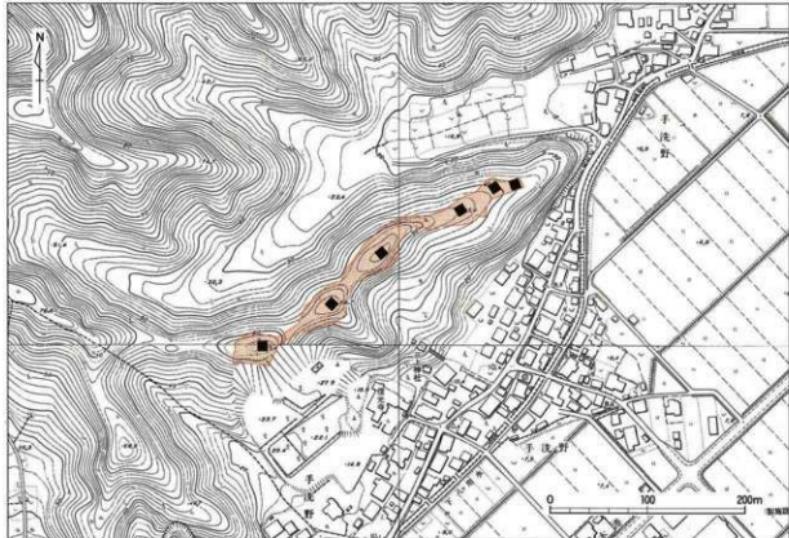
平成9年度：平成9年8月4日～同年12月18日。第1号墳・開削地・道路址。調査面積1,270m<sup>2</sup>

平成10年度：平成10年8月3日～同年12月18日。第2号墳・道路址。調査面積2,100m<sup>2</sup>

平成11年度：平成11年6月21日～同年11月18日。第3号墳・道路址。調査面積2,000m<sup>2</sup>

平成12年度：平成12年8月28日～同年12月27日、平成13年3月14日～同年3月30日。第4・5・6号墳。

調査面積2,500m<sup>2</sup>



第6図 調査地区位置図 (1/5,000)

### 遺構調査

調査区域が丘陵上に立地し、重機の搬入が困難であることや遺跡の性格から、表土除去については全て人力により対応した。人力での表土除去及び遺構検出作業は斜面の堆積土が厚く難航したが、細部にわたり墳丘の構造状態及び遺物の分布状態を把握することができた。

遺構の検出作業にあたっては、墳頂部を中心として基本となる土層観察用ベルトを古墳の主軸に合わせて設定し、常に上層を観察しながら慎重に掘り下げた。また、墳丘以外についても、周辺の地形の把握と遺構の有無を考慮して数本の十層観察用ベルトを設けた。さらに、本遺跡一帯は開墾を受けているため、耕作土を除去して下部の状態を確認した。これにより、第2号墳調査時には斜面に対して設定した土層観察用ベルトから、旧表土の上に遺物が多量に含まれる堆積土を確認し、これが盛土の崩落したものであることが明かとなった。なお、盛土の崩落土中に含まれた遺物は、古墳の築造時期を決定する要素の一つであるため、人念に記録を行うこととした。

墳頂部の調査は、埋葬施設の遺存を考慮して慎重に行った。盛土は全てふるいに掛け埋葬施設の痕跡や遺物の検出に努めた。第3・5号墳では墳頂部に盛土の遺存が確認されており、墳形を確認した後に断ち割りを行い構造状態の観察を行った。

調査の最終段階では、上層観察用ベルトを設定した部分に沿って約1mの深さで基盤層に対して掘り下げを行い、盛土遺存の再確認及び地山層の把握に努めた。

第6号墳は、平成12年度の当初予定した調査期間の最後に確認したものである。そのため、平成13年3月に追加調査を実施し、未調査部分を残したが、ほぼ全体把握を行って終了した。

### 写真撮影

写真撮影は、35mm白黒・35mmカラーリバーサル・35mmカラーネガ・6×7判白黒・6×7判カラーリバーサルフィルムを用いて各調査段階を記録した。

撮影にあたっては、墳形や地形の状態、遺物の出土層位が明示できるように留意して、調査工程の記録を行った。なお、遺跡の全体写真については、地上からの撮影のほか、無線操縦ヘリコプターによる航空写真も加えた。

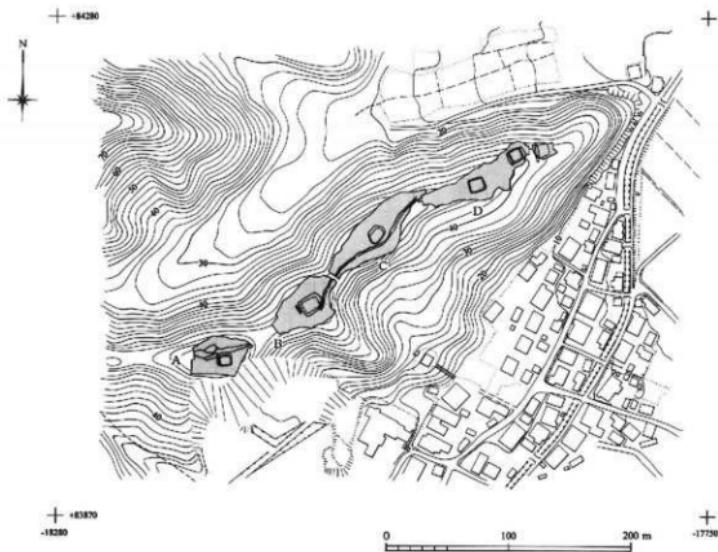
### グリッド

グリッドは、公共座標を基にして5m×5m方眼で各調査地に毎に設置した。方眼には、南北方向にA・B・C・・・・、東西方向に1・2・3・・・・とアルファベット及び数字を付し、この交点をA1・B1・C1・・・・とした。なお、表面採取遺物や遺物の取り上げにあたっての基準は、北西端にある杭の名称を使用した。

### 遺構・遺物実測

各図面作成の縮尺は、上層断面図・遺構平面図・遺物分布図を1/20、遺跡全体図は1/100を基本とした。遺構平面図及び遺物分布図は、調査地区内に設置したグリッド杭を基に作成し、遺物が集中して出土した状態を表す場合には1/10の縮尺とした。

各年度毎の現況地形測量及び遺跡・遺構全体図の作成は、無線操縦ヘリコプターを使用した空中写真測量で対応し、等高線は25cm間隔とした。なお、墳丘・周溝は崩落及び後世の掘削の影響を受けて、微細な起伏しか残存していないため、25cm間隔の等高線では地形の変化を捉えきれず、手実測による10cm間隔の等高線を1/20・1/100縮尺図に付け加えた。また、第6号墳に関しては現況測量が行われていなかったため、同様の図面を作成した。



第7図 調査地区設定図 (1/4,000)

## 2. 調査概要

### 検出遺構

4箇年の調査を通じて全体の遺構数は以下の通りである。

古墳：6基、第1～6号墳（S Z01～S Z06）

開削地（平坦地）：1箇所（S X01）

道路址：1条（S F01）

土坑：3基、第1～3号土坑（S K01～S K03）、これらの土坑は第6号墳に付属するものとして扱っている。

### 出土遺物

調査地区全体から出土した遺物は以下の通りである。

土器類：古墳時代初頭の土師器、中世土師器、珠洲・須恵器系陶器、輸入青磁、肥前磁器

旧石器：石刃、使用痕のある剥片、加工痕のある剥片、縦長剥片

石製品：砥石

金属製品：鎧、直刀、刀子、銅錢

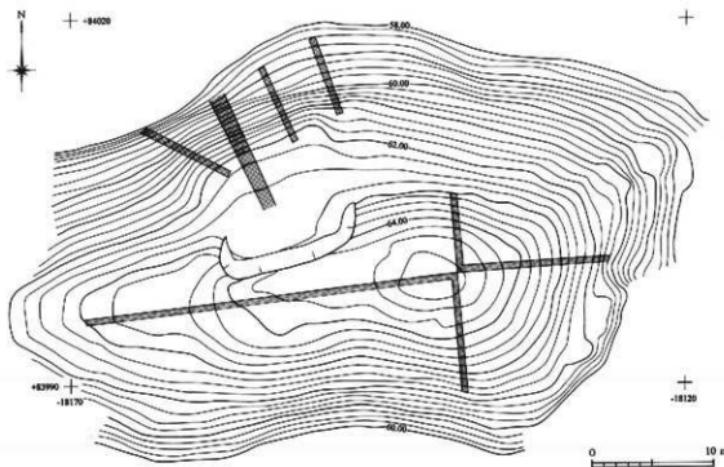
## 第2章 各地区的調査

### 第1節 平成9年度調査地区

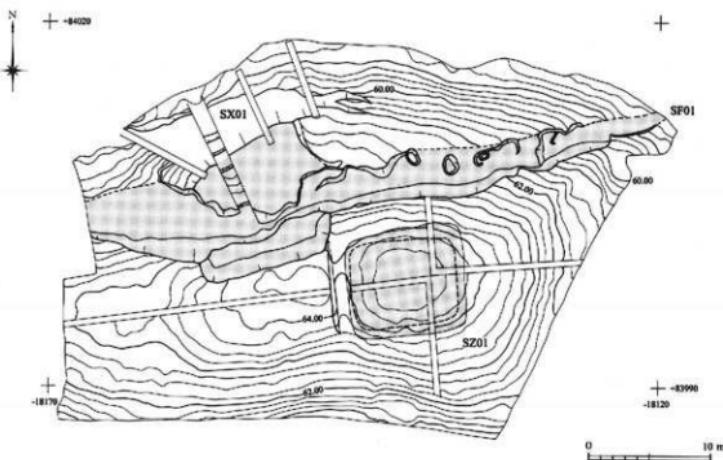
#### 調査地区の位置

平成9年度の調査地区は、小矢部川を望み東北東へ向けて樹枝状に延びる尾根上に位置し、開発区域のうちの西端で、国上山手洗野信光寺の北西側にある。

遺跡の立地する尾根は、第7図の調査地区設定図からも伺われるよう、起伏のある尾根で、高所、鞍部を繰り返しながら順次高度を下げていく。調査地区は、標高64.8mを計測する高所を中心としており、北側は、間断遺跡から連なる開析谷へ向け急激に下降する。東側は尾根の先端に続くもので、この高所から急激に下降し、平成10年度調査地区との境となる鞍部に至る。西側は道ヶ谷内Ⅱ古墳群へ続き、鞍部までは緩やかな尾根となり、南へ向けて派生した支陵との分岐点から急激に高度を上げる。南側は現在大きな崖となっているが、以前は信光寺へ向けて小規模な尾根が張り出していた。



第8図 平成9年度調査地区トレンチ設定図（1／400）



第9図 平成9年度調査地区全体図（1/400）

#### 調査地区的現況

調査地区は、戦後しばらく小区域の耕地として土地利用が図られていたが、その後植林が行われたようである。調査開始時点では山林となっており、尾根上をほとんど使用されなくなった山道が基部から先端方向へ向けて延びていた。

昭和59年度の分布調査においては、標高64.8mの高所を中心として円墳を、調査開始に伴う伐採後は、この高所を後方部とする前方後方墳の可能性が指摘されたが、この形状は耕作による地形変更と開削地の構築に起因するものであった。また、尾根の北側に開削地及び道路跡が検出されているが、調査前において開削地の堆積は薄く明かな平坦地となっており、一方、道路跡については完全に埋没し、現況においてその存在は確認されなかった。

#### 調査地区的堆積土層

調査地区的堆積土層は、第8図に示したトレンチの掘り下げにより、泥岩類の岩片を含んだ黄褐色砂質土層を基盤とし、その上が表土層となっていることを確認した。堆積土層は、尾根上という立地条件から堆積は薄く、表土直下が基盤層である砂質土層となる。基盤層は、地質的に起伏の激しさを示しているようで、波状の堆積となり、部分的に岩片の混入が確認されない部分もある。斜面については、北側に開削地などが構築された時点で、斜面下部へ向け開削により生じた土砂を盛土したようで厚い堆積を示している。また、標高62m前後の斜面においては粒径の粗い砂が認められ、この尾根の中腹以下、標高40m前後において上田子疊層が確認された。

### 調査の成果

平成9年8月4日から同年12月18日へかけて、1,270m<sup>2</sup>の調査を実施した結果、古墳時代初頭の方墳1基=第1号墳（S Z01）と調査地区を横断する形の道路址（S F01）、構築年代では最も新しい遺構となる開削地（平坦地、S X01）が検出された。

1号墳は、調査地区的最高所を中心方に方形を基調として構築され、西側に尾根を分断する形で浅い周溝を設けている。埴丘南側の斜面からは、埴丘盛土の流失とみられる崩落土が確認され、盃形土器と高杯形土器が出土し、この遺物と上部にあたる埴丘の形状や周溝から、古墳時代初頭の古墳であることが明かとなった。

道路址は、開削地よりも古い構築であるが、開削地の機能していた時期については一部が使用されていたと考えられ、西側の斜面及び開削地内へかけて1533個の火成岩が検出されている。この様は、いずれも自然礫で加工痕、使用痕、あるいは被熱の痕跡は確認されず、敷き詰められたという状況にはないが、礫頭の方向はまちまちで規則性が見られないことから人為的な構築を示している。

開削地については、本遺跡周辺の尾根には四十九坊の伝承があり、これにまつわる遺構の可能性を想定したが、これを裏付ける資料は得られず、性格については不明である。時期については、肥前の染付が出土していることから近世末の所産である可能性が高い。

## 第2節 平成10年度調査地区

### 調査地区の位置

平成10年度の調査地区は、三上神社の北西側の尾根上に存在する。調査地区は標高59.25mを計測する高所を中心にしており、北側は間尽遺跡から連なる開拓谷へ向けて下降する。尾根上を東側へたどると急激に下降し、平成11年度調査地区との境となる鞍部に立る。西側は平成9年度調査地区へと連なり、境となる鞍部までは緩やかな尾根となっている。また、この高所から南東へは小さな尾根が派生し、尾根を手洗野集落へ向けて下ると麓近くに三上神社が位置する。

### 調査地区的現況

調査地区は、ほかの調査地区と同様に、戦後しばらく小区域の耕地として土地利用が図られていたが、その後は植林が行われていたよう、調査開始時点では山林となっていた。尾根上には平成9年度調査地区から続く山道が尾根の先端方向へと延び、平成11年度調査地区との境となる鞍部で小谷を下り手洗野集落へ至る道と分岐する。小区域の耕地は、南東方向へ派生する尾根の基部にあたる南側斜面に多く確認され、平均面積は22m<sup>2</sup>程度で、主として半畠の栽培を行ったいわゆる段々畑状である。一方、北側斜面は植林時の痕跡として、所々で段切り状の地形となっており、このため、昭和59年度の分布調査においては、標高59.25mの高所を後方部とする前方後方墳の可能性が指摘されていた。

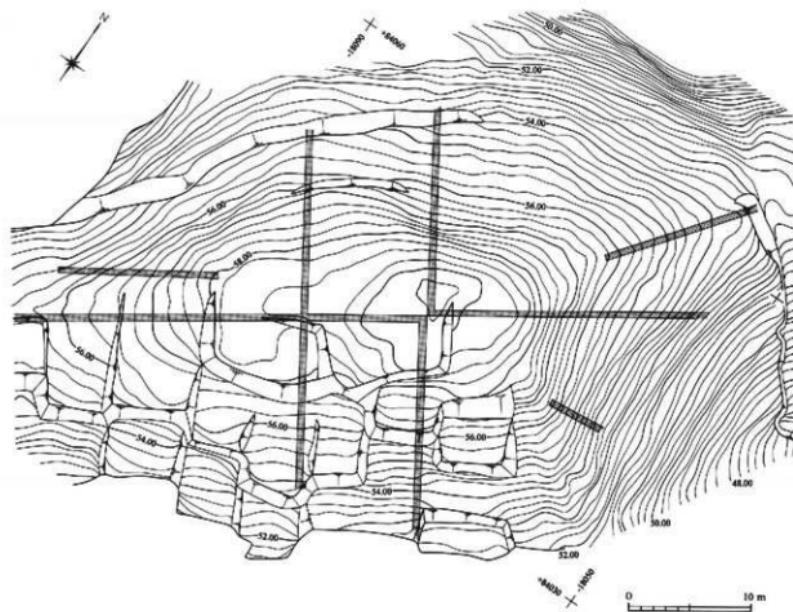
平成9年度調査地区から続く道路址については、尾根の南側に位置を変えるが、調査地区的西半分は耕地面積が著しいこと、東半分については南へ向け開口する谷の谷頭にあたることから堆積土が厚く、現況での確認はできなかった。

### 調査地区的堆積土層

調査地区は、泥岩類の岩片を含んだ砂質土層を基盤とし、その上が表土層となっている。堆積土は尾根上という立地条件から薄く、斜面部が厚い堆積となっている。尾根上は表土直下がすぐに黄褐色砂質土層の基盤層となり、旧表土は残されてはいない。また、平成9年度調査地区と同様に、基盤層は地質的に起伏が激しく波状となるため、泥岩類の岩片の混入が認められない場所もある。

斜面については、南側の小区画の耕地が、第10図で示したトレーニング設定による上層の観察から、地山をL字状に削り、その際生じた土砂を斜面に押し出しあるいは盛土し、耕地を作り出していることが判明した。したがって、この部分についても旧表土層は遺存せず、堆積土層は耕地として使用された痕跡である腐植土層が主体となっている。

一方、古墳が築造された標高59.25mの最高所を中心に、北及び南東の斜面には、遺物を含有した黄褐色土層及びにぶい褐色土層が堆積し、その下から旧表土層が確認されている。このことにより遺物を含んだ黄褐色土層及びにぶい褐色土層は、墳丘盛土の流失土と判断された。



第10図 平成10年度調査地区トレーニング設定図 (1/400)

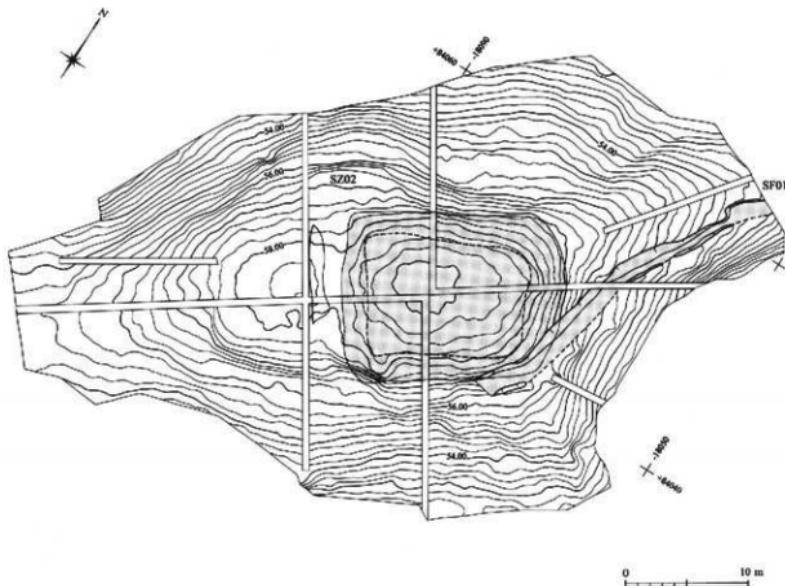
### 調査の成果

平成10年8月3日から同年12月18日へかけて、2,100m<sup>2</sup>の調査を実施した結果、古墳時代初頭の古墳1基=第2号墳（S Z02）と調査地区を横断する形の道路址（S F01）が検出された。

2号墳は、調査地区的最高所を中心に方形を基調として地山を成形し、西側には尾根を分断する形で周溝を設けている。1号墳の調査時には、出土遺物が少なく時期を特定するための資料は乏しかった。しかし、本年度の調査では、北側斜面に堆積した墳丘盛土の流失土と想定される崩落土中より、古墳時代初頭に比定される供獻土器を主体とした土器類が出土したため、時期を明確にすることができた。

道路址は、平成9年度調査地区から続くもので、尾根の北側斜面に作道されていたのに対して、本年度の調査地区では南側となっている。周辺からは、13世紀後半から14世紀前半の青磁の香炉片が出土しており、道路址の時期あるいは性格について検討する上での資料が得られている。

さらに、昭和59年度に実施した分布調査において、次年度調査地区との間に幅3m程の溝を確認しているが、トレンチ調査により尾根が狭まる鞍部の自然地形であることが明かとなった。



第11図 平成10年度調査地区全体図（1/400）

### 第3節 平成11年度調査地区

#### 調査地区的位置

平成11年度の調査地区は、遺跡の立地する尾根のほぼ中央部に位置する。調査地区は標高55.5mを計測する高所を中心とし、北側は間尽遺跡から連なる開析谷へ、南側は手洗野集落へ向けて急激に下降する。尾根上を東へたどると平成12年度調査地区へ、西へたどると2号墳が調査された平成10年度調査地区に至る。次年度調査地区の境と3号墳が構築された最高所との標高差は7m、平成10年度調査地区的境とでは1mで緩やかな尾根となっている。

#### 調査地区的現況

調査地区は、平成9・10年度調査地区と比べて、耕地として土地利用が図られている頻度は低いものの、斜面を主体として植林は行われていたようだ、調査開始時点では土に山林となっていた。尾根上には平成10年度調査地区から続く山道が更に先端方向へ延びていく。北側斜面にはほかの調査地区と同様に植林時の痕跡として、所々に段切り状の地形が確認される。

昭和59年度の分布調査では、標高55.5mの高所を中心に尾根方向に半軸を持つ方墳の可能性が指摘されており、調査成果との合致をみている。

平成9・10年度調査地区から続く道路址については、過去の調査と比べると大規模な構築状況が認められているものの現況での確認はできなかった。

#### 調査地区的堆積土層

平成9・10年度調査地区と同様に泥岩類の岩片を含んだ黄褐色砂質土層を基盤とし、その上が表土層となっている。堆積土は尾根上という立地条件から薄く、斜面部が厚い堆積となっている。尾根上は、表土直下が基盤層となり、東へかけて粒径の粗い砂層となる。斜面については、南側に占墳が構築された最高所から、盛土の流失とみられる遺物を含有する崩落土が堆積しており、その下から旧表土が確認されている。

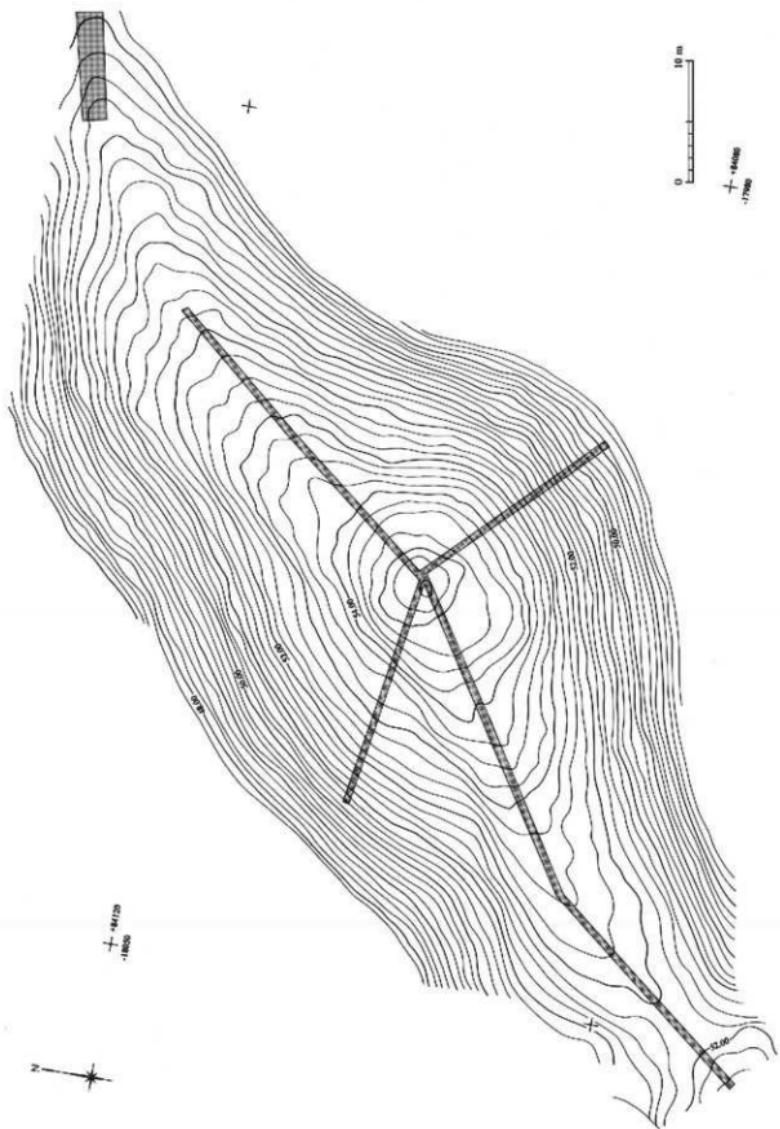
#### 調査の成果

平成11年6月21日から同年11月18日へかけて、2,000m<sup>2</sup>の調査を実施した結果、古墳時代初頭の方墳1基=第3号墳(SZ03)と調査地区を横断する形の道路址(SF01)が検出された。

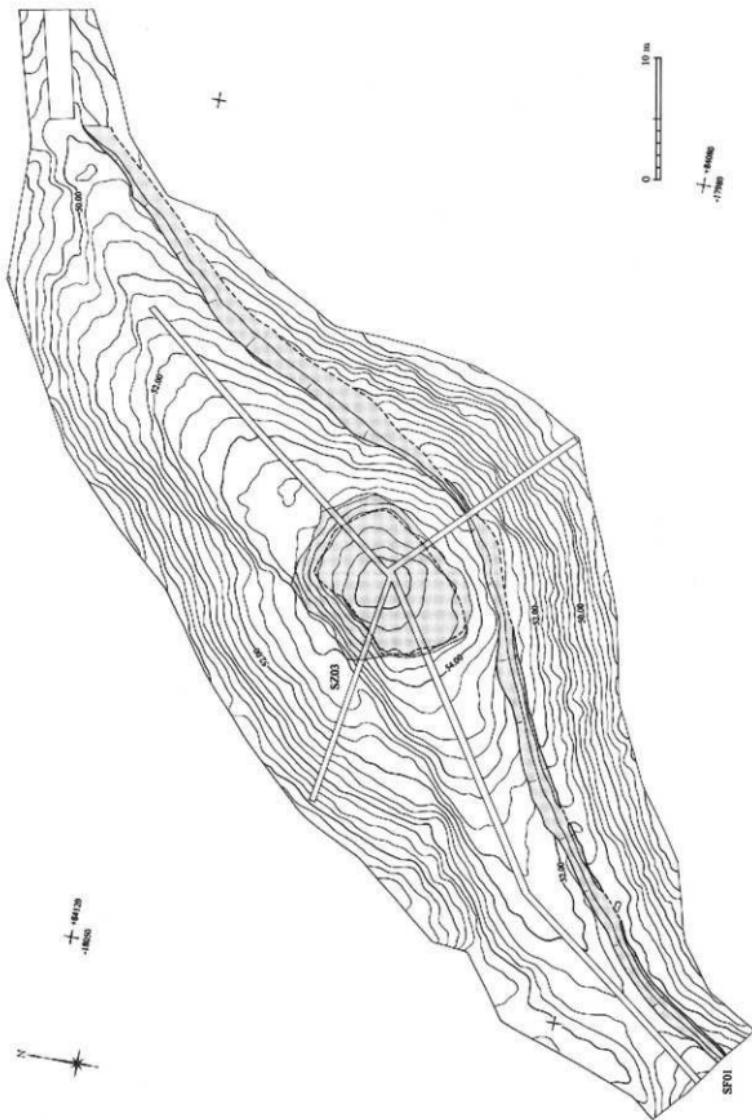
3号墳は、調査地区的最高所を中心に方形を基調として構築されており、北及び東側には地山削り出しによる成形痕が確認され、耕作により埴丘は改変を受けているものの、辛うじて盛土が遺存していた。これまでの調査において盛土が確認されたのは今年度の調査が初めてであり大きな成果であった。また、盛土については、全量をふるいにかけたが、得られた遺物は土器細片のみで、埋葬施設の存在を示す資料は得られなかった。

道路址は、平成9年度調査地区から続くもので、平成10年度調査地区が尾根の南側斜面に構築しているのと同じく本年度の調査地区も南側斜面となっている。なお、本遺構が検出されたのは今年度の調査地区までであり、平成12年度の調査においては確認されていないことから、間尽遺跡の位置する北側の開析谷へ向けて急激に下降すると推測される。

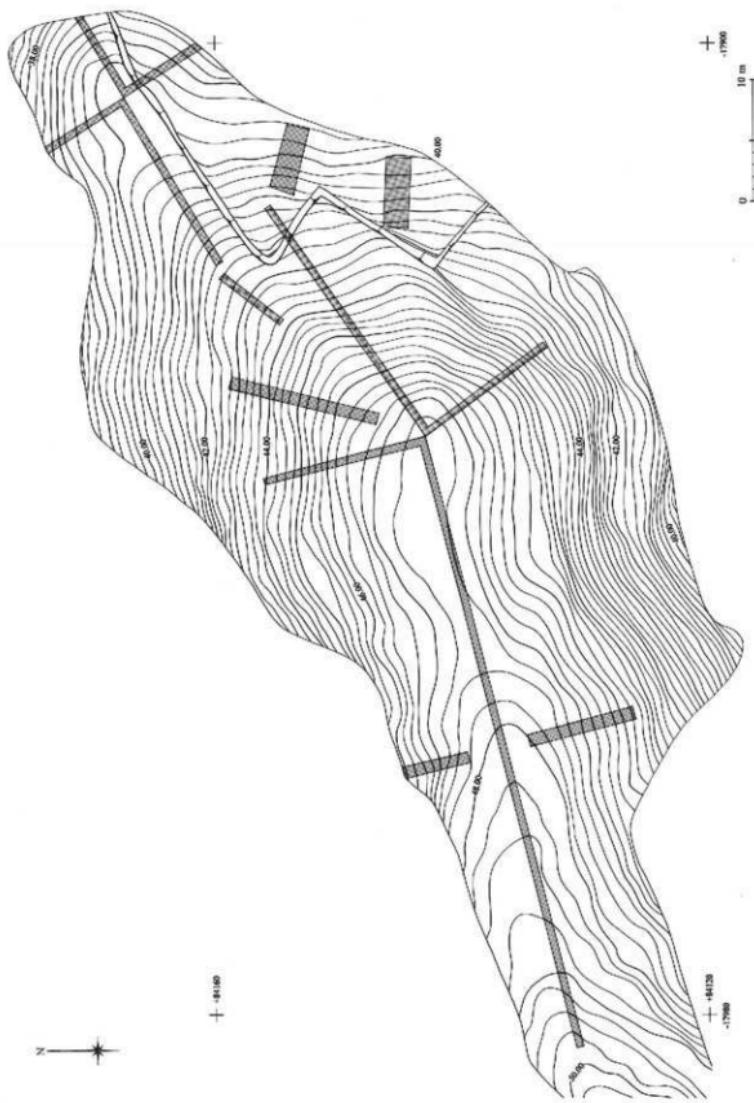
出土遺物については全体に少なく、遺物は古墳6基のうちで最も少ない出土状態となっている。一方、遺構外の出土ではあるが、IH石器時代の石刃が1点出土している。高岡市内における旧石器の発見は希少であり、岩崎遺跡や岩崎御庭先遺跡等で発見されているものの、いずれも表採資料である。今回の出土について



第12図 平成11年度調査地区トレチ設定図（1/400）



第13図 平成11年度調査地区全体図 (1/400)



第14図 平成12年度調査地区トレンチ設定図（1／400）

も表土中であるため層位的に把握はできないが、本市域の旧石器文化を考える上で重要な資料である。さらに、道路址内ではないものの、周辺部から珠洲の器及び中世土師器の皿が出上しており、道路址との関連を示している。

## 第4節 平成12年度調査地区

### 調査地区の立地

平成12年度の調査地区は、遺跡の立地する尾根の末端部に位置し、手洗野古墓群に隣接する地区である。調査地区を地形的に大別すると、西と東部分に分けられ、西部分はこれまでの調査地区と同様に、4号墳が営まれた標高47.3mを計測する高台を中心とした地形である。東部分は西部分から急激に下りおりた傾斜の緩い平地に近い地形となっている。北側は間尽遺跡から遙なる崩折谷へ、南側は、手洗野集落へ向け急激に下降する。この尾根は西部分に営まれた6号墳の先で、手洗野古墓群を経て急激に高度を減じ間尽遺跡の立地する崩折谷となる。4号墳が構築された高所と5号墳との比高差は約7.1m、5号墳と6号墳とは約3.1mである。一方、西部分をさらに西へたどると3号墳が調査された前年度調査地区に至る。4号墳と調査地区境の標高差は2mで、4号墳へ向け緩やかに下っている。

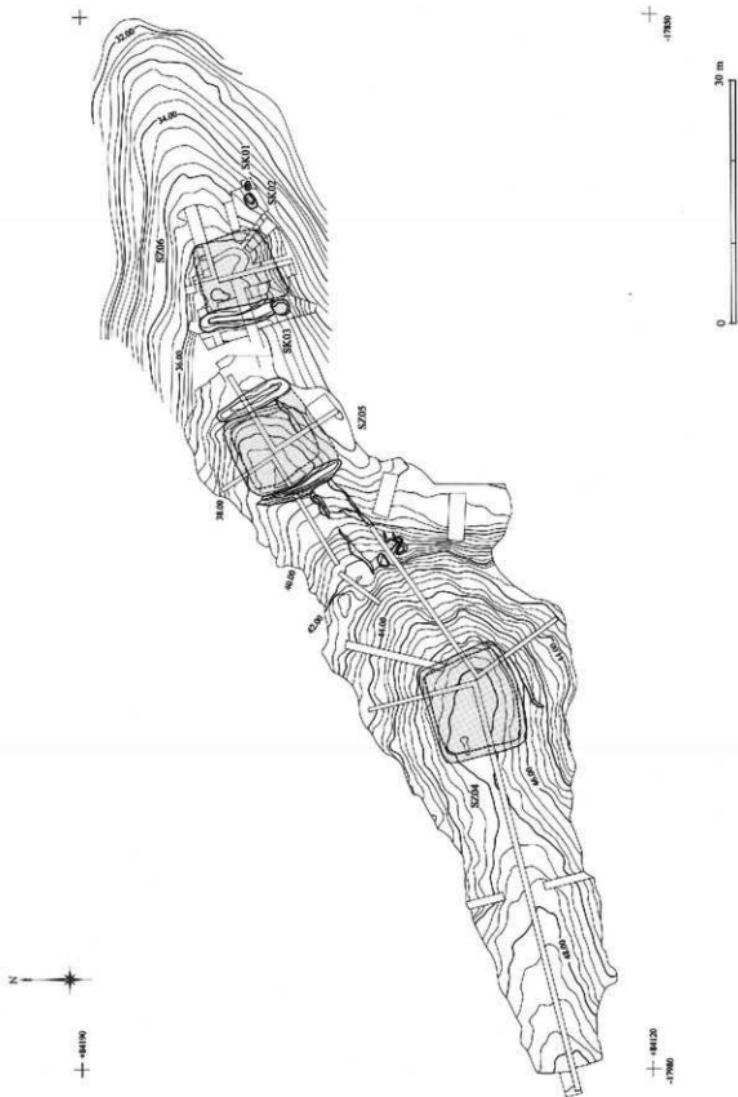
### 調査地区的現況

本年度調査地区は、平成9・10年度の調査地区と比べ耕地として土地利用が図られている割合は低いものの、4号墳の営まれた調査地区的高所から6号墳へかけての南側斜面には、比較的大型の耕地が段々畠状に開削され、比較的近年まで使用されていた。このため5号墳の南2分の1程は削平を受け消滅しているが、これが幸いして西側に設けられた周溝部分の僅かに窪む状況が読みとれる。そのほかの部分については植林が行われていたよう、調査開始時点では山林となっており、尾根の北側斜面には、これまでの調査地区と同様に所々に段切り状の地形が確認される。尾根の先端から5号墳付近までは山道となっており、標高も低く集落に近いことから、耕作地としての利用期間の長さを物語り、比較的しっかりとした構築となっている。6号墳は、5号墳の東に位置する標高37.0m程の僅かな高まりで、中央部を手洗野集落へ至る山道が東西に貫く。周辺は竹林を主体に雜木が混生している。

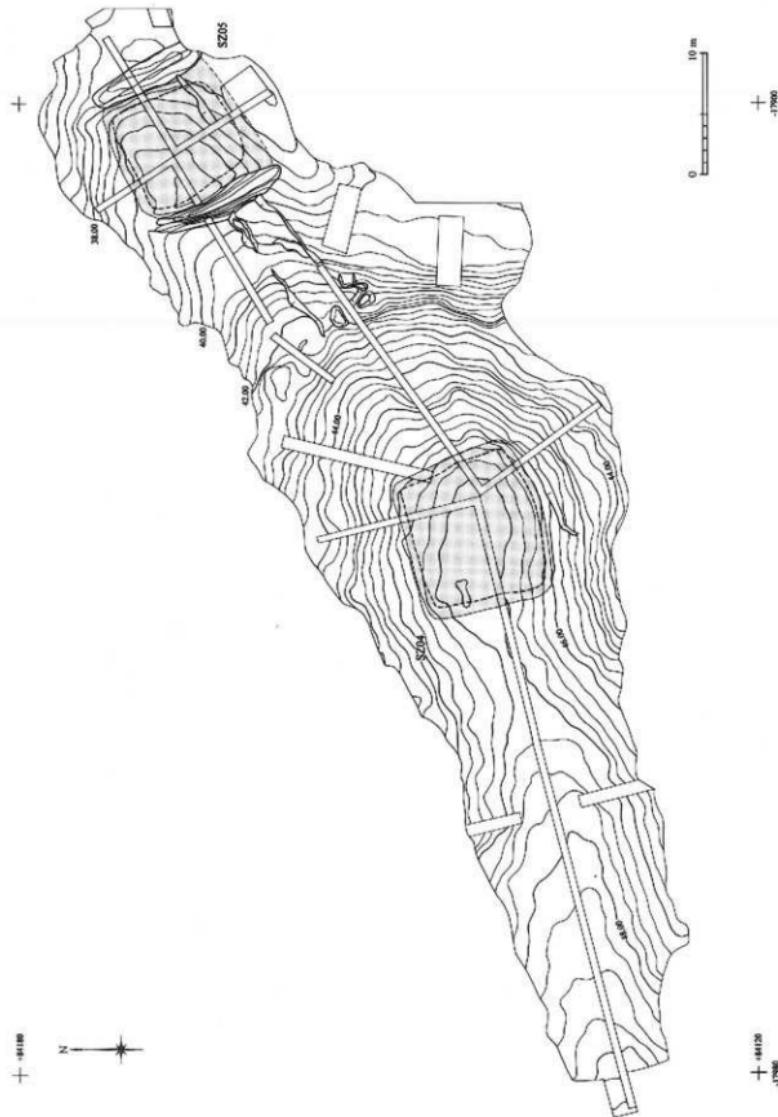
### 調査地区的堆積土層

調査地区的高所にある4号墳周辺は、これまでの調査地区と同様に泥炭類の岩片を含んだ砂質土層を基盤とし、その上が表土層となっている。堆積土は尾根上という立地条件から薄く、旧表土層は確認されていない。斜面については、主として南側に、古墳が構築された最高所から崩落したと見られる遺物を含有したぶい黄褐色土層が堆積しており、下部から旧表土層が確認され、埴丘盛土の流失を示している。とくに、4号墳の南東部で5号墳の南側は、手洗野集落へ向け開口する緩やかな谷の谷頭部分にあたっているため、この状態は顯著で、上部からの崩落土や耕作土が混ざり合って腐植土化した様子が観察される。

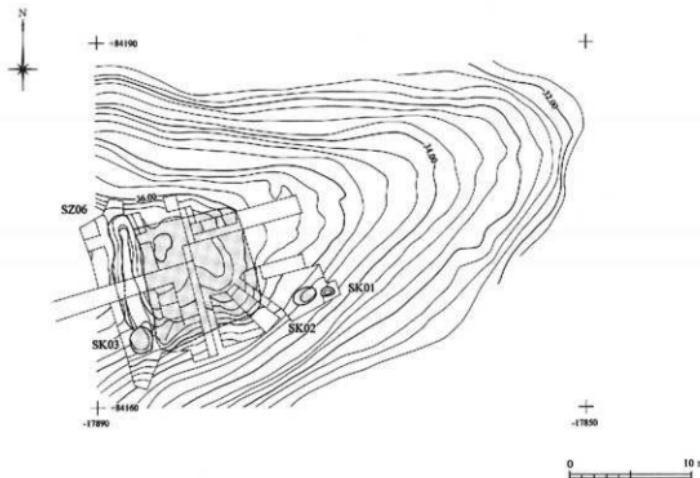
3号墳が立地する地形は現況では緩やかな幅広い尾根となっているが、南側斜面に対してトレンチを3本掘り下げて地形の把握を行った。この結果、谷は急激に下降することが明かとなり、現状でみるよりも瘦せ尾根上に盛土を行って埴丘を成形したことが判明した。



第15回 平成12年度調査地区全体図（1／600）



第16図 平成12年度調査地区部分図〔1〕(1/400)



第17図 平成12年度調査地区部分図〔2〕(1/400)

#### 調査の成果

平成12年8月28日から同年12月27日、及び平成13年3月14日から同年3月30日にかけて、2,500m<sup>2</sup>の調査を実施した結果、古墳時代初頭の方墳3基=第4・5・6号墳(SZ04・05・06)を検出した。

4号墳は、調査地区の標高47.3mの高所を中心に方形を基調として構築されており、北及び東・南側では成形痕と見られる地形の変化が捉えられている。また、地形的には1・2号墳と同様な立地条件にあるが、緩やかな尾根が続く西側に周溝は確認されていない。

5号墳は4号墳の東、標高40.1mを中心にして構築され、耕作により墳丘は改変を受けているものの盛土が残存し、墳丘の東と西側に尾根を分断する形で周溝が直線状に設けられている。遺物は地山直上、崩落土中、耕作土中からの出土で、全体として南側に偏在する傾向を示し、墳丘よりの崩落土中に多く含まれ、北側からの出土は少ない状況にある。

6号墳は、5号墳の東に確認された標高37.0mの高まりに対して試掘調査を実施したところ、西側に周溝が認められ、地山成形の痕跡と出土遺物により方墳と判断された遺構である。部分的に拡張して調査を行った結果、墳丘の盛土が明かとなり、裾部分から墓壙と推定される土坑が確認されている。

なお、6号墳の東にある手洗野古墓群の平場上段の東端部に僅かな高まりが認められたため、古墳に相当する構造か自然地形かを判断するために試掘調査を行ったが、周溝及び地山成形の痕跡は確認されなかった。さらに、4号墳と5号墳との間中が壇状の地形をなしていることから、遺構の存在を考慮して調査に臨み、最終段階でトレンチを掘り下げたが、遺構と判断する資料は得られていない。

## 第3章 古 墳

### 第1節 第1号墳

#### 位置と立地

第1号墳（S Z01）は、平成9年度調査地区のほぼ中央部に位置し、本調査地区的標高64.8mを計測する最高所に立地する。

座標値の概数は、X = +84000、Y = -18140である。

墳丘が載る地形をみると、東側は急激に下降し、比高差約10mの鞍部を経て尾根の先端方向である2号墳へと至る。2号墳との距離は約80mである。西側は尾根の基部へと続くもので、調査地区内においては約40mほど緩やかな傾斜が続き、東側とは対照的な地形となる。北側は間尽遺跡から連なる削除谷へ向け急激に下降し、南側はこの高所を分岐点とした小さな尾根が南に向けて派生する。この尾根は、現在では失われており、大きく削り取られた急峻な崖となっているが、以前には国上山信光寺の駐車場付近まで張り出していたという。

1号墳は、小さな尾根が枝状に派生する分起点に位置する。小矢部川の沖積地から望むと、東へ向けて高度を減ずる尾根の高所に営まれている。

#### 現況

墳丘西側の緩斜面には耕作の痕跡が確認されているものの、使用の割合は低かったようで墳丘には及んでおらず、現況は山林となっていた。調査前には、地影れ状の地形が認められ、直径8m程の円墳に想定されていた。調査に伴い実施された伐採後には、墳丘付近は辛うじて方形基調の地形が読みとれる程度で、周溝部分についてもその痕跡を捉えることはできなかった。むしろ、北側斜面に構築された削除地のため、從来の尾根が括れた形状となり、1号墳が営まれた高所を後方部とする前方後方墳の可能性が指摘されることとなった。

墳丘を中心とする調査地区一帯には、直径20~60cmほどの樹木が生い茂っていた。このため、墳形の検出には困難な状況であった。

#### 墳丘

古墳時代初頭に築造された方墳である。

古墳の平面形態の把握については、基本的に地山層に残された墳丘基底部の削り出しによる成形痕と考えられる加工痕をもって行った。これにあたっては、西側は周溝を伴っていることから確定し、北・東・南側部分についても、僅かではあるが段状を呈する地形の変化が捉えられ、とくに、北側部分と南側部分は、墳丘の西側に直線状に穿たれた周溝の途切れる部分と合致することから、この地形の変化は古墳築造に伴う地形成形痕と判断した。

規模は、基底部の計測により、東西9.70m、南北8.90m。東側基底部からの全高は0.49mを計る。主軸方向は、N-82度-Eである。

盛土は、推定されるものの流失したとみられ遺存していない。墳丘を中心とする一帯の堆積土層は、尾根上ということもあり、薄く表土化しているため旧表土層は確認されず、盛土の流失については、傾斜地となる北・南・東側のうちの南側でのみ認められ、流失土と判断される明褐色土層と褐色土層中に遺物の含有が確認された。

埋葬施設は、墳丘内の地山面には痕跡を残しておらず、道路址と開削地の構築により掘削を受けた北側部分を除く周辺部においても確認されていない。おそらく墳丘内に営まれたであろう埋葬施設は、盛土の流失と共に消滅したと考えられる。また、墳丘以外についても、調査結果から墓壙は設けられなかったものとみられる。

周溝は、墳丘西側の尾根を分断する形で直線状に穿たれ、南側へ向け僅かに傾斜する。全長8.0m、確認面における上端幅1.80m、下端幅1.00m、深さ0.35mを計測し、断面形状は開いた皿状である。周溝内の堆積土は、上層に砂粒・小砂利を含んだ暗褐色土層と褐色土層が確認される。墳丘中軸線上の周溝底面と調査後の墳丘頂部との比高差は0.68mである。

構造にあたっては、小久部川流域の沖積地を見下ろす高台を利用し、長辺を尾根方向と合わせた方形を意識しての造りである。平成10年度調査地区に位置する2号墳との比高差は約4.8mを計測し、本古墳群の中で最も高所に位置している。構造においては、三方を急峻な傾斜地のままとし、西側の緩い尾根方向のみに周溝を穿って区画する。

墳丘の基底部は小砂利や泥岩類の岩片を含有した3層に分層される黄褐色砂質土層を基盤とする。この基盤層の周溝面を除いた3面を削り出し、周溝の掘り下げにより生じた土砂と共に盛土として使用したと推定される。墳丘の高さについては、盛土の上量が確定できないため提示できないが、埋葬施設の痕跡が全く残存しておらず、現状よりも高い位置に埋葬施設の構築を想定すると、周溝内の土量では約25m<sup>3</sup>と不足するため周辺部から搬入された可能性も考えられる。

#### 出土遺物

本遺構に伴うとみられる遺物は、墳丘を中心とする斜面において出土しているが、そのほとんどは現表土中の細片である。唯一まとまりを示しているのは、墳丘南側斜面より出土した壺形土器1点と、高杯形土器2点である。

出土位置は、墳頂部から南へ約2m下った地点で、墳丘盛土の崩落土と想定される明褐色土層と褐色土層中から出土したものである。以前の地形は、南に派生する尾根の上部にあたることから、崩落土が下部まで落ちず途中で止まったために発見されたものであるが、現地形は調査地区以下が切り崩されているためこれ以下の調査は不可能であった。

遺物番号1001の壺形土器は、すべて同一遺物と判断される土器片であるが、接合点が確認されないため、実測にあたっては、口縁部から体部上半の提示に止めたものである。この上器は、口縁部外面に擬円線文を施し、頸部の内外面はハケ調整を基本とする在地系「月影式」の系譜を引くものと判断される。1002と1003は、高杯形土器の脚部でいずれも杯部の検出はなされていない。1002は、脚が比較的長く作りも丁寧な土器である。

これら3点の上器は、まとまった状態での出土ではあるが、壺形土器については高杯形土器と比べ形状的にやや古い様相を帶びている。また、1001と1002については器面の風化は認められないが、1003の高杯形土器は、供獻されていた期間の長さを示すものか、あるいは焼成の状況および胎土によるものであろうか風化が著しく、いわゆるろけた土器と表現される状態であった。

## 第2節 第2号墳

### 位置と立地

第2号墳（S Z02）は、平成10年度調査地区のほぼ中央部に位置し、本調査地区的標高59.25mを計測する最高所に立地する。

座標値の概数は、X = -84045、Y = -18070である。

墳丘が載る地形をみると、東側は急激に下降し、比高差約7mの鞍部を経て尾根の先端方向である3号墳へ至る。3号墳との距離は約60mである。西側は尾根の基部方向にあたる1号墳へ続くもので、これとの境となる鞍部まで約25mほどが緩やかな傾斜となり、東側とは対照的な地形となる。北側は間々遺跡から連なる開析谷へ向け急激に下降し、南東側は古墳が築造された高所より手洗野集落へ向けて尾根が派生する。この尾根の東側は小谷となり、3号墳が調査された平成11年度調査地区との境となる鞍部が谷頭で、2号墳の南東面はこの小谷へ向け急傾斜地となる。

2号墳は、1号墳と同様に、東の先端へ向け順次高度を下げていく起伏のある尾根のうち、南へ向けて小さな尾根が枝状に派生する起点にあたる。小矢部川の沖積地から望むと、1号墳の東の一段低くなる高所に営まれている。

### 現況

調査地区的南側斜面を主体として、戦中・戦後の食料不足に伴い耕地に活用された旅路が、小区画の耕地として段状に確認される。耕地の後は山林となっていたようで、調査前の現況においては、この耕地に影響され、調査地区最高所を後方部とする全長30mの前方後方墳が想定されていた。調査に伴う伐採の後には、耕地の状況が明かとなり、調査地区的最高所を中心に方形形状の高まりが認められ、方墳である可能性が高まつた。

この小区画の耕地は、調査地区西側の尾根上から墳丘上にも及んでおり、最高所の上部は削平を受けている。このため、南と西側については耕作により形作られた地形となっていたが、北と東側斜面部についてはおぼろげながら墳形を読みとることができた。周溝部分は、耕作土で覆われている状況で、その痕跡は捉えられなかった。

### 墳丘

古墳時代初頭に築造された方墳である。

古墳の平面形態の把握については、基本的に斜面上部の地山層に残された墳丘基底部の削り出しによる成形痕と考えられる加工痕をもって行った。これにあたっては、西側は削溝を伴っていることから確定し、北・東・南側部分の三方については、墳丘底土の流失とみられる堆積土層と段状の地形変化をもって想定した。とくに、北側部分についてはこの削り出しとみられる地形の変化が、墳丘の西側に直線状に穿たれた周溝の途切れる部分と合致することからも、古墳に伴うものと判断される。一方、南側については道路址の構造と近年の耕地化のため判然としない状態であるが、東斜面に確認される削り出しの痕跡が南側へ続くことから概に推定した。

規模は、基底部の計測により、東西18.20m、南北13.30m。東側基底部からの全高は2.50mを計る。主軸方向はN-58度-Eである。

盛土は、推定されるものの流失したとみられ遺存していない。墳丘を中心とする一帯は、尾根上という立

地条件もあり薄い堆積状態で、耕地として活用されていたため擾乱され、旧表土層は確認されていない。埴丘盛土と想定される流失土については、傾斜地のうち北側と手洗野集落側から入る小谷へ向けた南と東側でのみ確認される。この流失土は、北側が黄褐色土層、南東側がにぶい黄褐色土層で旧表土層の上部に遺物を含有し、20～50cm程の厚さをもつ。

埋葬施設については、埴丘内の地山上には検出されておらず、調査地区内においても確認されなかった。ただ、周辺部に墓壙が構築された可能性は低いものの、耕作に伴う削平が著しいため断定はできない。埴丘内に含まれたであろう埋葬施設は、おそらく盛土の流失と共に消滅し、さらに耕作により削平を受けたものと判断される。

周溝は、埴丘西側の尾根を分断する形で直線状に穿たれ、南側へ向け僅かに傾斜する。全長8.0m、確認面における上端幅3.40m、下端幅1.50m、深さ0.32mを計測し、断面形状は開いた皿状である。周溝内の堆積土は、上層が褐色土層、下層が暗褐色土層で遺物を含有している。埴丘中央線上の周溝底面と埴丘頂部との比高差は0.90mである。

築造にあたっては、1号墳と同様にもともとの高所を利用して、長辺を尾根方向と合わせた方形を基調とした造りである。1号墳とは約4.8m、3号墳とは約4.5mの比高差をもつ。構造については、北・東・南側の三方を急峻な傾斜地のままでし、西側の緩い尾根方向のみに周溝を設けて区画する。

埴丘の基底部は、泥岩類の岩片を含んだ2層に分層される黄褐色砂質土層を基盤とする。この基盤層に対して、周溝面を除いた三面を削り出し、周溝の掘り下げにより生じた上砂と共に盛土として使用したと推定される。埴丘の高さについては、盛土の上量が確定できないため提示できないが、埋葬施設の痕跡が残存しておらず、現状よりも高い位置に埋葬施設を想定すると、周溝内の上量では約19m<sup>3</sup>と不足するため周辺部から搬入された可能性も考えられる。

#### 出土遺物

本遺構に伴うとみられる遺物は、埴丘を中心とする斜面及び周溝内において出土している。とくに北側斜面と小谷に面した南東斜面にまとまりをみせており、北側斜面においては、壺・高杯・器台・蓋・鉢・小型土器の供獻器種が集中している。いずれも旧表土層上の堆積土層中からの出土で、この堆積土は埴丘盛土の流失土と推定される。

遺物番号2001～2003は、壺形土器である。2001は、北及び東斜面にまたがって出土しており、丁寧な造りである。2002は、比較的大型と推測されるが器面の風化は著しく調整は不明である。2003は、周溝内の埴丘側底面から出土している。2004～2005は東側、2006～2008は北側斜面からまとまって出土したものである。2004はヘラ磨きによる調整で、内外面に赤彩が施される。2005は、杯部片とみられ比較的丁寧な作りで、おそらく2008と同型の高杯の杯部になるとみられる。2007及び2008は、楕円の浅い杯底部に外反して延びる口縁部をもち、脚は長く裾部で広がり在地系「月影式」の系譜を引く。また、この上器は器肉が薄く、口縁部片も得られているが接合点が確認されないため全ての器形を提示することはできなかった。2009・2010は、器台形土器である。2009は、有段の受部をもち脚はハの字状に開く。2010は、小型の製品で、東斜面からの出土である。形状は外反する受部をもち、受部端部は狭い口縁帶となる。2011は、脚部片で裾部で屈曲して開く。調整はヘラ磨きによるもので、外面に赤彩が施される。2012は、蓋形土器で、北側斜面より高杯・器台・鉢形土器と共に出土している。2013は、鉢形土器で、口縁部がいわゆる片口状を呈する。体部上半の接合資料であるが、胎土は精製されているものの器肉は薄く、接合には困難をきたした。2014～2016は、小型土器である。2014と2015は、壺形を呈し、体部の形状から底部は丸底を呈すると推測される。2016は、周溝

内から得られた資料で、底部の径と器肉の薄さから小型上器の範囲に含めたものであるが、ハケにより調整し、通有の板あるいは壺形土器の可能性もある。2017は、ミニチュア上器と判断される遺物で、東側斜面の下部において出土したものである。いわゆる手握状に成形し、指頭による圧痕が認められる。形状については皿状を呈しているものの、この時期の土器のなかには器種として皿が存在しないことから別の器種を意識して造られたと考えられる。

本遺構から出土している上器群は、胎土がきめ細く、海綿骨針の含有が顕著である。いずれも供獻器種を主体としていることからも、比較的器肉は薄く脆い土器である。色調は全体として白っぽく、浅黄褐色が多くみられる。

### 第3節 第3号墳

#### 位置と立地

第3号墳(S Z03)は、平成11年度調査地区のはば中央部に位置し、本調査地区の標高55.5mを計測する最高所に立地する。

座標値の概数は、X = +84100、Y = -18020である。

本遺構の立地する地形をみると、これまで調査が行われた1号墳と2号墳に比べて、墳丘は尾根の高所に営まれているものの、東と西の尾根側はそれぞれ緩やかに下降し、尾根の高所という印象は薄い状況である。墳丘の東側は尾根筋を先端方向へ向かうと1号墳に至り、平成12年度調査地区境との比高差は7mである。西側は鞍部を経て2号墳が位置し、鞍部との比高差は3.5mで、尾根筋は比較的緩やかに下降する。北側は間々跡跡から連なる開析谷へ向けて急激に下降し、南側は尾根とまでは捉えられないが、手洗野集落へ向けて僅かに張り出す地形がみられる。

3号墳は、起伏のある尾根のうち高所に築造されているものの、1・2号墳の立地に比べて尾根の起伏は緩やかとなっている。

#### 現況

地形に沿った形で地彫れ状の高まりが認められている。平成10年度調査地区との境となる鞍部付近から墳丘の営まれた高所へかけては耕作により擾乱され、この耕作は墳丘の西側部分まで及んでいる。耕地として使用された後は植林が行われており、埋没はしているものの斜面を中心として段切り状の地形が等高線に沿い水平にみられる。このため、調査前においては高所を中心として、東西8m、南北7mの方墳あるいはそれに類する遺構と捉えられていた。調査に伴い実施された伐採後において、西側に読みとれる方形基調の地形の変化は、耕作及び植林に起因するもので、全体として現況から平面形態を判断することは困難な状況であった。

#### 墳丘

古墳時代初頭に築造されたと推測される方墳である。

古墳の平面形態の把握については、地山成形の痕跡により行った。これにあたっては、尾根方向のうち東側で削り出しによる地山成形の痕跡が明瞭に確認され、西側においても耕作により墳丘は削半を受けている

ものの、表土化している耕作土を除去した段階で墳丘西側の裾部と判断される成形痕が遺存していた。南側については本造構構築以後の所産である道路址により潰されているが、僅かに残る成形の痕跡と、東側の墳丘裾部と西側の裾部の位置から墳形を推定した。北側も南側と同様な状況であり、これらのことから平面形態は調査後の状況において尾根方向に七軸をもつ方形と判断された。

規模は、基底部の計測により東西15.00m、南北13.30m。東側基底部からの全高は1.20mを計る。主軸方向はN 42度- Eである。

盛土は、大半が流失したとみられるが、東側のみで僅かながら残存する。内側において盛土が遺存しないのは耕作によるもので、確認された盛土は砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩類の岩片を含んだ褐色土層であり、墳丘東部分の狭い範囲に削平を免れ高さ0.42mで残存していた。墳丘の南北側は傾斜地となり旧表土層上に遺物を含有した流失土が堆積している。

埋葬施設については、墳丘からは検出されず、道路址の構築により掘削を受けている部分を除いた周辺部においても確認されていない。とくに、4号墳へ続く尾根上は比較的緩やかで平坦面を成しているが、この地区においても土坑などの遺構は検出されなかった。おそらく、道路址の作道は一部分に対して行われたものであり、尾根上の耕作も遺構を消滅させるほど厚い削平ではないことから、周辺においては墓壙は構築されなかっただと考えられる。また、墳丘内に設けられたであろう埋葬施設についても、盛土の流失と共に消滅したものと推測される。

構造にあたっては、起伏は緩やかであるものの尾根上の高所を利用し、長辺を尾根方向と合わせた方形を意識した造りである。平成12年度調査地区に位置する4号墳との比高差は約8.2mを計測する。構造においては、南北の二方を急峻な傾斜地のままでし、東・西側を緩い尾根方向とする。1・2号墳においてはこの緩い尾根方向に対して浅い削溝を設けているが、本造構においては周溝による区画は行われていない。周溝は設けられていないものの墳丘基底部に対して行われた削り出しによる成形痕が明瞭で、これにより区画の意図を果たしているものと判断される。

墳丘基底部は、泥岩類の岩片を含んだ黄褐色土層と、びい黄褐色砂質土層が水平に1層堆積している。この基盤層を削り出すことにより成形し、これにより生じた土砂を盛土に使用したと推定される。墳丘の高さについては盛土の土量が確定できないため提出できないが、僅かに残された盛土内には埋葬施設の痕跡が全く確認されず、現状よりも高い位置での構築を想定すると、地山を成形する際に生じた土量は以外と多く周辺部から搬入された可能性も考えられる。

#### 出土遺物

3号墳における出土遺物は、数量的には6基の古墳のうちで最も少ない状況にある。

本造構に伴うとみられる遺物は、墳丘を中心とする斜面の下部において出土しているが、そのほとんどは細片で占められている。この中で実測を行った遺物は壺形土器と甕形土器の3点で、器形の把握が可能な比較的大型の破片を提示した。

これらの出土位置は南側斜面の下部であり、墳丘盛土の流失土と想定される砂粒・炭化粒・泥岩類の岩片を含んだ褐色土層よりの出土である。

遺物番号3001は、甕形土器の口縁部片で形状は「く」の字状に外反する。縁の付着がみられることから器種を判断したものである。3002と3003は、壺形土器あるいは甕形土器の体部片と底部片で断片的な資料であり器形については不明である。3002は、ハケにより調整し、胎土は大粒の石英と海綿骨針を含み、焼成は良好で風化は認められない。

## 第4節 第4号墳

### 位置と立地

第4号墳（S704）は、平成11年度に実施された試掘調査により確認され、翌平成12年度に本調査が行われた遺構である。

本遺構は、調査地区のほぼ中央部に位置し、本調査地区的標高47.3mの高所に立地する。

座標値の概数は、X = +84145、Y = -17935である。

地形的には、3号墳の営まれた平成11年度調査地区から緩やかに下った端部に位置し、尾根の先端方向である東側は5号墳に向かって急激に下降する。前年度調査地区との比高差は約1.7mと低くなり、5号墳との比高差は約7.1mである。北側は間尽遺跡から連なる開拓谷へ向けて急激に下降し、南側は尾根とまでは捉えられないが手洗野集落へ向け僅かに張り出す地形がみられる。したがって、本遺構の北東側から南東へかけては5号墳を谷頭とする地形となっており、とくに、南東面は急傾斜地となっている。

このような地形は、遺跡の立地する尾根上では東端にあたり、これより東においては、尾根端部において確認される手洗野古墓群の立地する削平地で終わっている。

### 現況

地形に沿った形で地彫れ状の高まりが僅かに認められている。墳丘の西側で墳頂部から約15mの地点は、地形的に南と北から狭まり平面的に尾根筋に向かい括れた地形となっている。これにより墳丘の形状をおぼろげながら読みとることができる。耕作の痕跡は尾根上ではなく、墳丘東側の下方から5号墳へかけて段切りの痕跡が残る。現況は山林で直径20~50cmの樹木が尾根上から斜面へかけて生育している。

### 墳丘

古墳時代初頭に築造された方墳である。

古墳の平面形態の把握については、基本的に東側と南・北側に残る地山削り出しによる成形の痕跡により行った。これにあたっては、緩やかな尾根が続く西側には1・2号墳において浅い周溝により区画しているが、本遺構の場合周溝は構築されず北と南から狭まる地形により墓域を区画したものと捉えた。この地形は人工的なものではなく、自然地形を巧みに利用していると判断される。これらのことから平面形態は調査後の状況で方形であることが明かとなった。

規模は、基底部の計測により東西13.00m、南北11.20m。東側基底部からの全高は0.32mを計る。主軸方向はN-74度-Eである。

盛土は、推定されるものの流失したとみられ確認されていない。墳丘を中心とする一帯の堆積土層は、尾根上ということもあり薄く表土化しているため旧表土層は確認されず、流失土については傾斜地となる東と南側で認められ、流失土と判断される黄褐色土層中に遺物の含有が確認されている。とくに、5号墳方向は谷地形となっていることから、東から南へかけての斜面には旧表土層上に厚く堆積している。ただし、南斜面の下部にあたる標高42m付近は耕作により擾乱され、部分的に旧表土層および墳丘流失土層が確認されていない部分もある。

また、本遺構の東で5号墳との間には段状の地形があり、比較的遺物が集中して出土している。基本的に盛土は流失したものと想定しているが、墳丘を東斜面に崩し落とした可能性もある。ただ、この地区においては旧表土層は確認されているものの部分的に直上まで耕作が及んでおり、擾乱されているのが現状である。

埋葬施設については、墳丘内の地山面には痕跡を残しておらず、周辺部においても確認されていない。とくに、3号墳へ続く尾根上は比較的緩やかで平坦面を成しているが、この地区においても土坑などの遺構は検出されなかった。おそらく墳丘内に営まれたであろう埋葬施設は、盛上の流失と共に消滅したと考えられ、墳丘以外についても墓壇は設けられなかつたとみられる。

築造にあたっては、西側が高くなるものの、東側が急激に下降する高台の端部を利用し、長辺を尾根方向と合わせた方形を意識しての造りである。3号墳との比高差は約8.2m、5号墳とは約7.1mを計測する。構築にあたって三方を急峻な傾斜地のままでし、西側の緩い尾根方向は南北から尾根を狭める自然地形を利用し墓域とする。墳丘基底部は泥岩類の岩片を含んだ2層に分層される黄褐色土層とにぶい黄褐色砂質土層を基盤とする。この基盤層に対して一面を削り出し、これにより生じた土砂を盛土に使用したと想定される。墳丘の高さについては、盛土の上量が確定できないため提示できないが、土体部の痕跡が残存しておらず、現状よりも高い位置に埋葬施設を想定したとすると多量の土砂が必要となる。斜面の堆積土層は6基の占墳のなかで最も厚く、墳丘盛土に多量の土砂が用いられたことを示している。

#### 出土遺物

遺物は、墳丘を中心とする斜面において出土しているが、そのほとんどは墳丘の東側及び南側斜面の下部に集中している。これらは5号墳との間に位置する段状地形の下部にもある。この段状地形は4号墳側が高くなるものの、北側を意図する地山成形痕は認められず、ほかの一面向においても確認されないことから占墳とは判断されなかつたが、遺物の出土状況から自然地形を利用して祭礼の場あるいは墳丘を崩し落とした痕跡の可能性もある。これらの遺物は上器で占められ耕作土層と旧表土層との境から出土している。さらに、墳丘上の土器と接合関係にあることから墳丘よりの崩落を示すものと捉えられた。

遺物番号4001～4008は、壺形上器である。4001は、口縁部片で東斜面の下部にあたる段状地形上から、4002は、東斜面下部の耕作土直下から、4003は、東斜面下部の崩落土層中よりの出土である。この付近は耕作による擾乱が著しく、部分的な違いはあるものの耕作土を除去した段階で下部に旧表土層とみられる暗褐色土層の堆積が確認される。4004は、段状地形上部から出土した精製された土器でヘラ磨きにより調整する。4005は、東斜面下部の崩落土層直下からの出土で、口縁端部に最大径をもち底部が小さくすぼまる。調整はヘラ磨きで外面と口縁部内面に赤彩が施される。4006は、体部下半から底盤片で北東斜面中腹の崩落土層中よりの出土である。4007・4008は、ほぼ同一の形状を呈するとみられ、口縁部が短く外反し、体部中程に最大径を持ち底部が小さくすぼまる。調整はヘラ磨きで外面と口縁部の内面に赤彩が施される。4007が東斜面下部の崩落土層中、4008がその上部にあたる中腹の崩落土層中の出土である。4009は、高杯形土器としたが器台形上器の可能性もある。4010は、器台形土器である。比較的大型で受部と脚部が大きく外反し鼓状を呈する。胎土は沙っぽく風化が激しい。東斜面の崩落土層中よりの出土である。4011と4012は、蓋形土器である。4011は、蓋形土器としたものの紐部が大きく中央部が窪んでいる。倉谷古墳群においては2号墳より2012と本遺構の4011、4012の3点の蓋の資料が得られているが、紐部の形状を異にすることから台付蓋の台部、あるいは小型器台の可能性もある。4012は、東斜面下部の崩落土層中よりの出土で、焼成はほかの土器に比べて良好である。調整はヘラ磨きを基本とする。4013～4015は、小型土器で4013は段状地形上から、4014は、墳頂部と段上地形下部の接合資料で、4015は、東斜面下部よりの出土である。とくに、本遺物は2号墳2014・2015遺物と類似するものである。

これらの遺物は全體として胎土はきめ細かく海綿骨針の含有が確認される。色調は比較的赤みがかった土器が多数を占める。

## 第5節 第5号墳

### 位置と立地

第5号墳（S Z05）は、平成12年度調査地区の東部分に位置し、標高40.13mの僅かな高まりを中心として立地する。

座標値の概数は、X=+84170、Y=-17905である。

地形的には尾根上に占地し、尾根の先端方向である東側は緩やかに下降して6号墳に至る。6号墳との距離は約10mである。西側は急斜面を25mほど登ると4号墳が位置し、北側は間尽遺跡から連なる開拓谷へ向けて急激に下降する。南側は本道構を谷頭とする谷が手洗野集落へ向け落ち込んでいる。

木遺跡が立地する地形は、尾根の先端部分ということもあり、1～4号墳とは対照的な平坦地近い微傾斜する尾根となっている。

### 現況

地形に沿った形で地彫れ状の高まりが認められている。墳丘の東側は6号墳へ向け段状となり、西側は尾根に直交する形で、直線状の窪みが確認され周溝の痕跡が読み取れる。南側は大きく耕作により削平をうけ段切り状の地形となっている。北側については手洗野集落へ向け開口する開拓谷に向かって斜面で、随所に植林時の痕跡が確認される。現況においては墳丘の南側が耕地、そのほかが竹林であった。

### 墳丘

古墳時代初頭に築造された方墳である。

古墳の平面形態についてはほぼ正方形で、東側と西側に設けられた周溝により判断した。北側については、削り出しによる地山成形痕と周溝北側端部とが合致することから墳丘の裾とし、南側は耕作により消滅しているが、周溝の南端とを結んだ線を墳丘袖部と推測した。

規模は、東西10.00m、南北10.00m。北側基底部からの全高は1.10mを計る。この計測値については、東西の尾根方向は周溝を測り、南北については南側が耕作により削り取られているため、周溝の南端をあてた。規模についてはほかの遺構よりはやや小型であるが盛土が確認され、さらに、南側が谷になるため、現状においては大きな印象を受ける。主軸方向はN-59度-Eである。

盛土は、人半が流失したと想定されるが、高さ0.80mで残存する。盛土の構築にあたっては旧表土層上にぶい褐色土層及び暗褐色土層を盛り上げた状況が観察される。周溝内の堆積土は、黄褐色砂質土層で地山層に酷似した混じりの無い砂質土が底部まで確認され、墳丘構築後比較的早い段階での崩落と判断される。

埋葬施設については、墳丘内からは確認されず、周辺部においても確認されていない。おそらく墳丘内に當まれたであろう埋葬施設は盛土の流尖と共に消滅したと考えられ、周辺部においても墓壙は設けられなかつたとみられる。

周溝は、墳丘の東と西側の尾根を分断する形で直線状に穿たれ、南側へ向け僅かに傾斜する。東側が全長9.50m、上端幅2.40m、下端幅0.70m、深さ1.00m、西側が全長11.50m、上端幅2.40m、下端幅0.80m、深さ1.60mを計測し、断面形状はそれぞれU字形である。墳丘中軸線上の西側周溝底面と墳丘頂部との比高差は1.65mである。

構造にあたっては、痩せ尾根上の僅かな高まりを利用し方形を意識して造られている。6号墳とは約3.1m、4号墳とは約7.1mの比高差をもつ。構造については北と南側の一方は急峻な傾斜地とし、東と西側の

緩い尾根方向のみ周溝を穿ち区画する。墳丘の基底部の南側は泥岩類の岩片を含んだ黄褐色砂質土層を主体とする4層が水平に堆積し、北側斜面においては上位幾層が確認される。この基盤層に対して南北の一面を成形し、周溝の掘り下げにより生じた土砂と共に盛土に使用したと推定される。墳丘の高さについては盛土の土量が確定できないため提示できないが、埋葬施設の痕跡が残存しておらず、現状よりも高い位置に埋葬施設を想定すると、周溝内の土量では約35m<sup>3</sup>と不足するため周辺部から搬入された可能性も考えられる。

#### 出土遺物

本遺構から出土した遺物は、周溝内（5,100番代）と墳丘除去後に旧表土上から確認されたもの（5,200番代）とに大別される。資料掲示にあたっては、周溝内の遺物は底面からの出土で、墳丘の崩落土と想定される黄褐色土層が覆っていることから古墳の當まれた時期に近いと判断した。一方、墳丘除去の段階で旧表土層上から出土した遺物は、墳丘基底面の全面に確認されるものの比較的南側に偏在しており、古墳築造に伴う何らかの祭礼的痕跡の可能性を示している。墳丘盛土内からは上器片の出土はみられるものの、いずれも細片で数量的には少ない。また、遺物の出土量は比較的周溝と南側の斜面に集中する傾向を示し、とくに、西側周溝の南端部分からは完形に近い壺形土器が出土しており、古墳築造後に儀礼的行為により投棄破砕されたもの、あるいは南側に偏在して供献され崩落した痕跡の一通りが考えられる。

遺物番号5101～5121の土器は、西側周溝内の底面から出土している。5101～5110は壺形土器である。5101は有段の口縁部片で内外面にヘラ磨きを施す。5102～5104も形態化しているものの有段口縁の土器とみられる。5106・5108～5110は、周溝南端からまとまって出土した土器群である。5106は、完形品で押しつぶされた状態で出土した有段口縁をもつ大型品である。器面は比較的遺存しており風化は遜しくない。5108は、口縁部のみの出土であり、精製が良く内外面にハケ調整の痕跡を顯著に残す。5109は、ほぼ完形に近く口縁部が「く」の字状に外反する土器で、体部の形状及び高台状で厚底の底部から壺形土器としたものである。ハケにより調整を施す。5110は、ほぼ一個体分の上器片が出土しているものの器内は薄く、風化も激しいことから接合は困難であり図上で復元したものである。口縁部は有段で体部は球形を呈すると推測され、内面にのみハケ調整の痕跡を残し赤彩を施す。5111と5112は体部の形状から壺形土器としたものである。5113～5118は、盃あるいは壺形土器の底部片である。いずれもハケ調整を施す。5118は、小型土器の範疇に含まれる可能性もある。5119は、高杯形土器の脚部片と考えられるが脚の形状から器台形土器である可能性もある。5120は、小型の器台形土器の脚部片で、比較的小さな受部をもつと推測される。5121は、鉢形土器で西側周溝中央部の底面より10cmほど高い第18層中から出土している。底部は厚くハケにより調整し、胎土は比較的精良で浅黄褐色を呈する。

5201～5230は、墳丘盛土除去後の旧表土上から出土した土器群を主体とする。5201～5213は、壺形土器で、有段口縁の土器群と口縁部が比較的長く外反する土器群に分けられる。5205・5208・5209・5214には赤彩が施されている。5214～5219は、壺形上器で、5218の外面には煤の付着が観察される。また、5215は、口縁部外面に擬円網文を施す在地系の土器である。5220～5225は、盃あるいは壺形上器の底部片である。ハケによる調整を基本とするが、5221は、ヘラ磨きが施され小型の土器とみられる。5226は、高杯形土器の杯部片で、5227は器台の脚部片である。5228と5229は有孔の鉢形あるいは壺形土器とみられる。5230は、5121と同型の土器で、ハケにより調整を行い、比較的精良な土器である。

本遺構から出土した土器は、比較的壺形土器が多く見受けられ供獻土器が少ない状況にある。また、煤の付着が確認されるものもほかの古墳と比べ多くなっている。墳丘盛土除去後に出土した土器群は、風化が激しく、いわゆるとろけた土器と表現されるのを特徴としている。

## 第6節 第6号墳

### 位置と立地

第6号墳（S Z 06）は、平成12年度調査地区の東端部分に位置し、現況で標高37.0mの僅かな高まりを中心と立地する。

座標値の概数は、X = +84175、Y = -17885である。

今回の調査は、墳丘本体を中心とし、部分的に拡張を行ったものである。したがって、墳丘及びその周辺を広範囲に調査したものではなく、推定の部分が多くあり、本書においては、現時点における調査成果の提示とする。

地形的には、尾根上に占地している。尾根の先端方向である東側は、緩やかに傾斜し手洗野古墓群の削平地に至る。西は5号墳に約10mの距離をもって近接する。北側は間尽遺跡から連なる開析谷へ向けて急激に下降し、西側は5号墳を谷頭とする谷が手洗野集落へ向け落ち込む。

本遺跡が立地する地形は、尾根の先端部分ということもあり、1～4号墳のような地形とは対照的な微傾斜地で、この尾根は築造当初は比較的痩せ尾根であったと推測される。

### 現況

地形に沿った形で地蔵形の高まりが認められている。墳丘の中央部を5号墳周辺の耕地へ通じる山道が尾根先端方向から続き上部が削平を受けている。北側は手洗野集落へ開口する谷に向けた斜面で、随所に植林時の痕跡が確認される。現況は竹林と雑木の混生林である。

### 墳丘

古墳時代初頭に築造された方墳である。

平面形態は、ほぼ正方形で、西側に穿たれた周溝と、頂丘基底部に施された地山成形の痕跡により判断される。この地山成形による削り出しへは、墳丘北側と南部において顕著に行われており、この痕跡を捉えて墳丘の幅とした。

規模は、基底部の計測により、東西9.50m、南北9.50m。東側基底部からの全高は1.00mを計る。主軸方向はN 73度-Eである。

盛土は、大半が流失したと想定されるが、高さ0.42mで残存する。盛土の構造にあたっては旧表土上に砂及び砂質の褐色土層を盛り上げた状況が確認される。底溝内の堆積土層は明褐色土層及び褐色土層で地山層に酷似した混じりの無い砂質土が底部まで確認されることから、墳丘構築後の崩落土と判断される。したがって、これらは墳丘盛土と捉えられる。

埋葬施設については、今回の調査が試掘を主体としているため確認はされず不明である。しかし、倉谷古墳群の6基のなかで本遺構のみ、墳丘の周辺部において墓壙とみられる十坑が確認されている。おそらく、埋葬施設は墳丘内に营造されたものと考えられ、盛土と共に流失したか、あるいは遺存しているものとみられる。ただし、古墳時代前期まで構築され低盛土を伴う方形周溝墓の場合は、周辺に墓壙が検出されるものの、周溝に囲まれた範囲内には存在しない場合があり、埋葬施設が墳丘内に構築されていない可能性も傍かながら考えられる。

周溝は、墳丘の西側の尾根を分断する形で直線状に穿たれ、南側へ向け僅かに傾斜する。南側は十坑SK 03と重複しており、北側は、上位縫隙が端頭する部分で終わっている。計測値は、全長9.30m、上端幅2.30

～2.50m、下端幅0.90m、深さ0.94mを計測し、断面形状は開いたU字形で、墳丘中軸線上の周溝底面と調査後の墳丘頂部との比高差は1.05mである。

築造にあたっては、緩やかな斜面の僅かな高まりを利用し造られている。構造については北と南側の二方を急峻な傾斜地とし、東と西側の緩い尾根方向のうち西側のみ周溝を穿ち区画する。墳丘の基底部は砂質土層を基礎とする。この基礎層に対して、三面を削り出しによる成形を行い、周溝の掘り下げにより生じた土砂と共に盛土に使用したと推定される。

#### 第1号土坑（SK01）

6号墳の南東で、SK02の東側に位置する。平面形は横円形で、計測値は長軸1.12m、短軸0.73m、確認面からの深さ0.68mである。主軸方向はN-70度-Eを示す。堆積土層は褐色砂質土層の単層で、遺物の出土はみられない。位置や形状からSK02と同様に基壙の可能性が指摘される。

#### 第2号土坑（SK02）

6号墳の南東に位置する。平面形は横円形を呈し、二段掘りである。計測値は長軸2.05m、短軸1.20m、確認面からの深さ1.00mを測る。主軸方向はN-60度-Eを示す。堆積土層は2層からなり、褐色砂質土層の下に褐色土層と赤色顔料のある赤色粒子の混入層に分かれる。遺物は、1層と2層の境目から鉄製品（鍼）及び壺形土器、手捏土器が出土している。調査時における2層からは腐敗臭が認められ、墓擴の可能性が示唆される。

#### 第3号土坑（SK03）

6号墳の南西に位置し、調査時においては当初谷への落ち込みと考えていたが、周辺部の拡張により十坑と判断された遺構である。平面形は円形で、計測値は長軸2.10m、短軸0.73m、確認面からの深さ1.60mである。主軸方向はN-0度（南北方向）を示す。堆積土層は3層からなり、上から黒褐色砂質土層、灰褐色砂土層、灰褐色砂質土層が確認された。遺物は土器細片が出土している。本遺構の性格及び時期については今回の調査では明かとできなかったが、古墳の周溝の内端に位置することや、周溝との新旧関係が明確でないことから古墳との同時期性が推測される。

#### 出土遺物

今回の調査は6号墳の一部分に対して実施されたもので、遺物は主に周溝及び墳丘南側の地区を中心として出土したものである。また、6,200・6,300番代の土器と鉄製品は、墓擴と考えられるSK02よりの出土遺物である。

遺物番号6101～6107は、6号墳の出土で、或あるいは壺形土器の上器である。6101は、墳丘南東端の崩落上中、6102は、周溝の南部分、6104は、南西角の黒褐色土層中の出上で、比較的長い口縁部をもつ。6103・6105～6107は壺形土器の口縁部片で、6103が外面に擬凹線文を施す在地系の上器である。6106は、頭部を屈曲しやや直立気味に延びる口縁部で、いわゆる「能登型」と仮称される土器とみられる。6107は、口縁下端を尖らせる土器で山陰系の遺物と判断される。

6201～6206・6301は、SK02からの遺物で、6202が2層中、6206が1層と2層の境、ほかが1層中の出土である。礎ね土坑内の中央位から得られた資料である。6201は、壺形土器の口縁部片で、6202は、比較的小型の壺形土器、6203と6204は高杯形土器である。6205は、小型土器の壺形品で、6206は鉢形の手捏上器である。6301は、鍼とみられる鉄製品で、使いこまれたものかやや小ぶりである。

本遺構の遺物のうち土器については、ほかの古墳に比べ、在地系の土器にまじり、山陰系及び能登系などの外来系土器の混入が目立っている。

## 第4章 その他の遺構と遺物

### 第1節 開削地

#### 位置と現況

開削地（S X01）は、平成9年度調査地区から検出された遺構である。本遺構は北側斜面の標高62.5m付近に立地する。調査当初、耕作のための区画と想定したが、北側に位置すること、さらに単独で存在し周辺部において確認されないことから、これ以外の性格の遺構と考えられる。本遺構の立地する尾根上には四十九坊の伝承があり、これに関する遺構の可能性を追求したが、これを裏付ける資料は得られていない。

#### 構造

尾根の北側斜面をL字形に北へ向け開削し、これにより得られた土砂を斜面に盛上して平坦面を造り出した遺構である。平面形状は尾根方向に主軸をもつ長方形である。計測値は長軸11.0m、短軸10.0m、面積110m<sup>2</sup>で、北側の3m程は盛土により構築されたものである。削り出しはおおよそ尾根側を3m程切り、生じた土砂は33m<sup>2</sup>前後と推測される。また、道路址と重複しており本遺構が新しい。ただし道路址の上部には礫敷が検出され、開削地内まで及んでいることから、開削地構築時期には一部が機能していた可能性が高い。

#### 出土遺物

本遺構の北西斜面の表土層より肥前V期以降の端反小盃（7001）が1点出土している。さらに厳密に捉えれば遺構外の山上遺物といえるが、本遺構南西2mの尾根上から肥前IV期「くらわんか手」碗が出土しており、前者が18世紀末～19世紀前半、後者が17世紀後半～18世紀前半に比定される。

### 第2節 道路址

#### 平成9年度調査地区

本遺構（S F01）は、尾根の北側斜面をL字状に削平し構築された遺構で、続く平成10・11年度調査地区より同様の遺構が検出されており、道路址と判断したものである。検出総長は約225m、本年度の調査地区では47mを検出し、尾根の高所を避けて縦走している。作道にあたっては、尾根側を最大で2m程削り、幅1.0～4.5mの路面を作り出している。使用の痕跡である硬化面は確認されなかったが、これについては、砂質土を基盤としていることから風雨にさらされたため顯著な硬化を示さなかったとも考えられる。また、開削地付近から西の斜面には火成岩を主体とした1533個の礫敷が確認される。検出位置が上層であることから、本遺構が使用されてから一定期間を経た後埋没し、最終段階で礫敷された可能性がある。

#### 平成10年度調査地区

本遺構（S F01）は、尾根の南側斜面をL字状に削平し構築された遺構で、東は平成11年度調査地区へ、西は平成9年度調査地区へと続くものである。本年度は28mのみの検出であるが、調査地区的西半分は耕作による擾乱が著しく消滅している。作道にあたっては尾根側を最大で1m程度を削り、幅0.6～1.4mの路面を作り出し、尾根の高所を避けて縦走している。使用の痕跡である硬化面は確認されなかった。遺物は遺構内から出土していない。

#### 平成11年度調査地区

本遺構（S F01）は、尾根の南側斜面をL字状に削平し構築された遺構で、平成12年度調査地区からは確認されていないことから尾根を急激に下降するものとみられる。本年度の検出長は98mである。作道にあたっては尾根の高所を避けて、最大で1m程度尾根側を削り、これにより生じた上砂を谷側に押し出し、幅0.5～1.9mの路面を作り出している。使用の痕跡である硬化面は確認されなかった。遺物は出土していないが、周辺から遺構外遺物として取り扱った資料が得られている。

### 第3節 遺構外出土遺物

#### 旧石器

遺物番号8101～8104は、平成10・11年度調査地区から得られた資料である。詳細については別表中に示したが、いずれも表土中の出土で層位的に把握されるものではない。泥岩および硬質頁岩を素材とし、縦長剥片と横長翼状剥片を用いていることから旧石器と捉えたものである。8101は、縦長剥片を素材とした石刃で、正面右側をブレード、左側をスクレイバーとして用いている。8102は、使用痕のある剥片で、翼状剥片を2枚取った後に使用している。8103は、加工痕のある剥片で、ポイントを意識した未製品と考えられる。8104は、縦長剥片である。正面左側に直線状の剥離痕は、耕作時のものと判断される。

#### 土器・陶磁器

遺物番号8201～8209は、主として道路址との関係が示唆される一群である。いずれも表土より得られた資料で、8201は、土師器皿、8202～8206は珠洲の壺、須恵器系の陶器、8208・8209は青磁で、8208が鑄文碗、8209が香炉である。とくに8209は龍泉窯の製品で、算木文が施されていた可能性が高い輸入陶磁器である。これらの遺物は13世紀前半から14世紀前半に比定される。

#### 石製品

遺物番号8301～8305で、凝灰岩及び流紋岩を素材とした砥石の一群である。形状は基本的に方形であり、全面を比較的良く使い込んでいる。

#### 金属製品

遺物番号8401～8406で、表土中及び表採資料である。8401・8402は、平成12年度出土の直刃、8403は平成11年度出土の直刃の断片であり、古墳時代に通る可能性のある遺物である。8404は、不明品で形状的に斧類似するが、先端に刃部が造り出されておらず用途は不明である。8405は、刀子で反りが確認されることより古代あるいは中世の遺物と考えられる。8406は、1023年铸造の「天聖元寶（真）」である。

## 第5章 結語

### 1. 調査の成果

#### 調査成果の概要

平成9年度より12年度へかけて実施された、能越自動車道建設関連事業に伴う今回の調査は、倉谷古墳群のほぼ全域を対象として行われた。

倉谷古墳群は、古墳3基からなる周知の遺跡であったが、調査の結果、旧石器時代の遺物を最古とし、近世末へかけて断続的に営まれた複合遺跡であることが判明している。なかでも遺跡の主体となる遺構は、西から東北東へ延びる尾根上に築造された6基の古墳であり、出土遺物からは古墳時代初頭の極めて短期間のなかで営まれた墓域であることが判明し、時代が移り変わる転換期の墓制を知るうえで貴重な成果が得られている。

遺跡の主体となる古墳は次項において問題点を整理することにし、本項においては、これ以外の遺構・遺物について調査成果をまとめることとする。

#### 旧石器時代の遺物について

旧石器時代においては、平成11年度調査地Ⅹより石刃、平成12年度調査地Ⅺより使用痕のある剥片・加工痕のある剥片・縦長剥片が出土した。いずれも表土中からの出土である。

平成11年度に出土した遺物番号8001の石刃は、縦長剥片を素材とし、ブレード及びスクレイパーとして使用されたものである。平成12年度の調査において出土した8002は使用痕のある剥片で、翼状剥片を用いており、8003は、ポイントの未製品とみられる。8004は、耕作時の傷をもつた縦長剥片で、いずれも旧石器時代の遺物と判断される。

これらの石器及び剥片については、東日本型の縦長剥片と西日本型の翼状剥片を素材とし、石材は蛇岩及び硬質頁岩で、製作技術的に本時期と捉えられるものであるが、層位的に時期を明確にするものではない。ただ、旧石器時代の遺物が出土していることは、遺構は確認されなかったものの、本遺跡の立地する尾根上が旧石器人の行動範囲に含まれていたことを示す資料といえる。

高岡市内における旧石器の発見は希少である。高岡台地の北端部、占定塚地区の客土中から彫刀形石器が、二上丘陵の北端部、太田地区的岩崎遺跡から安山岩製のナイフ形石器や剥片・石核が、谷を挟んで対岸に位置する岩崎御庭先遺跡で剥片などの出土を確認するのみである。

西山丘陵上に管見にふれる遺跡は見られないことからも貴重な調査事例である。

#### 中・近世の遺構について

道路址は、平成9・10・11年度調査地区から検出された遺構で、尾根上の高所を巻きながら、西側の尾根基部から先端部へ向け縦走している。総長は約225mを計測しているが、確認されたのは平成11年度調査地Ⅹまで尾根の先端部は不明瞭となっている。平成12年度の調査においてはこの種の遺構は検出されておらず、急激に尾根下に向かうものと想定される。この尾根下の開析谷には、中世の遺構が調査されている間碑遺跡が位置する。

構造にあたっては、元々の地形が起伏があるため水平とは言い難いが、高所を避けながらできるだけ水平を意識して作成している。斜面を上端幅0.5～4.5m前後でL字状に削平し、この際生じた土砂を谷側に押し出して路面を作り出す。平成9年度の調査においては、遺構内に人为的に置かれた1533個の火成岩が確認されている。

本遺構は、構築状況から道路址と推定される遺構であるが、根拠の一つとなる路面硬化などの痕跡は確認されていない。このことは、地山が砂質土のため長年の風雨により、使用痕跡が消失しているとも考えられる。礫については、位置的に自然の礫層が確認される場所ではなく、瓦構造も見られず人為的な所産によるものと判断した。検出状況からは、凹凸が激しく路面確保のための礫敷とは認めがたいが、風雨により礫屑の土砂が流失した結果とも捉えられ、礫の分布が斜面を主体とすることから機能的可能である。

本遺跡の南西約2.5kmの開折谷の開口部に位置する麻生谷新生園遺跡においては、平成9年度の調査時に礫敷遺構が確認されており、本遺構はこれに類する機能であったと推測される。麻生谷新生園遺跡の構築年代は平安時代前期であり、本遺構の機能時期については、開削地との新旧関係により、開削地に遡る構築とみられるが、平成9年度調査地区の礫敷遺構は、その検出状況から開削地と同時期であったと解釈される。

開削地は北側に切り開かれた平坦地であり、北側に位置することから耕地であるよりは何らかの構造物のための削平地と想定して調査に臨んだが、存在を示す遺構は検出されなかった。開削地からは肥前V期以降、18世紀末から19世紀前半の肥前の端反小丑が出土し、本遺跡南西2mの尾根上からは肥前IV期の「くらわんか手」の碗が出土しており、17世紀後半～18世紀前半に比定される。

道路址内からは、遺物は出土していない。現況においては遺構の存在は認められず、調査以前まで使用されていた山道とも位置を異にすること、周辺部より13世紀前半から14世紀前半へかけての土器・陶磁器類が出土していることより、概ね中世に機能していたと考えられる。したがって、道路址の構築については、大きく2時期に分けられ、1期が13世紀前半から14世紀前半、2期が17世紀後半から19世紀前半となる。この2期目については、礫敷遺構が伴い開削地と関わりながら機能したと考えられるが、今回検出の道路址全てが機能したかについては明かにできなかった。

本遺跡周辺には、尾根上に四十九の堂宇が営まれた信仰の地とする四十九坊の伝承があり、尾根の先端部には、中世の墳墓群である手洗野古墓群が位置し、3段の削平地を造り出して墓域としている。尾根下の間谷遺跡は、数次にわたって発掘調査が実施され、中世に遡る遺構・遺物が出土し、さらに、手洗野地区には越中における最初の曹洞宗寺院として、元亨3（1323）年に豊山紹璽の衣鉢によって、その弟子である珍山源照により開山された岡上山信光寺がある。

岡上山信光寺は、室町時代に越中守護代神保氏や室町幕府の外護を受けた古刹である。文明10（1487）年に幕府は、永光寺（石川県羽咋市）とともに堂塔の修造にあたって諸国に勧進を命じており、信光寺の信仰の高さを物語っている。また、信光寺が建立された手洗野は、同じく豊山の弟子の壺庵至簡が創建した池田紹光寺（水見市）を経て、永光寺へ至る街道沿いに立地していることなどから、信光寺と永光寺との関係の深さが伺われる。

道は、何処かと何処かを結ぶもので、起点と終点が必ずあり、そして、何らかの目的をもって構築された遺構である。今回、検出された道路址については、ただ単に耕作に伴うものや山道としてではなく、明確な意図のもと大がかりに構築されたものと理解される。

これだけの作道を行うには、それなりの理由があるはずで、要因としては、経済的活動によるもの、あるいは信仰によるものなどが想起される。その要因については推測の域を脱しないが、遺跡の立地が山側部であることから、経済活動に伴うものとは考えづらく、むしろ、前述の四十九坊の伝承や國上山信光寺などの歴史的環境から信仰による所産の可能性が指摘される。

ただ、現時点で結論を出すには早急と言わざるをえず、遺構の性格を明かとするには、本遺跡の北西約3kmに位置する二ヶ城跡・三千坊伝承地関連地図との関わりや、周辺遺跡、さらには今後調査が予定されている間等遺跡を含めた総合的な検討が必要であろう。

## 2. 古墳

### 立地状況

古墳群は西側が高く、東北東へ向け樹枝状に延びる尾根上に築造されている。

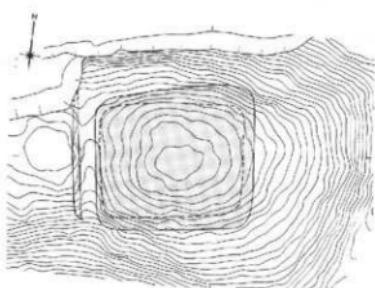
この尾根は北に開折谷、南に小穴部川が形成した冲積地を望む。形状的には先端へ向けて細くすぼまるため、計測地点によって多少数値は異なるが、麓の幅は最大で約170m、尾根上は約15mで、開折谷との比高差は約40m、沖積地とは約50mを計測する。この尾根は小穴部川から頸むと急激に高度をあげており、尾根上は比較的狭く馬の背骨を呈している。このため古墳の築造にあたっては、南北方向、すなわち尾根との直交方向に2基並列することは立地的に不可能であり、したがって、尾根に沿うかたちで直線的に6基が配置されることとなる。

6基の古墳の立地状況をみると、1・2・3・4号墳の4基は、起伏のある尾根のうち、支陵を派生させる分岐点の高所に位置し、5・6号墳が棱せ尾根上ではあるが傾斜の緩やかな斜面に築かれ、対照的な立地状況をみせる。このことは、5・6号墳の築造時にすでに4基の古墳が築かれており、築造される場所の限定期を示すものか、あるいは、4基に先行して5・6号墳が築造され、その際に意図して場所を選定したことのどちらかを意味する。さらに、1～4号墳から見た場合にも同様なことが考えられ、立地状況は、築造の前後関係をおぼろげながら示しているといえる。

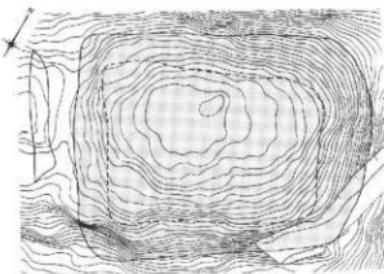
### 古墳の構造

各古墳の築造状況をみると、基本的には墳丘基底部の地山を削り出すことにより、墳形を長方形あるいは正方形に形成し、その上に削り出しにより生じた土砂を盛土する。形状及びその規模については、第18図と第1表において各古墳をまとめたが、基底部からみる形状は1～4号墳が長方形で、5・6号墳が概ね正方形となっている。規模も基底部による計測値では前者の長辺が9.7～18.2m、後者が10m前後とやや数値的には小型で、形態、規模共に2つに大別される。

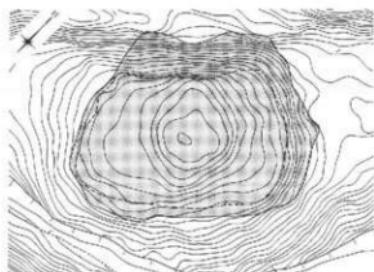
盛土については、3・5・6号墳において確認されているが、比較的尾根上の平坦地に築かれている5・6号墳の遺存が良い。ほかの古墳についても、斜面に遺物を含有した崩落土と推定される砂質土が厚く堆積しており、盛土が存在したことは明かである。1～4号墳の立地が尾根の高所にあたることから、風雨にさらされ、砂質土を用いていることにより流失したものと考えられる。具体的にどれだけの高さがあったのか実数値については提示できないが、四隅突出型という形態ではあるものの、婦中町で調査された六治古塚や富崎墳墓群の例をみても、墳丘は高く傾斜角度も約40度前後と急であるなど高塚が想定される。5号墳においては、削溝の掘り下げ角度を考慮すると、約35度前後の傾斜角度となり、墳丘の斜面は急であったと推測



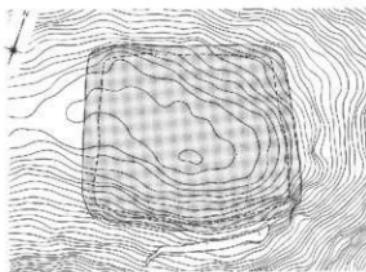
第1号墳



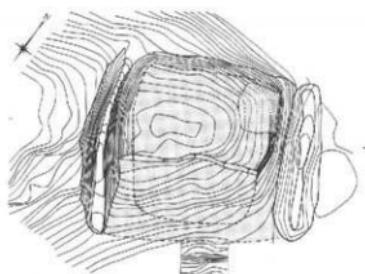
第2号墳



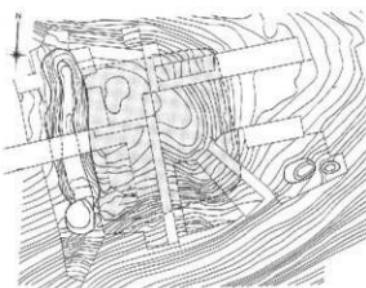
第3号墳



第4号墳



第5号墳



第6号墳

0 5 10 m

第18圖 倉谷古墳群古墳平面形一覧図 (1/300)

遺構名	形態	規模	外施設
第1号墳 (S Z01)	長方形 西側に周溝有 盛土遺存なし	東西の長さ 9.70m 南北の長さ 8.90m	周溝 上端幅1.80m、下端幅1.00m、深さ0.35m
第2号墳 (S Z02)	長方形 西側に周溝有 盛土遺存なし	東西の長さ 18.20m 南北の長さ 13.30m	周溝 上端幅3.40m、下端幅1.50m、深さ0.32m
第3号墳 (S Z03)	長方形 周溝なし 盛土遺存有	東西の長さ 15.00m 南北の長さ 15.30m 盛土の高さ 0.42m	
第4号墳 (S Z04)	長方形 周溝なし 盛土遺存なし	東西の長さ 13.00m 南北の長さ 11.20m	
第5号墳 (S Z05)	方形 東側・西側に周溝有 盛土遺存有	一辺の長さ 10.00m 盛土の高さ 0.80m	周溝 東側：上端幅2.40m、下端幅0.70m、深さ1.00m 西側：上端幅2.40m、下端幅0.80m、深さ1.60m
第6号墳 (S Z06)	方形 西側に周溝有 盛土遺存有	一辺の長さ 9.50m 盛土の高さ 0.42m	周溝 上端幅2.30～2.50m、下端幅0.90m、深さ0.94m

第1表 倉谷古墳群一覧表

される。さらに、遺物の出土状態や周溝内の覆土は、地山層に酷似した混じりのない砂質であることから、盛土は築造後比較的早い段階に流失したものと考えられる。

また、築造に伴うテラス面については確認されていない。1・2・4号墳の場合は、尾根上の西側が傾斜は緩く、3・5・6号墳については東西の尾根方向が傾斜はあるものの、平坦地に近い地形となっている。ほかの斜面は傾斜がきつくテラス面を築きにくい立地条件で、テラス面が必要であれば尾根上の比較的平坦地がその機能を担っていたものといえる。

墓域の区画については、1～4号墳は尾根の高所に位置しており、地形を巧みに利用している状況にある。これらは、基本的に尾根の先端方向である東側が急激に下降し、反対側である西側が緩やかな尾根となっているため東側には区画する必要がない状況にある。1・2号墳は、西側のみ尾根に直交する形で浅い溝を設け、3号墳の場合は周溝は構築せず、削り出しにより墳丘基底部を成形しその痕跡が顕著である。4号墳は、墳丘西側に続く緩やかな複数尾根と南北に入る谷などの地形を利用し、やはり周溝は設けられていない。5・6号墳については、比較的傾斜の緩やかな斜面に築かれていることから、ほかの古墳が自然地形を利用しながら墓域を形成するのに対し、大規模な周溝を構築している。この周溝は、5号墳は東と西の两侧にしっかりと設け、6号墳は5号墳と近接する西側のみ構築し、明確な区画の意図が読みとれる。

以上、これらの構造については、立地条件の違いはあるものの、6基はほぼ同一の形状を示しているといえる。しかしながら、一方で、微細な形状の違いや、周溝の有無などの構造を細かくみると、以下の通り細分も可能である。

- 尾根の高所に位置し、西側のみ浅い周溝を設け、平面形状は長方形である。1・2号墳がこれに該当する。
- 尾根の高所に位置し、周溝を伴わず削り出しにより墳丘基底部を成形する。平面形状は長方形である。3・4号墳がこれに該当する。
- 傾斜の緩やかな比較的平坦地に構築され、しっかりとした周溝を設ける。平面形状は、ほぼ正方形である。5・6号墳がこれに該当する。

#### 埋葬施設

今回の調査において、各墳丘からは、埋葬施設と判断される遺構は検出されなかった。墳丘上にはなんら埋葬施設の存在を示す痕跡は認められず、6号墳を除く5基の周辺部からも確認はされていない。墳丘を中心として、斜面部も含め広範囲にわたって調査を行っているが、比較的傾斜の緩やかな尾根上においても確認されなかった。

弥生時代から古墳時代前期の墓制の一つに低盛土を伴う方形周溝墓があり、周溝の内側で盛土内に埋葬施設が確認されないものがある。1～4号墳の場合は、その立地からも墳丘以外に埋葬施設を設けたとは考えずらく、やはり、盛土中に構築されたと考えるのが自然であろう。

墳丘から埋葬施設の痕跡が確認されないことについては、盛土の上方より埋葬施設を構築しても地山まで達していないことを示し、埋葬施設を包含できる盛土量の存在が推測できる。前述の姫中町の墳丘墓の事例と残存する3・5・6号墳の盛土を考慮し、墓壇の深さを70～80cmと仮定すると、盛土は少なくとも1.5m以上の高さを有していた可能性が伺える。

埋葬施設について4号墳の場合は、遺物の出土状態から北東の斜面に向け墳丘を崩し落とした可能性が考えられる。一方、5号墳は周溝の角度を考えると墳丘の傾斜は急であったと推測され、周溝内への崩落土や遺物の出土状態から、盛土は比較的早い段階での流失を示唆している。したがって、この時点で埋葬施設は消失した公算が大きい。

6号墳の場合は、墓壇の可能性の高い十坑が、墳丘南側の墳丘外に確認される。この上坑は、墳丘裾部に位置し、鉢形の手桶土器と施とみられる鐵製品が出土している。6号墳の調査は、墳丘本体を中心とした調査であり、周辺部のほとんどは手つかずの状態である。したがって、この種の遺構が集団を成すのか否か不明であるが、墳丘外に埋葬された土壙墓は階層の分化を示す事例と解釈される。

#### 遺物の出土状態

全体で6基の古墳の調査を行ったが、総体的に遺物の出土量は少ない。そのなかで比較すると、5・6号墳の遺物は多く、ほかは少ない状態にある。6号墳は一部分の調査であるため比較の対象とはならないが、傾向として、尾根の高所に立地する1～4号墳は、斜面の頂上部に構築された立地条件を反映し、予想以上に崩落が激しかったのか調査地区外へ流れ出していると判断される。

山上状態をみると1号墳は南側の斜面より、2号墳は北と東側の斜面に集中しているが、これについても、1号墳の場合は北に道路址が構築されていること、2号墳の場合は、南に耕地が展開することに起因しているとみられ、出土状況の傾向を示すには価値がある。

それに対して、4・5号墳はそのような後世の変遷は少なく、比較的遺物も出土している。4号墳は南と東の急激に落ちる谷へ向けた崩落土中に集中し、北側には少ない状況にある。とくに、5号墳ではこの傾向は顕著であり、南側の斜面に堆積した崩落土中と周溝内に集中しており、北側からの出土は少ない状況にある。北側に供献された土器が、南側斜面の崩落土中から出土すると考えるには無理があることから、この上

器は南側に偏在して供獻されたもので、南側、つまり平野側を意識しているものと解釈され、築造当時の祭観の一端がいかにも見られる。また、5号墳の盛土下では旧表十上面から破碎された壺形土器が壇丘中央部から出土している。墓の築造に先立って行われた祭祀行為を示すものか、この時期の調査事例の増加を得て検討すべき課題の一つである。

また、表土中の出土のため遺構外出土遺物の項で取り扱ったが、直刀の断片が数点出土している。形状的に古墳時代初頭の時期まで遡れるかについては不明であるが、占墳の副葬品である可能性が指摘される。

#### 土器の様相

糸谷古墳群の各古墳から出土した土器は、壺、甕、高杯、器台、蓋、鉢形土器、小型上器などである。各古墳からの主な出土遺物については第19・20回において集成図を掲載した。比較的土器が出土したのは3号墳を除いた5基の古墳であり、これらを同一に検討するには前述の出土状態から無理があるものの、傾向として1・2・4号墳の出土遺物は、高杯形上器や器台形・小型土器のいわゆる供獻土器が主体をなしている。一方、5・6号墳については、高杯・器台形上器の割合は少なく、煤の付着する壺形土器が多く見受けられる。いずれの上器も總じて薄手であり、摩耗が激しく調整技法が不明瞭であるものが多い。胎土については、海綿骨針の含有が目立っている。

器種毎に概観すると、壺形土器は、有段口縁をもつ月影式の系譜を引く在地系土器が主体的で、数量は少ないものの、口縁部外側に擬凹線文を施す上器も數点見受けられる。これらは概してハケにより調整するものである。このほか、小型の精製壺については、口縁部が長いものと短いものとに分けられ、ヘラ磨きにより調整を行っている。

壺形土器については、口縁部の形状と煤の付着による使用痕を一つの基準としたが、全体を知りうる資料はなく、いずれも破片であるため壺形土器との差異を認めずらいのが現状である。また、6号墳出土遺物の6107は、口縁下端が突出する山陰系の土器とみられ、さらに、6106は頸部を屈曲させや直立気味に延びる口縁部をもつ能登型に比定されるなど、外米器種も確認される。

高杯形土器は、杯部途中で屈曲し、外反して延びる杯部をもつ形態と、杯部が浅い椀形で外反し口縁部に至るもののが存在する。両者とも比較的長く裾部で広がる脚をもつ。在地系土器の月影式の系譜を引くものである。

器台形土器は、大小があり、前者は杯状の受部をもち、脚部はハの字状に開く。後者は、小型器台で外反する受部端部に口縁帯をもつ。

蓋形土器は、出土量は少なく、体部が外反するものと内湾気味のもの、縦頂部が窪むものと扁平なものとが確認される。

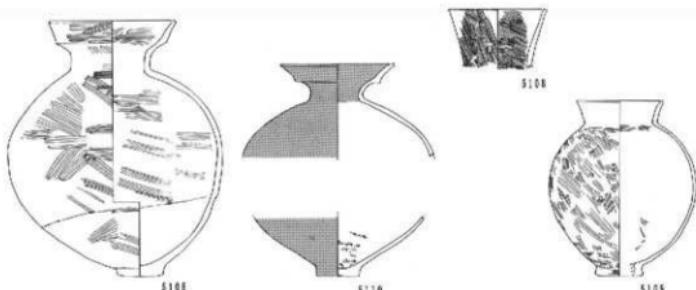
鉢形土器は、内湾気味に開く体部で、底部は平底のものと有孔のものとがあり、丁寧に整形される。

小型土器は、壺形土器あるいは壺形土器で、比較的丁寧な作りである。

形態的な上器の概観については、以上の通りである。これに対して、從来の編年を採用すると、第1様式I期、漆町編年における5・6群に位置づけられ、型式名でいうところの白江式にあたる。今回出土の1～6号墳の上器は、全体として短期間に中に収まるものであるが、その中でも、1～4号墳の上器と5・6号墳の上器を比較すると、5・6号墳の上器の方がより、次型式である古府クルビ式に近い様相を示している。さらに、1・2・4号墳においては、在地系の土器を主体としているのに対して、5・6号墳では、能登型あるいは山陰系とみられる外来系の上器が含まれるようになる。

いずれにしろ、土器の様相においては、時間差はなく、概めて短期間に中に収まると理解される。

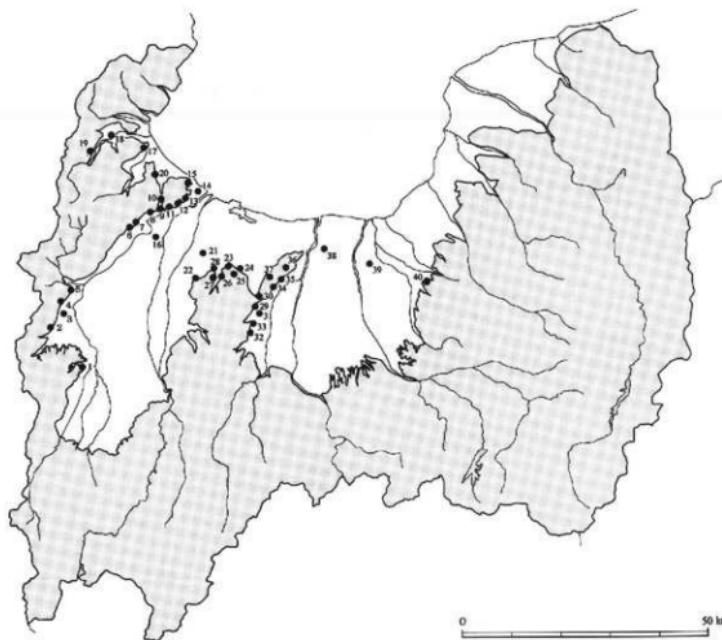
壺・變形土器

第 1 号 墳	
第 2 号 墳	
第 4 号 墳	
第 5 号 墳	
第 6 号 墳	
第 2 号 土 坑	

第19図 倉谷古墳群土器集成図(1) (1/8)

高杯形土器	器台形土器	蓋形土器	鉢形土器	小型土器	ミニチュア 上器
1002					
2005	2008	2012	2013	2014	2011
2005	2010				
4015	4012	4014			
5119	5120	5121	5118		
6204					
				6205	6206

第20図 倉谷古墳群土器集成図〔2〕(1/8)



第21図 富山県の出現期古墳分布図（1／100万）  
※西井龍儀『富山平野の出現期古墳』に加筆

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	安居古墳群	15	桜谷古墳群	29	勅使冢古墳
2	北一埴塚群	16	石塚古墳群	30	王塚古墳
3	闘野古墳群	17	朝日潟山古墳群	31	六治古塚
4	谷内古墳群	18	中村大場山古墳群	32	富崎千里古墳群
5	天狗山古墳群	19	日名田古墳群	33	富崎埴塚群
6	男掛古墳群	20	柳田布尾山古墳群	34	杉谷古墳群
7	倉谷古墳群	21	二口油免1号墳	35	糸羽山丘陵古墳群
8	板屋谷内A古墳群	22	半田新古墳群	36	杉坂古墳群
9	須田不動山古墳群	23	開山遺跡	37	西金谷屋長尾塚古墳群
10	東海老坂ダイラ古墳群	24	一ツ山古墳群	38	ちょうちょう塚古墳群
11	東海老坂ムカイ山古墳群	25	二ツ山古墳群	39	竹内天神堂古墳
12	鳥越古墳群	26	麥電所西遺跡	40	柿沢古墳群
13	東上野I古墳群	27	五歩一古墳群		
14	国分山古墳群	28	流通業務園地内No.1遺跡		

第2表 富山県の出現期古墳一覧表

### 3. 高岡市の出現期古墳

高岡市域の丘陵地には、Ⅲ現期から後期にかけての古墳群・横穴墓群が尾根を中心に数多く分布しており、いずれも小河川の浸食を受けた丘陵の先端部に集中する傾向を示す。墓域である古墳は、主に西山丘陵及び二上丘陵の周辺部に分布し、富山考古学年の集計によると、富山県下において700基を超える古墳が確認されるが、このうちの400基近くがこの地区に存在している。

出現期古墳をみると、二上丘陵周辺では太田地区内に同指定史跡の桜谷古墳群があり、2基の前方後円墳を中心とする13基ないしそれ以上の古墳から構成されている。これらは前期から後期の長期間にわたって営まれたもので、前方後方墳の可能性が指摘される1号墳と帆立貝式古墳の2号墳が出現期古墳の時期に位置づけられている。二上山の東には富山湾に向かって張り出した台地先端部に国分山古墳群が、南麓には、鳥越、院内、谷内古墳群がそれぞれ支群に分かれて分布する。山西には、四隅突出墳の可能性のある古墳を含む東海老坂ダイラ、東海老坂ムカイ山古墳群などが存在し、海老坂の断層崖を挟んで西には板屋谷内八古墳群が位置する。この板屋谷内八古墳群は前方後円墳1基と円墳4基の計5基で構成され、A1号墳は現在西山丘陵における最古級の古墳で、昭和56年度に道路建設に伴い富山県教育委員会により実施された試掘調査の結果、埴輪部より鉄剣一振りが出土し、周溝内より出土している月影T式の上器によりこの時期としている。海老坂の西側で、西山丘陵の東端には、2基の古墳で構成される須州不動山古墳群が位置する。1号墳は、丘陵頂部を溝で区画し方墳を連続した形態で、福井県原目山1～4号墳と同様の形態を示している。

倉谷古墳群の付近では道ヶ谷内1～Ⅲ古墳群が位置する。道ヶ谷内1～Ⅲ古墳群は、一边が15～20m規模の方墳で構成されており、なかには弥生の墳丘墓の系譜を引く遺構の存在も考えられる。また、その西側にあたる丘陵上には男塚古墳群が存在する。男塚古墳群は、前方後円墳1基、円墳と方墳各1基ずつの合計3基からなる古墳群で、前方後円墳は、前方部と後円部の比高差が6mと大きく、裾の高さが一定していないことから、方墳あるいは墳丘墓の築かれた地盤を背景とした初期古墳の可能性が指摘されている。

高岡市街南西約3kmの沖積地上には石塚古墳群が位置し、4基の古墳が発掘されている。石塚古墳群は、前方後方墳と推定される1号墳、前方後方墳である2号墳、方墳と推定される3号墳、方墳と推定される4号墳により構成される出現期の古墳であり、前方後方形周溝墓や方形周溝墓とする見方もある。

以上、高岡市、とくに、西山丘陵には出現期古墳が多く分布する。これらの古墳を築造するにあたっては、それを支える生産力と集落が不可欠となるが、西山丘陵付近における調査事例はみられないのが現状である。

### 4. おわりに

今回の調査における6基の古墳は、前述してきたとおり、構造および出土遺物から極めて短時間の中で営まれた墓域であることが明かとなっている。さらにこれらを細分すると、立地とその構造において、1号墳と2号墳、3号墳と4号墳、5号墳と6号墳の3つに分けられ、さらに、出土遺物の年代観を重ねあわせると、1～4号墳と5・6号墳に大別される。これらのことから尾根上における各古墳の前後関係については、3号墳の遺物山上量が少ないとため断定はできないものの立地条件を加味すると、尾根の基部方向、1号墳から順次先端へ向け築造されたと判断される。

土器の様相からみた、各古墳の時期については、時間差の少ない中での築造を物語るもので、古墳時代初

頭に位置づけられ、いわゆる出現期古墳に相当する。しかし、墳墓の構造は、古墳というよりは墳丘墓と捉えられ、弥生の墓制を踏襲していると考えられる。十輪の様相では古墳時代に入っているものの、墳墓の形態は、前代の延長上にあることが、当地域の時代の転換期を現しているといえる。

富山県下における出現古墳については、県西部の西山丘陵周辺と県中央部において確認されている。県中央部においては、婦中町で試掘を主体として四隅突出型墳丘墓の六治古塚、向野塚、鏡板墳墓群、宮崎墳墓群、前方後方墳の勤使塚古墳などで調査が行われており、富山市の杉谷4号墳に代表される杉谷古墳群など比較的呉羽丘陵周辺に集中する傾向を示している。

西山丘陵周辺の出現期古墳については、先に概観したとおりそのほとんどは測量調査によるものであり、本格的な発掘調査は実施されておらず、この時期の調査は始まったばかりといつても過言ではない。今後、古墳とそれを支えるべく集落との問題、西山丘陵にこの時期の墳墓が集中する歴史的環境など、検討されるべき課題は多い。

#### 引用・参考文献

- 青木一彦他 1996 「射水平野の遺跡－古代の北陸道を探る」『大境』第18号 富山考古学会
- 秋山進午他 1990 「越中王塚・勤使塚古墳測量調査報告 北陸の前方後円・後方墳の一考察ー」 富山大学人文学部考古学研究室
- 荒井 降他 2000 月間冬遺跡調査報告書 高岡市教育委員会
- 岩田文章他 2000 「妻木晚田遺跡」 波切町教育委員会
- 上野 章 1974 「高岡市頬川遺跡」『大境』第5号 富山考古学会
- 大野文輔他 1984 「富山県高岡市西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅰ」 高岡市教育委員会
- 大野文輔他 1985 「富山県高岡市西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ」 高岡市教育委員会
- 大野文輔他 1986 「富山県高岡市西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅲ」 高岡市教育委員会
- 小田木治人郎 1989 「北陸東部における古墳時代開拓期の土器様相」「北陸の考古学Ⅱ」 石川考古学研究会
- 木田 清 1999 「金沢市七ツ塚1号B墓盛塗時期の再検討」「北陸の考古学Ⅲ」 石川考古学研究会
- 京谷 準一 1966 「国吉小史」 国吉小史刊行委員会
- 高橋 浩二 1995 「越中における古墳山現期の様相」『大境』第17号 富山考古学会
- 田嶋 明人 1986 「波切町遺跡Ⅰ」 石川県立埋蔵文化財センター
- 鶴谷雅好他 1990 「越中たかおかふるさと資料抄」 高岡市児童文化協会
- 西井 龍儀 1983 「二上山周辺の古墳」「昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報」 高岡市教育委員会
- 西井 龍儀 1987 「波切町遺跡Ⅱ」「北陸の古代寺院－その源流と古瓦」 桂香房
- 西井龍儀他 1999 「富山平野の出現期古墳〈発表要旨・資料集〉」 富山考古学会
- 山内義史他 2001 「波切町ケ平根穴墓群調査報告Ⅲ」 高岡市教育委員会
- 古岡 英明 1972 「古墳時代」「富山県史考古編」 富山県
- 古岡英明他 1991 「たかおか 歴史との出会い」 高岡市
- 和田 一郎 1959 「高岡市史」上巻 青林書院新社

別表 遺物観察表

1. 第1号墳、土器類

図面 図版 番号	器種	計 口徑 底深 値 器高	残量	特	微	胎	土	色調
53 57 1001	壺形土器	18.0 — (8.5)	口縁部～体 部片	有段口縁の壺形土器である。頸部の内外 面に粗いハケ調整、口縁部外面に擬凹線 文、内面に指頭によるナデを施す。		石英・砂粒・金雲母を 含む		にぶい黄褐色
53 57 1002	高杯形土器	— (9.4) (7.6)	脚部片	脚部で外反する。外面にヘラ磨きを施す。		石英・金雲母・角閃石 ?を含む		淡黄色
53 57 1003	高杯形土器	— — (5.8)	脚部片	脚部はハの字状に開くと推定される。外 面にヘラ磨きを施す。風化著しい。		石英・砂粒・海綿骨針 を含む		灰黄褐色

2. 第2号墳、土器類

図面 図版 番号	器種	計 口徑 底深 値 器高	残量	特	微	胎	上	色調
53 57 2001	壺形土器	(14.5) — (7.0)	口縁部片	頸部は長く外反し、口縁部との境に段を 持つ。頸部外面にハケ調整を施す。		石英・海綿骨針を含む		明黄褐色
53 57 2002	壺形土器	— — (6.2)	口縁部 1/2	大型の壺形土器である。頸部は外反し、 口縁部との境に深い段を持つ。調整は 不明である。		石英・白色粒・黒色粒 を含む		浅黄褐色
53 57 2003	壺形土器	13.6 — (13.2)	口縁部～体 部上半	頸部は短く「く」の字状に外反し、口縁部 は直立する。調整は不明である。		石英・白色粒を含む		浅黄褐色
53 57 2004	高杯形土器	(25.0) — (6.7)	杯部 1/4	比較的深い外反して開く杯部を持つ。内 外面共にヘラ磨き及び赤彩を施す。		石英・砂粒・海綿骨針 を含む		褐色

図面 図版 番号	器種	計 口径 底径 高 値 器高	残量	特 徴	胎 土	色 調
53 57 2005	高杯形土器	(34.8) — (6.3)	杯部 1 / 3	大型の高杯形三唇である。杯部は下端で外反して伸びる。成・臺形痕は風化のため不明である。	石英・白色粒少量含む	明褐色
53 57 2006	高杯形土器	— — (6.4)	脚部片	脚部は比較的長く裾部で広がると推定される。外面にヘラ磨きを施す。	石英・金雲母?を含む	浅黄褐色
54 57 2007	高杯形土器	— — (10.0)	2 / 3	楕円形の杯底部に外反する口縁部を持つ。脚部は比較的長く裾部で広がる。外面にヘラ磨きを施す。他は不明である。	金雲母?を含む	浅黄褐色
54 57 2008	高杯形土器	— — (11.2)	2 / 3	楕円形の杯底部に外反して伸びる口縁部を持つ。脚部は比較的長く裾部で広がる。内外面共にヘラ磨きを施す。	金雲母?を含む	浅黄褐色
54 58 2009	器台形土器	(16.6) — (9.5)	2 / 3	脚部は中央で細くなり、外反して伸びる有致の受部を持つ。脚部外側にヘラ磨きを施すが、他は不明である。	石英・角閃石・金雲母? を含む	浅黄褐色
54 58 2010	器台形土器	9.2 — (6.0)	ほぼ完形	小型品である。外反する短い受部を持ち受部端に嵌い口縁帯を伴う。外面はヘラ磨き、内面は指頭によるナデを施す。	石英・金雲母を含む	黃褐色
54 58 2011	器台形土器	— — (6.8)	脚部片	脚部で外反する。外面にヘラ磨き及び赤彩を施す。	石英・砂粒・海綿骨針 を含む	橙色
54 58 2012	蓋形土器	3.0 10.6 5.0	ほぼ完形	頸部は平坦で、体部は外反気味に伸びる。調整は風化のため不明である。	石英・金雲母?を含む	浅黄褐色
54 58 2013	鉢形土器	13.0 — (6.3)	2 / 3	片口状を呈し、口縁部は尖る。調整は不明である。	白色粒を含みきめ細い	灰白色
54 58 2014	小型土器 壺形土器	(11.0) — (6.7)	体部上半 2 / 3	体部は球形気味で、口縁部は段を持って立ち上がる。調整は不明である。	石英・白色粒を含む きめ細い	灰白色
54 58 2015	小型土器 壺形土器	10.7 — (6.5)	口縁部～体 部上半片	体部は球形気味で、口縁部は段を持って立ち上がる。調整は不明である。	石英・金雲母?を含む	浅黄色
54 58 2016	小型土器	— 3.0 (2.5)	底部片 2 / 3	平底の底部片で外面にハケ調整を施す。	石英・白色粒・小隕を 含む	黒褐色
54 58 2017	ミニチュア 土器	(7.0) (5.6) (2.6)	1 / 2	器高は低く、指頭により成形する。	白色粒・黒色粒・海綿 骨針を含み、きめ細い	明褐色

## 3. 第3号塙、土器類

圓面 圓版 番号	器種	計 測 値 器高	口徑 底径 残量	特 徴	胎 土	色調
54	壺形土器	—	口縁部片	口縁部は「く」の字状に外反すると推測される。外面に指窓による圧痕と煤の付着が確認される。内面はハケ調整を施す。	石英・白色粒・海綿骨針を含む	褐色
58		—				
3001		—				
54	壺・壺形 土器	—	体部片	外面にハケ調整を施す。	大粒の石英・白色粒・海綿骨針を含む	褐色
38		—				
3002		—				
54	壺・壺形 土器	—	底部片	底部は平底で厚みを持つ。	石英・白色粒・砂粒を多量に含む	明褐色
58		6.0				
3003		(2.0)				

## 4. 第4号塙、土器類

圓面 圓版 番号	器種	計 測 値 器高	口徑 底径 残量	特 徴	胎 土	色調
55	壺形土器	(15.0)	口縁部片	内外面にナメ調整を施す。	石英・角閃石? を含む	橙色
58		—	1 / 6			
4001		(2.7)				
55	壺形土器	(16.6)	口縁部片	内外面共にナメ調整を施す。	石英・海綿骨針・雲母? を含む	褐色
58		—				
4002		(2.3)				
55	壺形土器	(19.2)	口縁部片	内外面にナメ調整を施す。	石英・海綿骨針を含む	褐色
58		—	1 / 6			
4003		(3.3)				
55	壺形土器	11.8	口縁部片	口縁部は段を持って立ち上がり、口唇部はやや肥厚する。外面の調整は不明。内面はヘラ磨きを施す。	石英・黒色粒を含み、 きめ細い	明褐色
58		—	1 / 2			
4004		(4.4)				
55	壺形土器	16.5	2 / 3	口縁端部に最大径を持ち、体部は小さな底部へ向け急激にすぼまる。ヘラ磨きを施す。外面と口縁部内面に赤彩を施す。	大粒の石英・海綿骨針を含む	暗赤褐色
58		2.3				
4005		11.5				
55	壺形土器	—	底部片	底部は平底で厚みを持つ。調整は不明である。	石英・海綿骨針を含み、 砂粒少量含む	外-明褐色 内-黒褐色
58		5.2				
4006		(5.6)				
55	壺形土器	7.8	1 / 2	体部中程に最大径を持ち、口縁部は直立する。内外面共に調整はヘラ磨きで赤彩を施す。	石英・海綿骨針を含み、 きめ細い	明赤褐色
58		1.6				
4007		9.2				

表面 圓版 番号	器種	計 口徑 測 底径 値 器高	残量	特 徴	胎 土	色 調
55 59 4008	壺形土器	(7.7) — (5.3)	口縁部～体 部上半 1 / 4	体部中程に最大径を持ち、口縁部は短く外反する。体部外面にヘラ磨き、外面の調整は不明である。赤彩を施す。	石英・海綿骨針を含み きめ細い	明赤褐色
55 59 4009	高杯形土器	— — (4.5)	杯部片	杯部下端で屈曲し、外反して伸びる口縁部を持つ。成・整形痕は風化著しく不明である。	石英・海綿骨針・砂粒 を多量に含む	明褐色
55 59 4010	器台形土器	16.3 11.6 12.3	2 / 3	大型の器台形土器で、外反して開く深い受部を持つ。通し孔は確認されていない。脚部外面にヘラ磨きを施す。	石英・海綿骨針を含み 砂っぽい	褐色
55 59 4011	壺形土器	(3.9) 5.6 —	2 / 3	楕円形の体部を持つと見られるが器台の可能性も有する。成・整形痕は風化が著しく不明である。	石英・海綿骨針・砂粒 を多量に含む	橙色
55 59 4012	壺形土器	(9.2) — 4.5	1 / 3	内窓気味に伸びる体部を持つ。体部外面にヘラ磨き、内面にヘラ削りを施す。	石英・海綿骨針を含む	外-暗褐色 色～褐色 内-暗褐色
55 59 4013	小型土器 壺形土器	(9.8) — (2.8)	口縁部片 1 / 4	口縁部は受部状を呈する。風化著しく調整は不明である。	石英・海綿骨針・砂粒 を含む	褐灰色
55 59 4014	小型土器 壺形土器	(11.6) — (6.0)	口縁部～体 部上半片 1 / 3	体部は球形気味で、口縁部は段を持って直立する。調整は不明であるが外面に媒が付着する。	大粒の石英・砂粒を多 量に含む	褐灰色
55 59 4015	小型土器 壺形土器	(9.3) — (4.1)	口縁部片 1 / 6	口縁部は受部状を呈する。調整は不明である。	石英・海綿骨針を微量 に含み、きめ細い	橙色

#### 5. 第5号墳、土器類

表面 圓版 番号	器種	計 口徑 測 底径 値 器高	残量	特 徴	胎 土	色 調
56 59 5101	壺形土器	(10.7) — (5.3)	口縁部片 1 / 3	直立気味の口縁部で、下端ににぶい段を持つ。内外面共にヘラ磨きを施す。	石英・白色粒・黒色粒 ・海綿骨針を含む	明褐色
56 59 5102	壺形土器	(14.2) — (4.4)	口縁部片 1 / 6	直立する頸部を持ち、口縁部はにぶい段を持って立ち上がる。調整は不明である。	石英・白色粒・砂粒・ 海綿骨針を多量に含む	暗赤褐色
56 59 5103	壺形土器	(13.4) — (5.0)	口縁部片 1 / 4	口縁部は直立気味で、下端ににぶい段を持つ。外面上に媒が付着する。	石英・白色粒・小砾・ 海綿骨針を多量に含む	明褐色

岡山 図版 番号	器種	計 口径 測 底径 値 器高	成 量	特 徴	胎 土	色 調
56 59 5104	壺形上器	(14.9) — (4.6)	口縁部片 1/4	口縁部は外反し下端ににぶい段を持つ。 外面にヘラ磨きを施す。	石英・白色粒・黒色粒 ・海綿骨針を含む	褐色
56 59 5105	壺形土器	(18.2) — (3.1)	口縁部片 1/6	口縁部は突出状を呈する。調整は不明である。 風化者しい。	大粒の石英・白色粒・ 海綿骨針を含む。砂っぽい	褐色
56 59 5106	壺形上器	20.3 7.5 42.3	完形	有段口縁で体部は球形状を呈する。内外面共にヘラ磨き及びハケ調整を施す。	石英・白色粒・黒色粒 を含む	浅橙色
57 60 5107	壺形土器	(17.9) — (3.8)	口縁部片 1/6	口縁部は直線的に外反し、にぶい段を持つ。僅かに赤彩の痕跡を残す。	石英・白色粒・海綿骨針を含む	明褐色
57 60 5108	壺形上器	(16.0) — (9.8)	口縁部片 1/3	長く発達した口縁部で下端に段を持つ。 内外面にハケ調整を施す。	石英・海綿骨針を含む	明褐色
57 60 5109	壺形土器	13.6 (6.0) 29.0	ほぼ完形	口縁部は「く」の字状、底部は平底で高台状である。口縁部の内外はナデ、体部内外面はハケ調整を施す。	石英・白色粒・海綿骨針を含む	明褐色
57 60 5110	壺形土器	18.2 6.2 —	口縁部～体 部下半	有段口縁の壺形土器で、体部は球形状を呈する。外面に赤彩を内面にハケ調整を施す。 風化者しい。	大粒の石英・白色粒・ 海綿骨針を含む	外一粒色 内一褐灰色
58 60 5111	壺形上器	(19.4) — (5.5)	口縁部片 1/6	口縁部は外反し、段を持つ。調整は不明である。	大粒の石英・白色粒・ 海綿骨針を含む	暗赤褐色
58 60 5112	壺形土器	(21.6) — (8.6)	口縁部片 1/6	口縁部は直立し、にぶい段を持つ。外面にヘラ磨きを施す。	石英・白色粒・海綿骨針を含む。砂っぽい	明褐色
58 60 5113	壺・壺形土 器	— 7.0 (4.1)	底部片	底部は平底で、厚みを持つ。	石英・白色粒・海綿骨針を含む	明褐色
58 60 5114	壺・壺形土 器	— 3.5 (4.0)	底部片	底部は平底で、厚みを持つ。外面にハケ調整を施す。	石英・白色粒・海綿骨針を含む	浅黄橙色
58 60 5115	壺・壺形上 器	— 4.4 (2.1)	底部片	底部は輪高台状である。内面にハケ調整を施す。	石英・黒色粒を含み、 海綿骨針を多量に含む	褐色
58 60 5116	壺・壺形土 器	— 2.1 (2.3)	底部片	底部は輪高台状である。内面にハケ調整を施す。	大粒の石英・白色粒・ 小砾を含む	褐色

図面 図版 番号	器種	計 口徑 底径 高 度 器 高	残量	特 徴	胎 土	色調
58 61 5117	壺・壺形土器	— 5.0 (2.8)	底部片	底部は平底で、風化が著しい。	大粒の石英・白色粒・角閃石?・小謙を含む	褐色
58 61 5118	壺・壺形土器	— 3.8 (1.6)	底部片	底部は輪高台状で、風化が著しい。	大粒の石英・白色粒を含む	浅黄褐色
58 61 5119	高杯・器台 形土器	— — (4.6)	脚部片	脚部片で、被熱の痕跡?を持つ。	白色粒・黒色粒・海綿骨針を含む	灰赤色
58 61 5120	器台形土器	— — (3.6)	脚部片	小型器台で、比較的小さな受部を持つと推測される。風化が著しい。	大粒の石英・白色粒を含む	明褐色
58 61 5121	鉢形土器	15.3 5.5 6.3	2 / 3	内窓気味に開く体部を持ち、底部は厚い平底である。外面にハケ、内面にナデ調整を施す。口縁部に煤が付着する。	石英・白色粒を含む	浅黄褐色
58 61 5201	壺形土器	(17.6) — (8.4)	口縁部片 1 / 6	長く外反する口縁部で、下端に明瞭な段を持つ。調整は不明である。	石英・小謙・白色粒・海綿骨針を多量に含む	明褐色
58 61 5202	壺形土器	(13.5) — (8.6)	口縁部片 1 / 4	長く発達した口縁部と推定される。外面にハケ調整を施す。	石英・白色粒・海綿骨針を含む	浅黄褐色
58 61 5203	壺形土器	(14.6) — (4.5)	口縁部片 1 / 6	口縁部は長く直線的に外反する。外面にハケ調整を施す。	石英・海綿骨針を含む	褐色
58 61 5204	壺形土器	(13.8) — (2.9)	口縁部片 1 / 6	口縁部は緩やかに外反する。内外面にへう磨きを施す。	石英・白色粒・海綿骨針を含む	浅黄褐色
58 61 5205	壺形土器	(13.6) — (4.0)	口縁部片 1 / 6	頭部がすぼまり外反する舟底の口縁部である。僅かに赤彩の痕跡を残す。	石英・白色粒・小謙を多量に含む	暗赤褐色
59 61 5206	壺形土器	(15.0) — (3.5)	口縁部片 1 / 6	外反気味に伸びる有段の口縁部である。調整は不明である。	大粒の石英・白色粒・海綿骨針を含む	明褐色
59 61 5207	壺形土器	(15.7) — (3.5)	口縁部片 1 / 6	やや受部状の口縁部である。調整は不明である。	大粒の石英・白色粒・海綿骨針を含む	明褐色
59 61 5208	壺形土器	(17.4) — (4.4)	口縁部片 1 / 6	外反気味に伸びる有段の口縁部である。内外面に赤彩を施す。風化が著しい。	石英・白色粒・海綿骨針を含む	褐色

図面 図版 番号	器種	計口縁 測底径 値器高	残量	特 徴	胎 土	色 調
59 61 5209	壺形土器	(19.0) — (4.9)	口縁部片 1/4	直立気味に伸びる有段の口縁部である。 内外面に赤彩を施す。	石英・白色粒・小礫を 多量に含み海綿骨針を 含む	橙色
59 61 5210	壺形土器	(14.8) — (4.4)	口縁部片 1/4	口縁部は緩やかに外反し直立する。調整 は不明である。	大粒の石英・小礫を含 む	橙色
59 61 5211	壺形土器	14.6 — (7.8)	口縁部～体 部上半	口縁部は「く」の字状に緩やかに外反し 口縁部は直立する。内面に指頭工具が確 認される。	大粒の石英・小礫を多 量に含む	明褐色
59 61 5212	壺形土器	(16.1) — (2.6)	口縁部片 1/4	受部状の口縁部である。調整は不明であ る。	きめ細い	にぶい橙色
59 61 5213	壺形土器	(18.3) — (2.5)	口縁部片 1/10	口縁部は大きく開き、ハケ調整を施す。	石英・海綿骨針・雲母 を含む	にぶい橙色
59 61 5214	壺形土器	(16.8) — (6.0)	口縁部片 1/6	口縁部は短く内倒し、すぼまった感がある。 調整は不明である。風化が著しい。 外面と口縁部内面に赤彩を施す。	石英・白色粒・砂粒を 多量に含み海綿骨針を 含む	明褐色
59 61 5215	壺形土器？	(16.0) — (6.0)	口縁部片 1/4	有段口縁の壺形土器？で、外面に擬凹線 文、頸部内面にハケ調整を施す。	石英・白色粒を含む	明褐色
59 61 5216	壺形土器	(17.2) — (6.6)	口縁部片 1/4	口縁部は直立し下端ににぶい段を持つ。 調整は不明である。	石英・砂粒・白色粒を 多量に含み海綿骨針を 含む	明褐色
59 61 5217	壺形土器	(15.4) — (6.8)	口縁部片 1/6	口縁部は直立し下端ににぶい段を持つ。 調整は不明である。	大粒の石英・白色粒を 多量に含む。砂っぽい	褐色
60 61 5218	壺形土器	(16.7) — (4.1)	口縁部片 1/4	口縁部は直立気味に外反し、下端ににぶ い段を持つ。外面に煤が付着し、内面に ハケ調整を施す。	大粒の石英・小礫を多 量に含む	灰白色
60 61 5219	壺形土器	(18.3) — (2.9)	口縁部片 1/6	受部状の口縁部である。調整は不明であ る。	大粒の石英・白色粒・ 海綿骨針を多量に含む	褐色
60 61 5220	壺形土器？	— 6.8 (4.5)	底部片	底部は平底で厚みを持つ。外面にヘラ削 りを施す。	石英・海綿骨針・砂粒を 多量に含む	橙色
60 61 5221	壺形土器？	— 5.8 (5.1)	底部片 2/3	底部は平底で厚みを持つ。内外面共にハ ケ調整を施す。	大粒の石英・海綿骨針 を含む	外一明褐色 内 黒褐色

図面 図版 番号	器種	計 口径 測 底深 値 器高	残量	特 徴	胎 土	色調
60 62 5222	壺形土器?	— 6.2 (3.5)	底部片	底部は平底で厚みを持つ。内外面共にハケ調整を施す。	石英・海綿骨針・黒色粒を含む	におい褐色
60 62 5223	壺形土器?	— 5.2 (3.1)	底部片 1/2	底部は平底で厚みを持ち、縫割が見られる。体部外面にハケ調整を施す。	石英・白色粒・海綿骨針を含む	明褐色
60 62 5224	壺形土器?	— 2.4 (2.4)	底部片	底部は平底で体部は外面にヘラ巻きを施す。	石英・白色粒・海綿骨針を含む	外一浅黄褐色 内一褐色
60 62 5225	壺形土器?	— (8.5) (3.9)	底部片 1/4	底部は平底である。体部外面は風化が著しく内面にのみハケ調整の痕跡を残す。	石英・海綿骨針を含む きめ細い	浅黄褐色
60 62 5226	高杯形土器	(25.4) — (3.7)	杯部片 1/6	杯部の下端に稜を持つ。調整は不明である。	石英・白色粒・砂粒・ 海綿骨針を含む	明褐色
60 62 5227	器合形土器	— — (5.2)	脚部片	受部と脚部が比較的大きく外反すると推測される。外面は風化が著しく内面のみヘラ削りの痕跡を残す。	石英・白色粒・海綿骨針を含む	明褐色
60 62 5228	鉢形土器 (有孔)	— 1.9 (1.7)	底部片	有孔の鉢形土器である。	石英・白色粒・砂粒・ 海綿骨針を含む	浅黄褐色
60 62 5229	鉢形土器 (有孔)	— 2.2 (3.4)	底部片	有孔の鉢形土器で、外面にハケ調整を施す。	大粒の石英・白色粒・ 海綿骨針を含む	外一褐色 内一浅黄褐色
60 62 5230	鉢形土器	18.0 5.8 8.5	2/3	内寄気味に開く体部を持ち、底部は厚い平底である。外面にハケ、内面にナテ調整を施す。	石英・白色粒を含む	外一暗褐色 内一浅黄褐色

6-1. 第6号墳、土器類

図面 図版 番号	器種	計 口径 測 底深 値 器高	残量	特 徴	胎 土	色調
61 62 6101	壺形土器	(12.0) — (4.9)	口縁部片 1/10	口縁部は「く」の字状に外反し、下端に段を持つ。外面に縁が付着する。	石英・白色粒・海綿骨針を含む	褐色
61 62 6102	壺形土器	(12.0) — (4.6)	口縁部片 1/10	口縁部は外反し下端ににおい稜を持つ。調整は不明である。	大粒の石英・白色粒・ 蜜母?を含む	明褐色

図面 図版 番号	器種	計 口縁 底径 器高	残量	特 徴	胎 土	色調
61 62 6103	複形土器?	— — (2.9)	口縁部片	口縁部の崩片で外面に擬凹線文を施す。	石英を含む	明褐色
61 62 6104	複形土器	13.0 — (7.9)	口縁部～体 部上半	長く発達した口縁部で下端に稜を持つ。 調整は不明である。	石英・小礫を含む	明褐色
61 62 6105	複形土器	(16.0) — (4.3)	口縁部片 1／6	直立気味に伸びる有段の口縁部である。 調整は不明である。	石英・砂粒・白色粒・ 海綿骨針を含む	褐色
61 62 6106	複形土器	(21.2) — (5.4)	口縁部片 1／6	口縁部の径と頸部下端の径がほぼ同一の 口縁部である。風化が著しく、調整は不 明である。	石英・白色粒・小礫を 含む	褐色
61 62 6107	複形土器	(18.0) — (3.5)	口縁部片 1／4	外反気味の口縁部を持ち、下端に突出す る稜を伴う。調整は不明である。	石英・白色粒・黒色粒・ 海綿骨針を含む	浅黃褐色
61 62 6201	複形土器	(9.0) — (5.2)	口縁部片 1／4	長く発達した口縁部で、下端ににぶい段 を持つ。内外面共にハケ調整を施す。	石英・角閃石?・菱母 ・海綿骨針を含む	明褐色
61 62 6202	複形土器	(13.0) — (11.3)	口縁部～体 部上半 1／6	口縁部は短く「く」の字形に外反する。 外面に煤が付着する。	石英・角閃石?・小礫 ・海綿骨針を多量に含 む	褐色
61 62 6203	高杯形土器	— — (2.2)	杯部片	杯部片で、外面に赤彩の痕跡を僅かに残 す。	石英・砂粒・白色粒・ 海綿骨針を含む	褐色
61 62 6204	高杯形土器	— — (1.9)	杯部片	杯部片で、外面に赤彩の痕跡を僅かに残 す。	石英・白色粒・海綿骨 針を含む	暗赤褐色～ 灰褐色
61 62 6205	小型土器 複形土器	(10.0) — (5.2)	口縁部～体 部上半 1／4	口縁部は受状部である。外面にハケ調整 を施す。	石英・海綿骨針を含む	褐色
61 62 6206	ミニチュア 土器 鉢形土器	7.4 2.2 6.4	光形	底部は厚く、体部は内凹気味に立ち上がる。 指頭により成形する。	石英・白色粒を含む	褐色

## 6-2. 第6号墳、金属製品

図面 岡版 番号	器種	計測値	長さ 幅 厚さ	残量	特	微
61	鉄製品	13.1	完形			
64	鉈	1.1			全体に細身で、切先は二枚に割れている。刃部は鋭くやや反りを示し中央に輪が通る。	
6301		0.3			重さ11.2g	

## 7. 開削地

図面 岡版 番号	器種	計測値	口径 底径 高	残量	特	微	胎	土	色調
62	肥前染付	(6.5)	1 / 2		肥前V期以降の矮反の小壺である。		きめ細い		青色
63	小壺	(2.9)							胎土-白色
7001		(4.7)							
62	肥前染付	-	底部片		肥前IV期「くらわんか手」の碗である。 大明正統の銘有り。		黒色粒を含む		白色
63	碗	-							胎土-灰白色
7002		(3.2)							

## 8-1. 遺構外出土遺物、旧石器

図面 岡版 番号	器種	計測値	長さ 幅 厚さ	残量	出土位置	石材	特	微
62	石刀	8.2	完形		11年度 X-84117.8 Y-18008.0	泥岩	縦長剥片を素材とし、正面右側をブレード、左側をスクレイパーとして使用する。 重さ21.6g	
63		3.4						
8101		0.9						
62	使用痕のある剥片	3.2	完形		12年度 X-84132.0 Y-17933.0	硬質頁岩	横長の葉状剥片を素材とし、2枚の剥片を取っている。 重さ10.6g	
63		5.7						
8102		0.7						
62	加工痕のある剥片	4.2	完形		12年度 X-84133.2 Y-17935.2	硬質頁岩	打痕の除去を意識していることから、ポイントの製作途中の可能性がある。 重さ24.3g	
63		5.5						
8103		1.5						
62	縦長剥片	6.1	ほぼ完形		12年度 X-84133.0 Y-17932.8	硬質頁岩	縦長剥片である。上部の直線状を呈する剥離は耕作時に付けられたものである。 重さ812.4g	
63		3.4						
8104		1.0						

## 8-2. 遺構外出土遺物、土器・陶磁器

岡山 國版 番号	器種	計 測 底径 値 器高	口縁 残量	出土位置	特 徴	胎 土	色調
63 63 8201	土師器皿	(13.1) — 4.0	1/4	11年度 X-84130.1 Y-18003.1	底部は丸底で、体部外面にヘラ削り、口縁部にナゲ調整を施す。	石英・白色粒・黒色粒を含む	橙色
63 63 8202	須恵質土器 壺?	— — —	体部片	10年度 X-84028.0 Y-18077.0	外面に自然輪が付着する。	石英・黑色粒を含む	灰色
63 63 8203	株洲 壺	(9.7) — (2.2)	口縁部片	10年度 X-84036.2 Y-18058.8	外面にナゲ調整を施す。	石英・白色粒を含む	灰色
63 63 8204	株洲 壺	— — —	体部片	10年度 X-84038.3 Y-18077.3	外底に叩きが施される。	白色粒を含む	暗灰色
63 63 8205	株洲 壺	(9.4) — (12.2)	1/3	11年度 X-84101.6 Y-18022.2	口縁部は「く」の字状に外反し 比較的小型の製品とみられる。	白色粒・海綿骨針 を含む	灰色
63 63 8206	株洲 壺	— — —	体部上半片	12年度 表採	外面に叩き、内面に指頭による 成形痕が残る。	白色粒を含む	暗灰色
63 63 8207	瓦質土器 培塙	(17.8) (16.6) 3.3	1/6	12年度 X-84153.0 Y-17912.0	底部を中心に内外面に煤が付着 する。	白色粒を含む	灰白色
63 63 8208	青磁 鍋文碗	— — —	体部片	12年度 X-84168.0 Y-17893.0	鏡連弁文が確認される。	石英を含む	灰オリーブ
63 63 8209	青磁 香炉	(10.0) — (2.8)	口縁部片 1/6	10年度 X-84033.0 Y-18088.0	龍泉窯の製品で体部に算木文を 施すとみられる。	精良	外-明緑灰色 内-灰白色

## 8-3. 遺構外出土遺物、石製品

岡山 國版 番号	器種	計 長さ 測 幅 値 厚さ	残量	出土位置	石 材	特 徴
63 64 8301	石製品 砥石?	8.0 6.7 4.2	1/2?	12年度 X-84139.9 Y-17922.3	泥岩	台形状を呈し、基部に穿孔を施す。岩質は脆く使用 痕は確認されない。 重さ186.1g

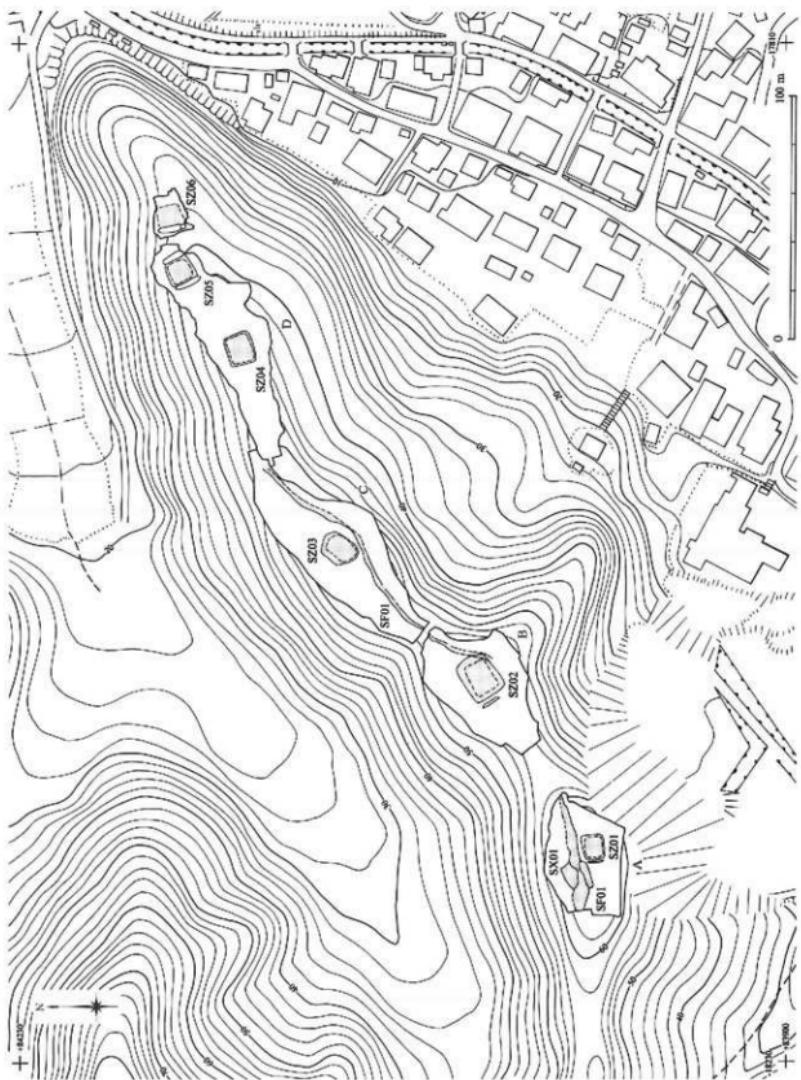
図面 図版 番号	器種	計測幅 値	長さ 厚さ	残量	出土位置	石材	特	微
63	石製品		8.6	1/2	10年度	流紋岩	基部に穿孔が施され、背面は剥離している。	
64	砥石		4.0		X+84053.4		重さ83.7g	
8302			1.5		Y-18078.2			
63	石製品		11.4	完形	12年度	凝灰岩	全面をよく使用している。所々に刃部の痕跡であろうか直線状の削痕が確認される。	
64	砥石		3.2		X+84143.0		重さ238.9g	
8303			2.8		Y 17958.0			
64	石製品		6.1	完形	12年度	凝灰岩	両端部以外を使いこんでいる。所々に刃部の痕跡であろうか直線状の削痕が確認される。	
64	砥石		3.4		X+84137.6		重さ268.7g	
8304			1.0		Y-17940.5			
64	石製品		13.5	完形	12年度	流紋岩	一面のみを使用する。	
64	砥石		4.0		X+84135.5		重さ681.3g	
8305			6.8		Y-17931.9			

#### 8-4. 造構外出土遺物、金属製品

図面 図版 番号	器種	計測幅 値	長さ 厚さ	残量	出土位置	特	微
64	鉄製品	<26.0)	1/3		12年度	棟間が残存し、茎部には目釘孔が確認される。また、鞘の痕跡であろうか木質が付着する。	
64	直刀	2.7			X+84146.2		
8401		0.5			Y-17931.7	茎部幅2.5、厚0.9、重さ178.3g	
64	鉄製品	<10.9)		刀柄部から 茎部片	12年度	両端で棟頭は撫で角の開状を呈する。	
64	直刀?	3.3			X-84165.4		
8402		0.4			Y-17965.9	茎部幅1.6、厚0.5、重さ44.2g	
64	鉄製品	<13.7)	断片		11年度	直刀の破片が層状に剥離したもの可能性がある。	
64	直刀?	2.1			北側斜面	重さ26.3g	
8403		0.2					
64	鉄製品	<22.7)	ほぼ完形		10年度	形状は鉈状であるが、先端部は面をなし刀部が確認されない。	
64	不明品	1.7			X-84056.2	重さ110.3g	
8404		0.8			Y-18064.7		
64	鉄製品	<15.5)	ほぼ完形		12年度	棟は切先へ向け僅かに外反する。	
64	刀子	1.2			X+84148.0	重さ19.1g	
8405		0.4			Y-17937.0		
64	銅錢	2.4	完形		12年度	I 0 2 3年鑄造の「大聖元寶(真)」である。	
64		-			表様	重さ2.6g	
8406		0.1					

図 面

図〇一 遺跡実測図

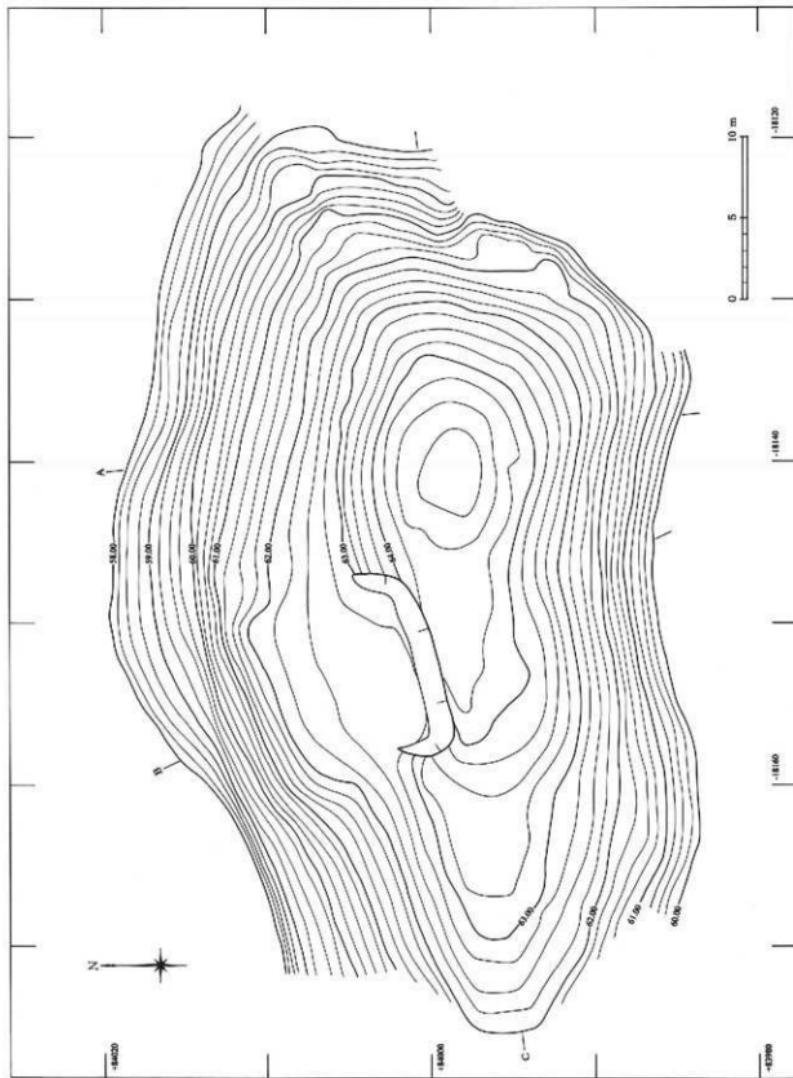


遺跡全体図

縮尺 1/2,000

A—平成9年度調査地区、B—平成10年度調査地区、C—平成11年度調査地区、D—平成12年度調査地区

図面〇一 遺跡実測図



図面〇三 遺跡実測図

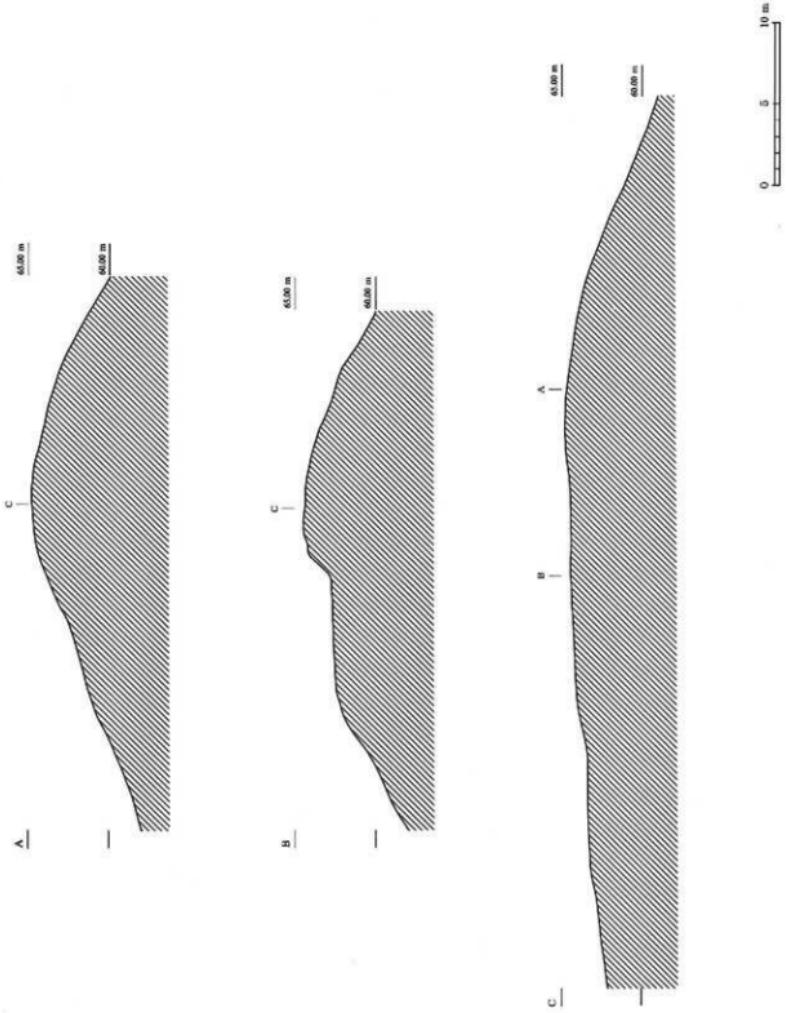
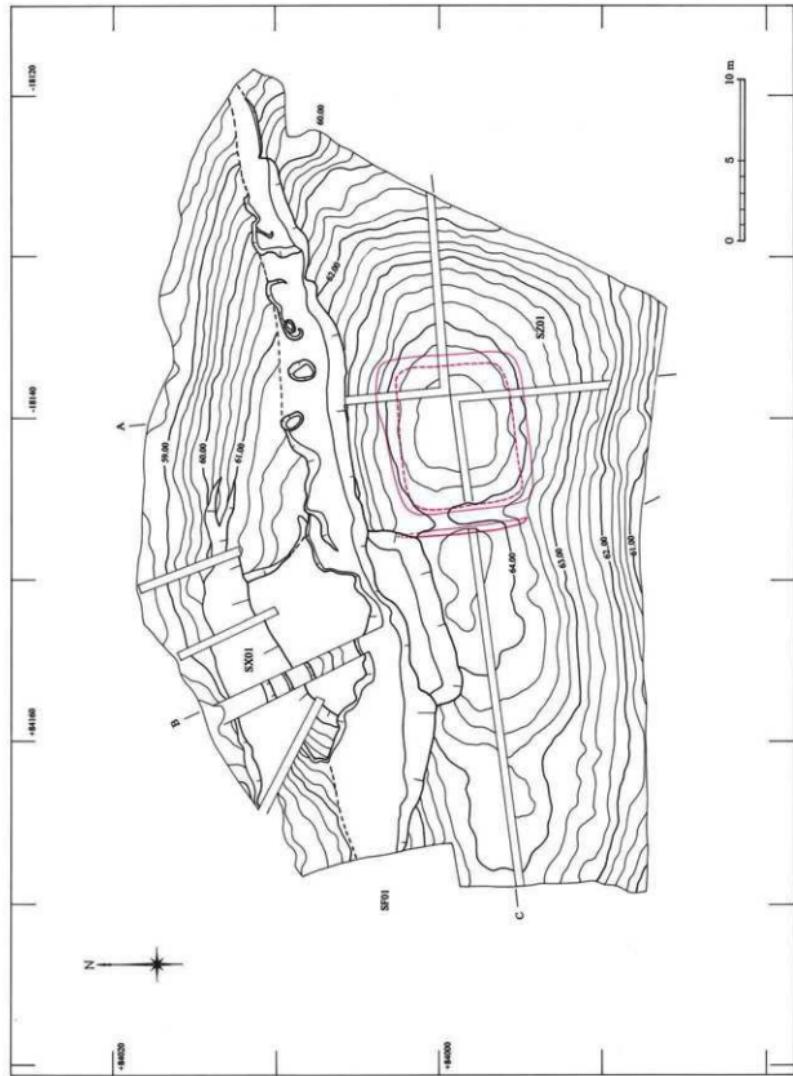
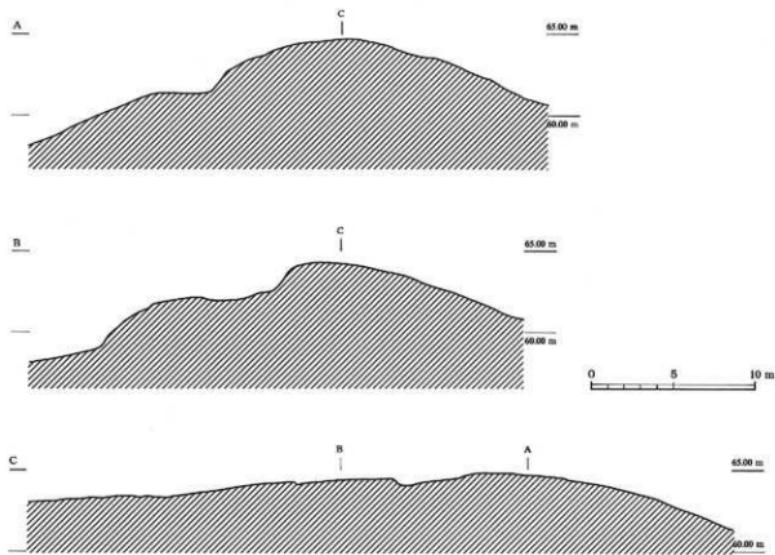


図10-5 遺跡実測図

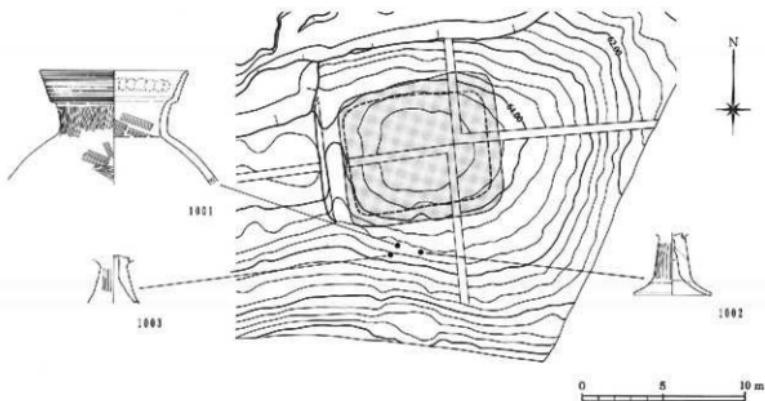


図面〇五  
遺跡実測図



1. 平成 9 年度調査地区断面図

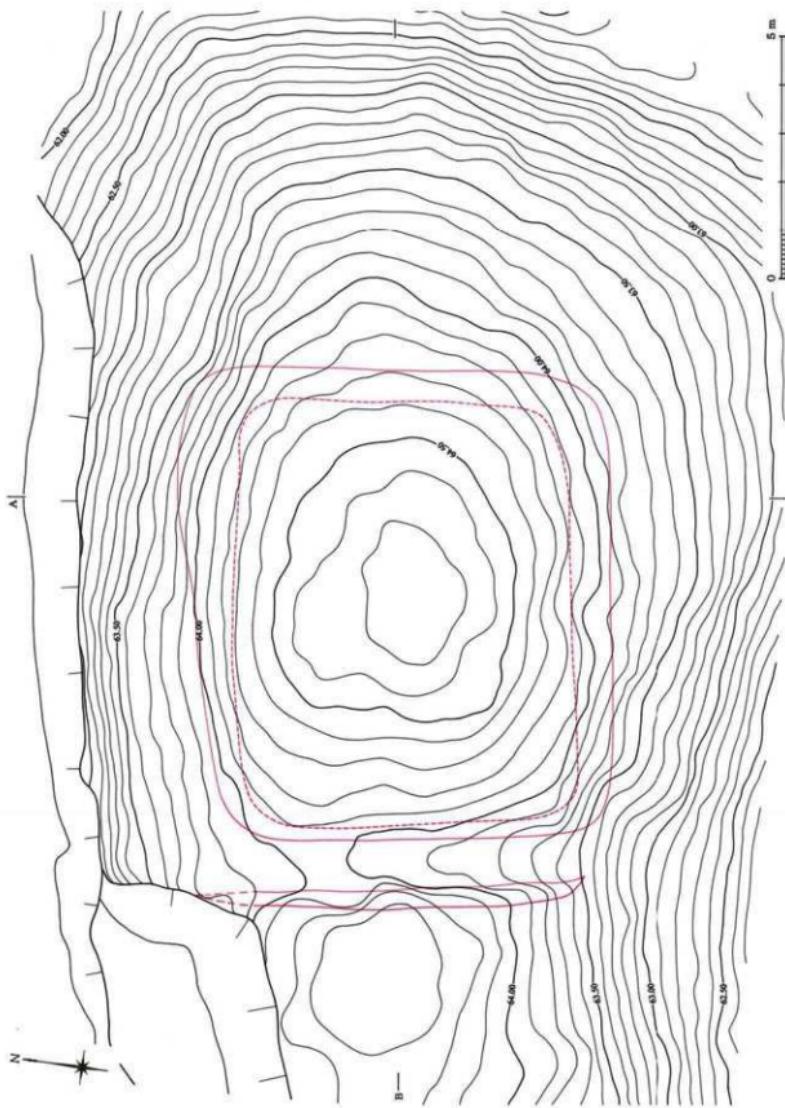
縮尺 1/300



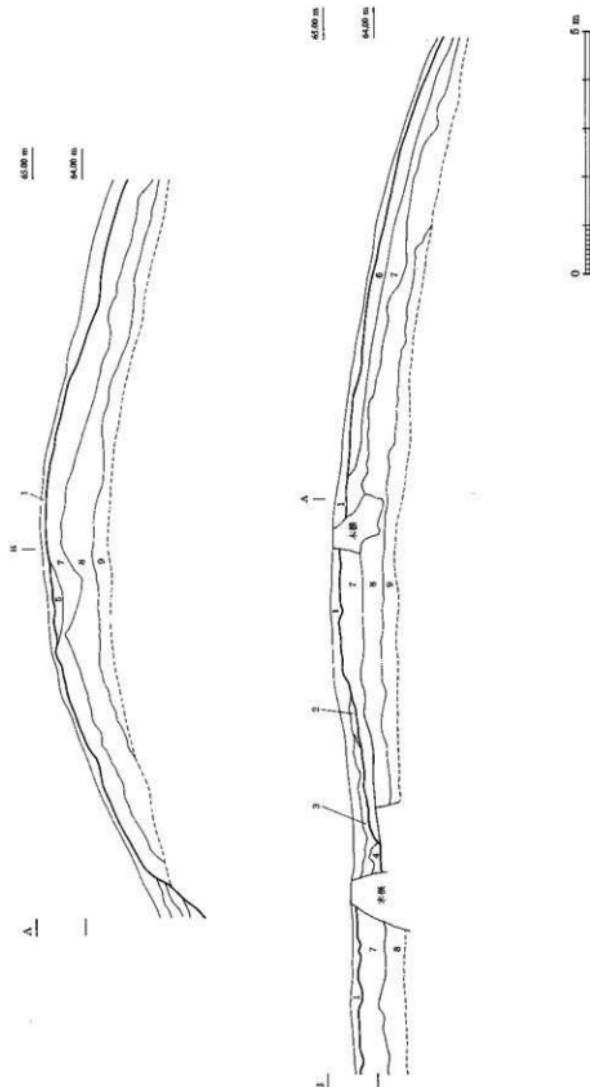
2. 第 1 号墳遺物出土状態図

縮尺 1/300

図面〇六 遺構実測図



図面十 遺構実測図

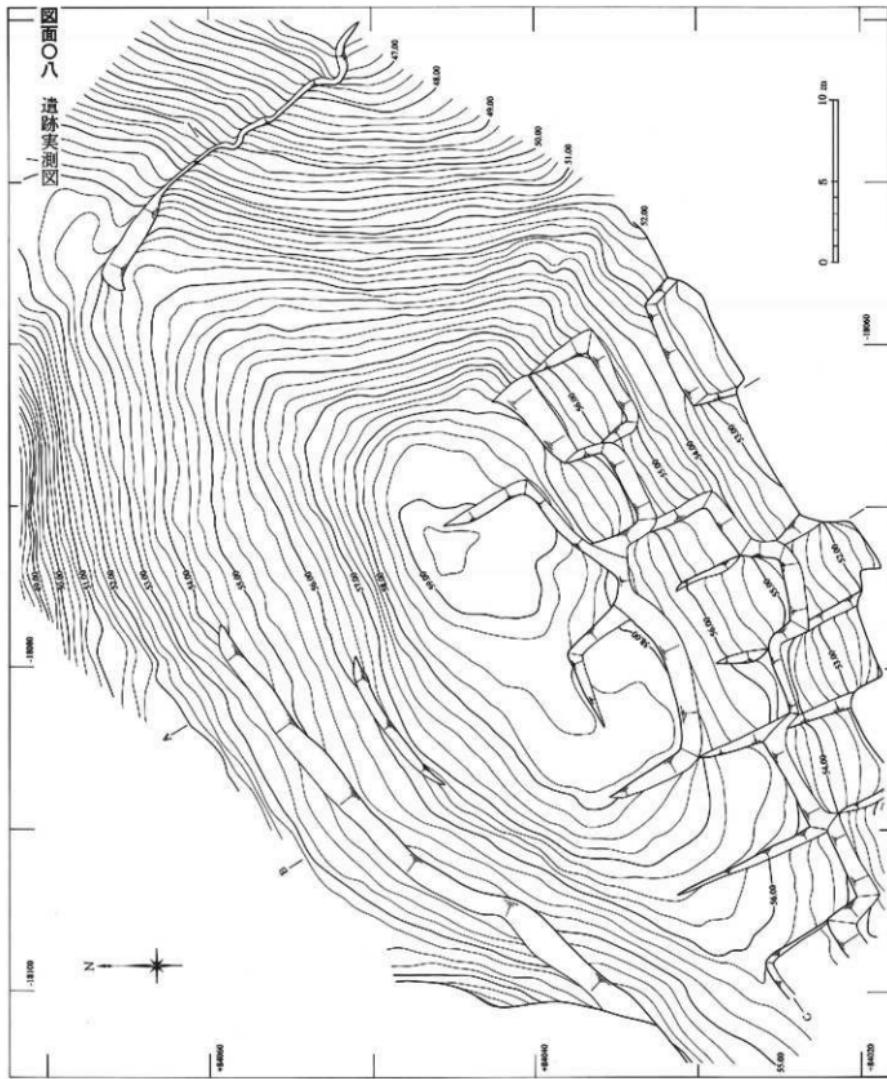


1. 紅色 I。表上層、砂質・砂利・小砂利まばらに含む、しまり有粘性弱、根の深入著しい。
2. 棕色土。砂質多量に含み、小砂利まばらに含む、しまり有粘性弱。
3. 印海色上。砂粒・小砂利・小砂利まばらに含む、しまり有粘性弱。
4. 和色 I。砂質、細粒入する、しまり有粘性弱。
5. 棕色土。砂質、細粒入する、しまり有粘性なし。
6. 黄褐色土。砂質・小砂利・泥岩類の岩片5～10cm程度まばらに含む、しまり有粘性なし。
7. 紅色 I。砂質・小砂利まばらに含む、しまり有粘性弱。
8. 淡褐色土。砂質、泥岩類の岩片1～2cm多量に含む、しまり有粘性弱。
9. 黄褐色 I。砂質、泥岩類の岩片1～2cmが水平に地盤する、しまり有粘性弱。

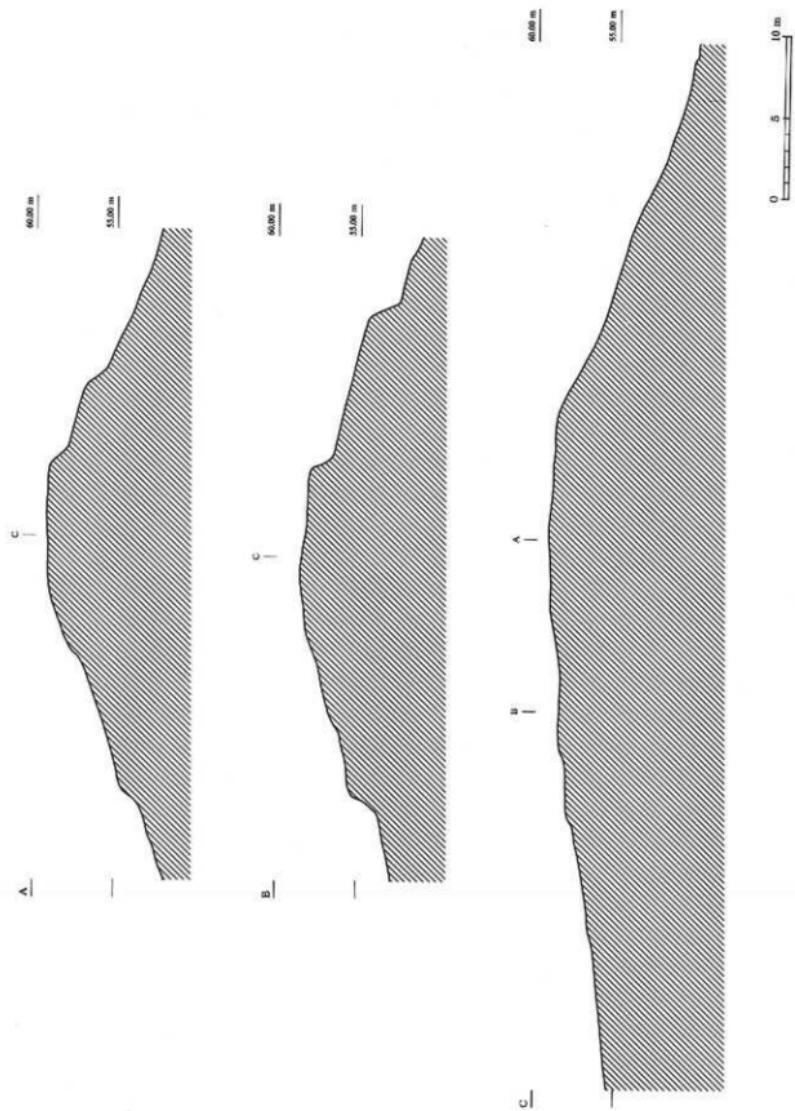
第1号埴土層断面図

縮尺1/100

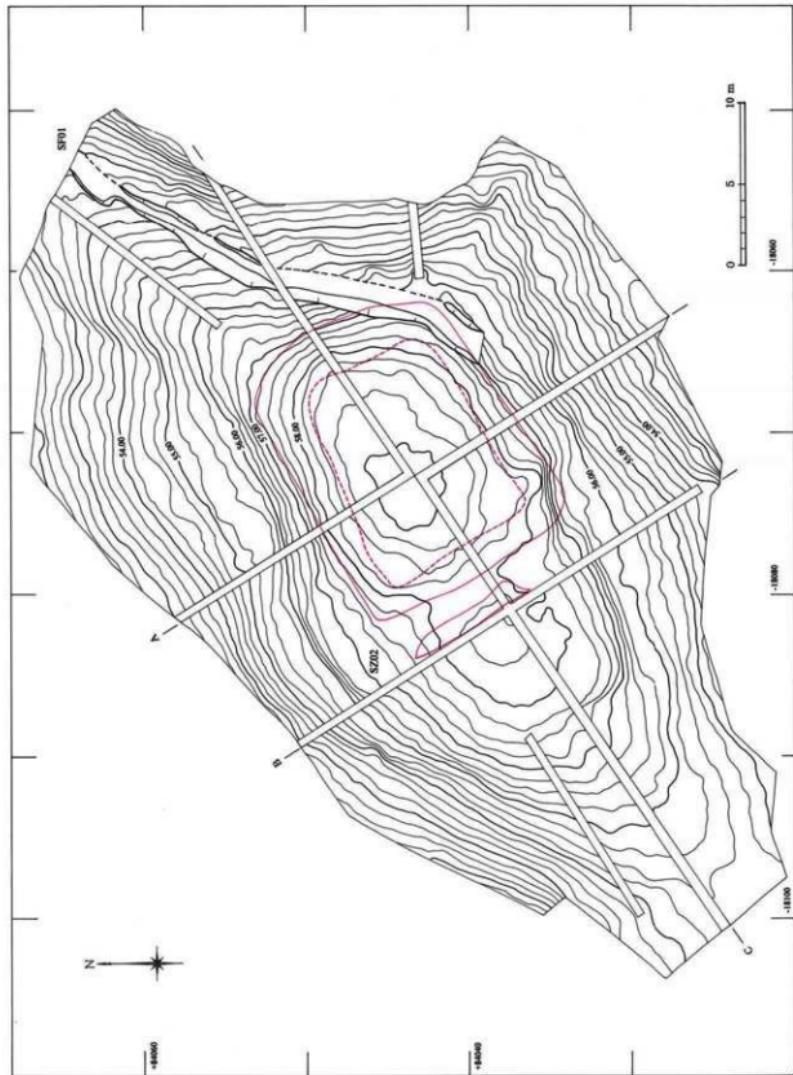
遺跡実測図



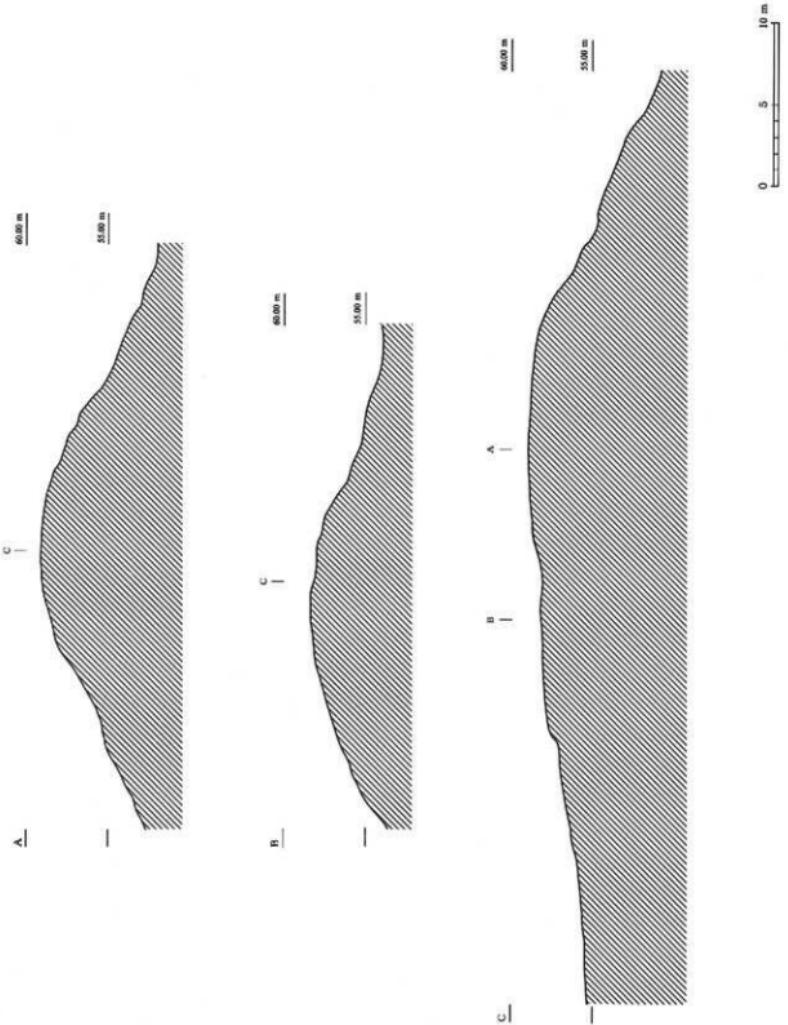
図面〇九 遺跡実測図



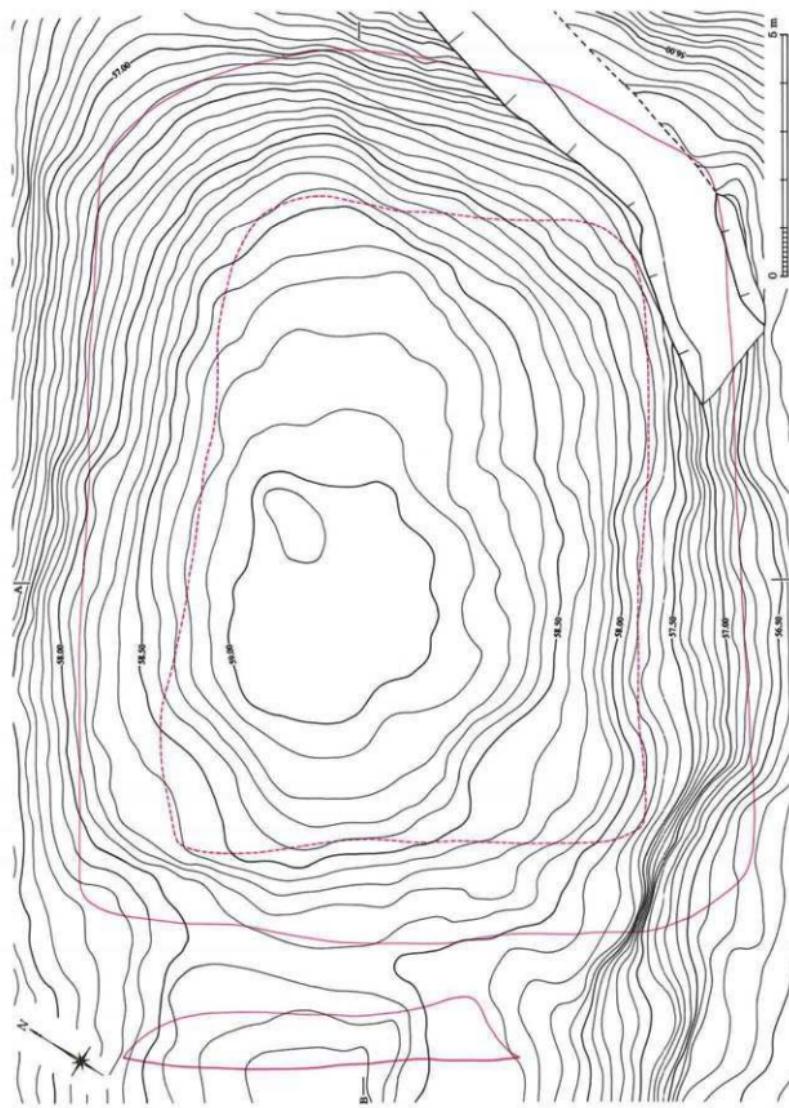
図面一〇 遺跡実測図



図一 遺跡実測図

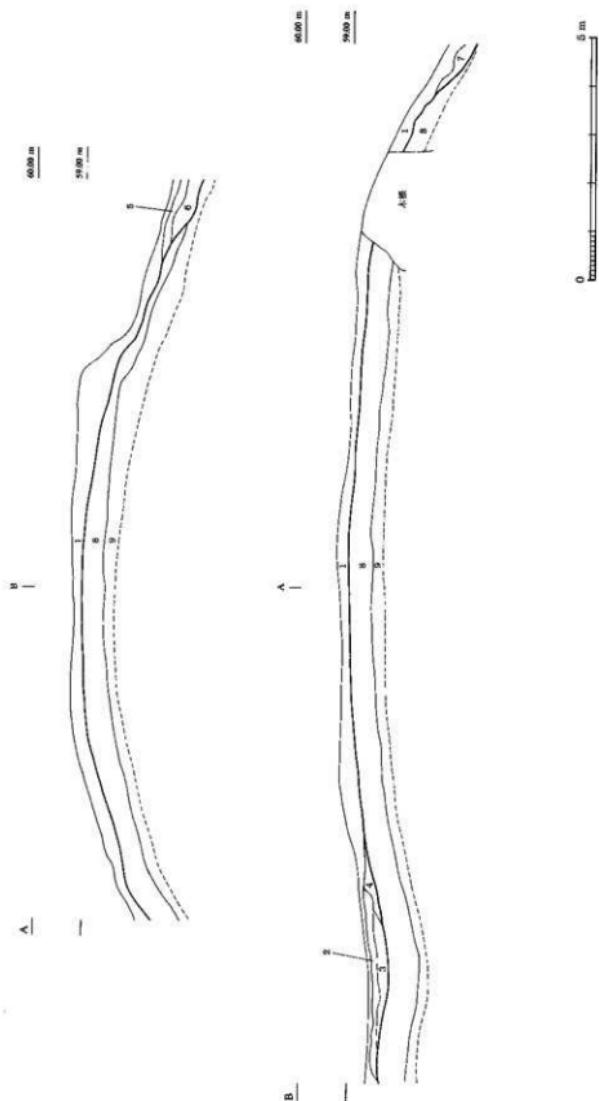


図面一二 遺構実測図



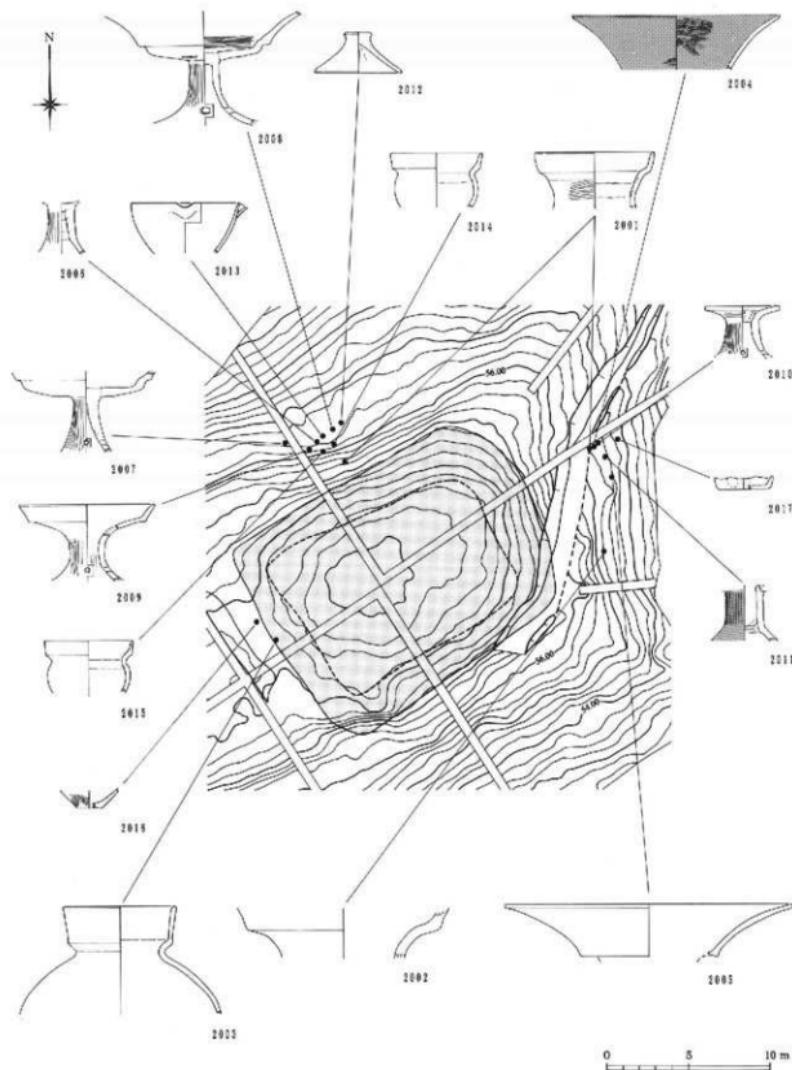
第2号墳全体図

縮尺 1/100



1. 棕色土。壳土質、砂粒・小砂利・土砂に含む、しまり有粘性弱、根深入否しい。
2. 棕色Ⅰ。白色粒・砂粒・小砂利・土砂に含む、しまり有粘性弱。
3. 断続地土。白色粒・砂粒・小砂利・黃褐色土に含む、しまり有粘性やや弱。
4. 黄褐色土。白色粒・砂粒・土砂に含む、しまり有粘性やや弱。
5. 棕色土。白色粒・砂粒・土砂に含む、しまり有粘性弱。
6. 棕色土。白色粒・砂粒・泥炭質の岩片・泥炭色土に含む、しまり有粘性弱。
7. 棕褐色土。以降化性、泥炭質の岩片・泥炭色土に含む、しまり有粘性弱。
8. 黄褐色土。砂質・小砂利・泥炭質の岩片0.5~1cm多量に含む、しまり有粘性弱。
9. 黄褐色土。砂質・小砂利・泥炭質の岩片1~4cm多量に含む、しまり有粘性弱。

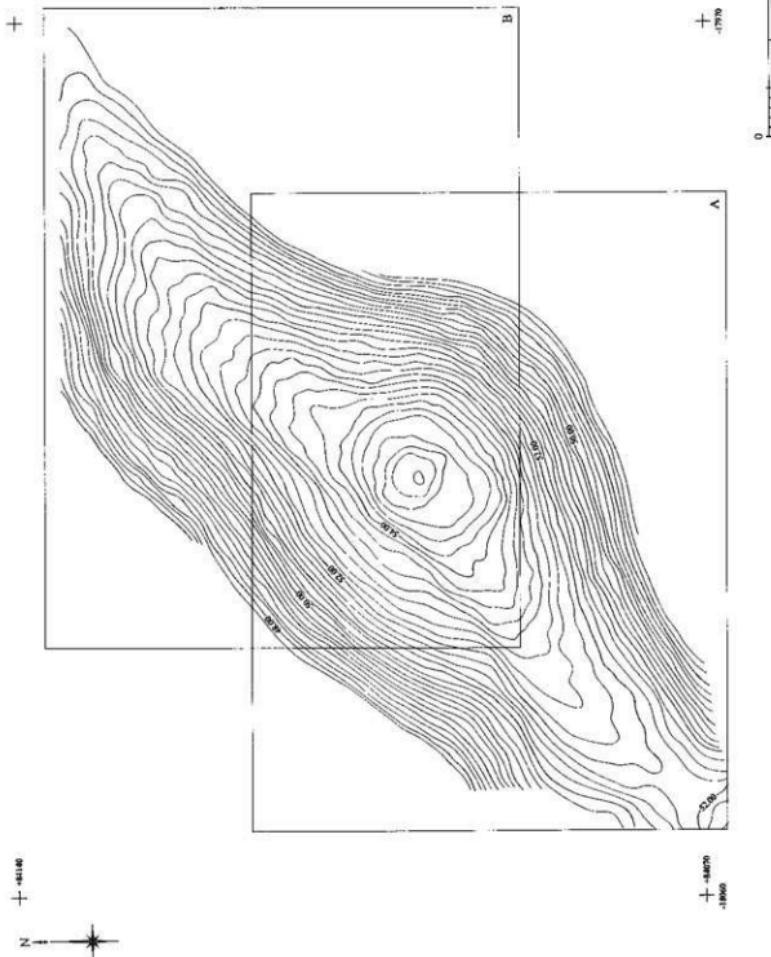
図面一四 遺構実測図



第2号墳遺物出土状態図

縮尺 1/300

図面一五 遺跡実測図

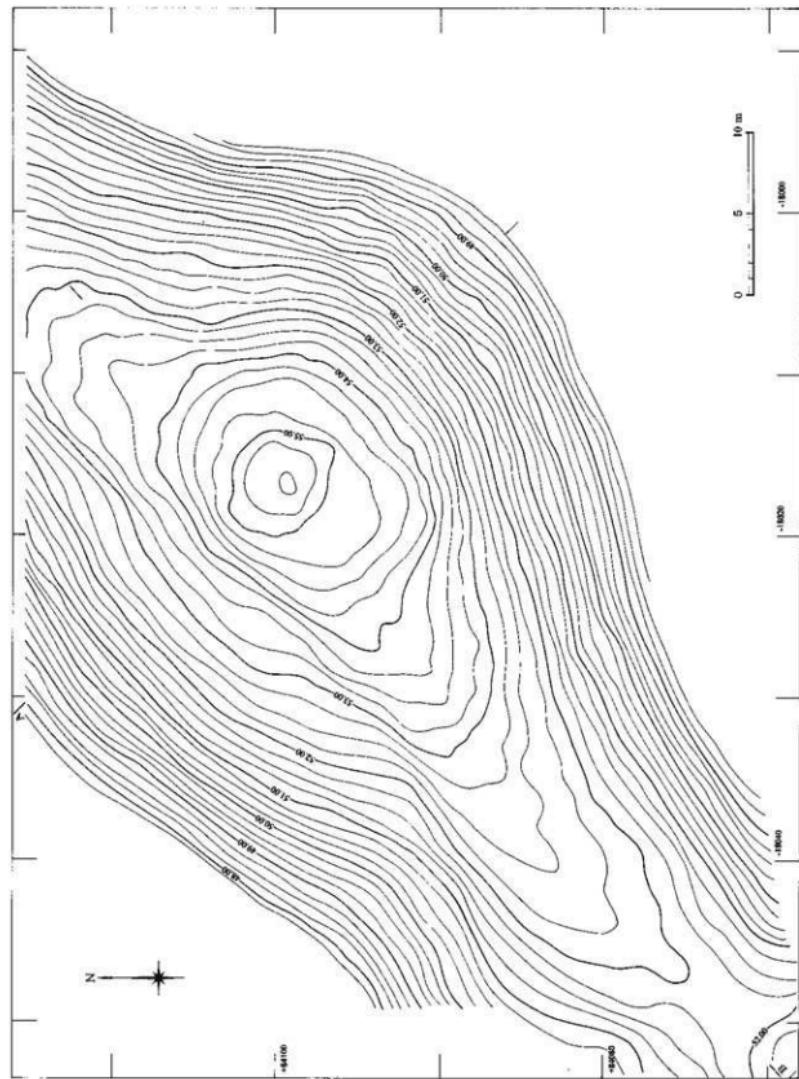


平盛11年度測量地區地形測量圖面配屬圖

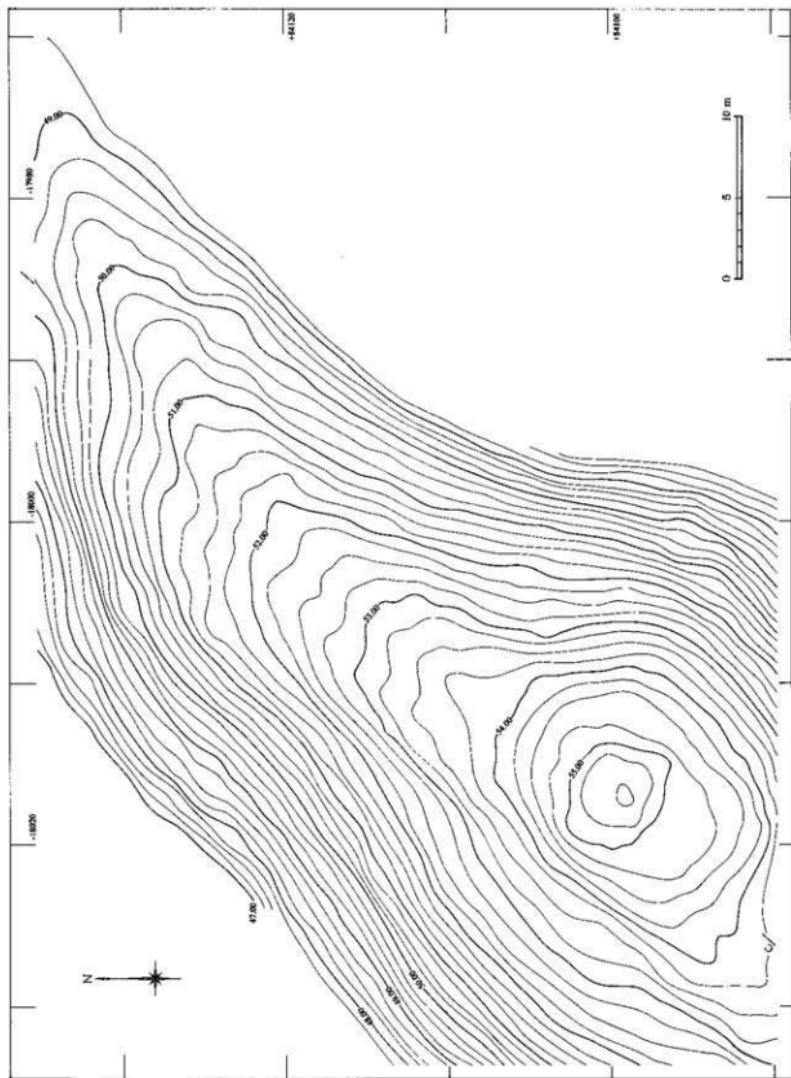
縮尺 1/500

A-图面16：平成11年度調査地区西側地形測量図、B-图面17：平成11年度調査地区東側地形測量図

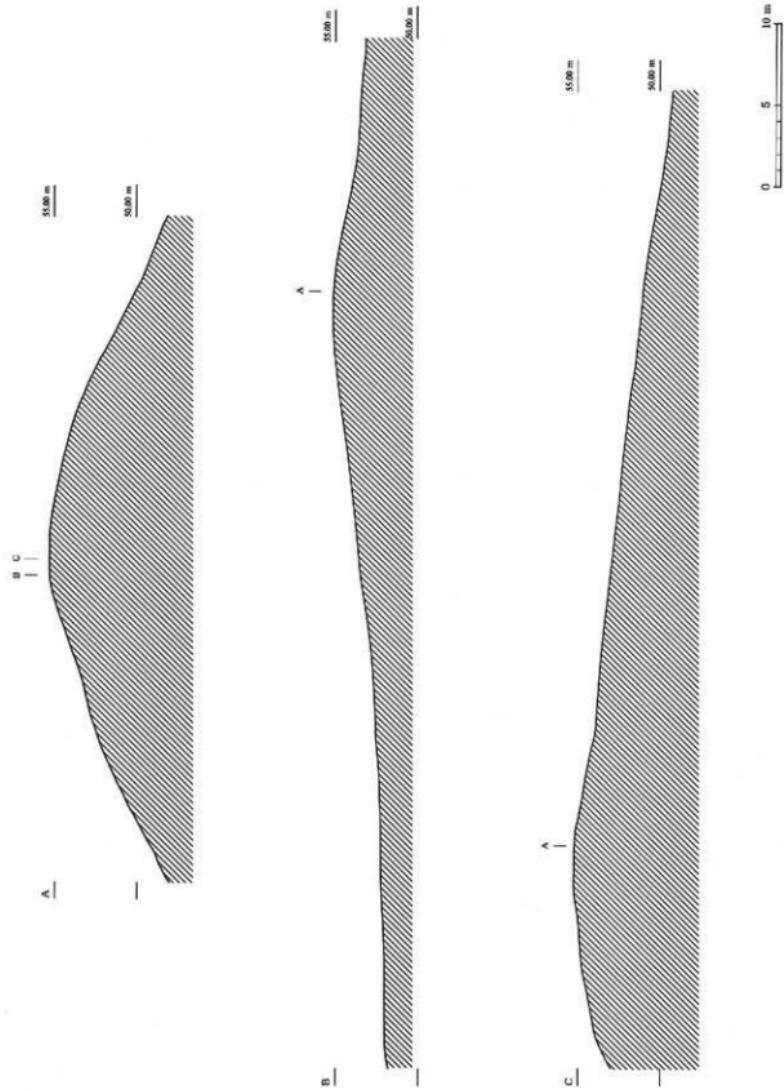
図面一六 造跡実測図



図面一七 遺跡実測図



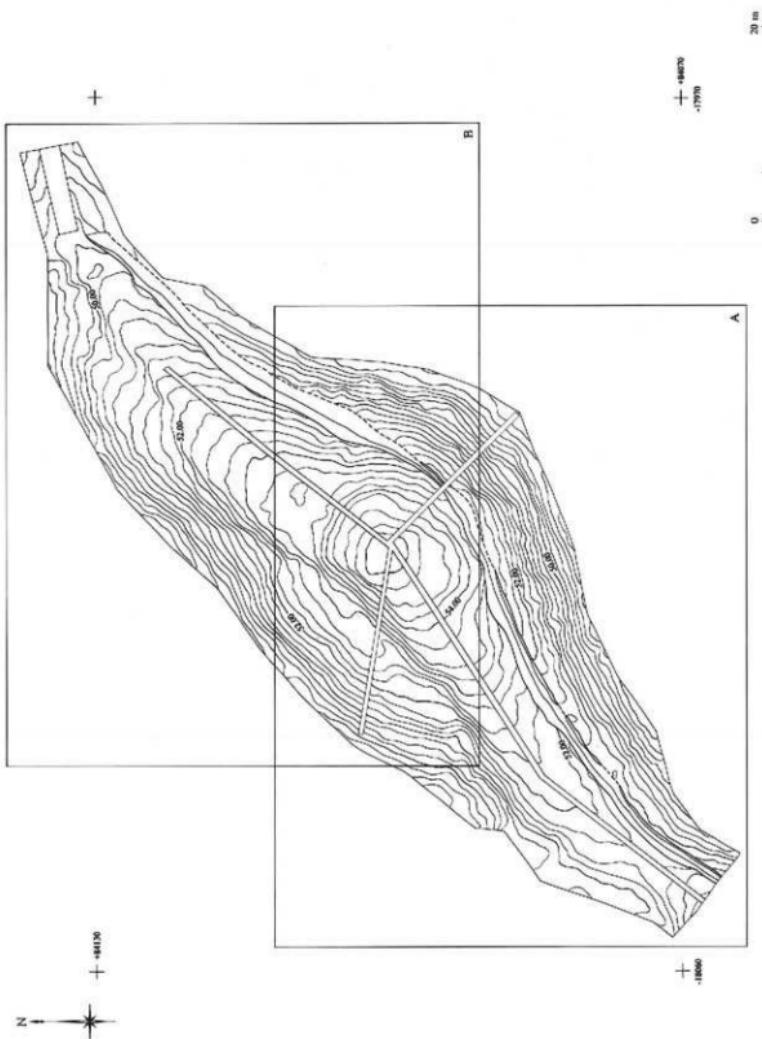
図面一八 遺跡実測図



平成11年度調査地区地形断面図

縮尺 1/300

図面一九 遺跡実測図

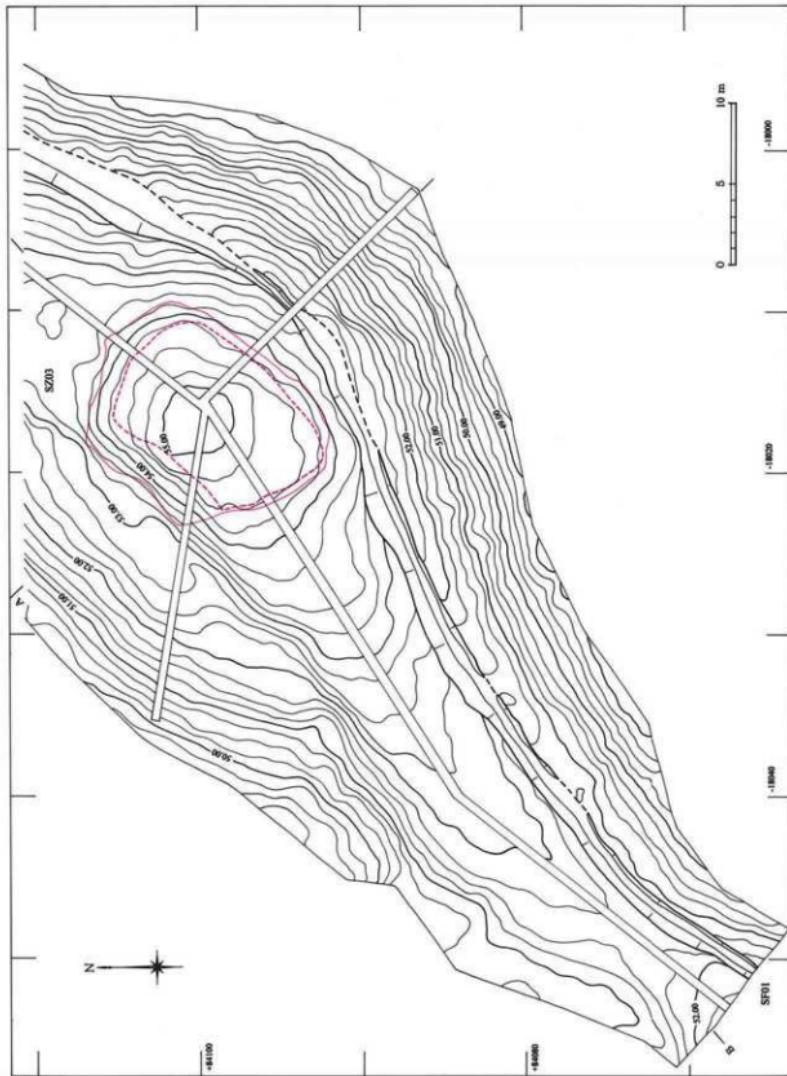


平成11年度調査地区全体図面配置図

縮尺 1/500

A - 図面20 : 平成11年度調査地区西側全体図、B - 図面21 : 平成11年度調査地区東側全体図

圖面二〇 遺跡実測図



### 平成11年度調査地区西側全体図

縮尺1/300

図面二  
遺跡実測図

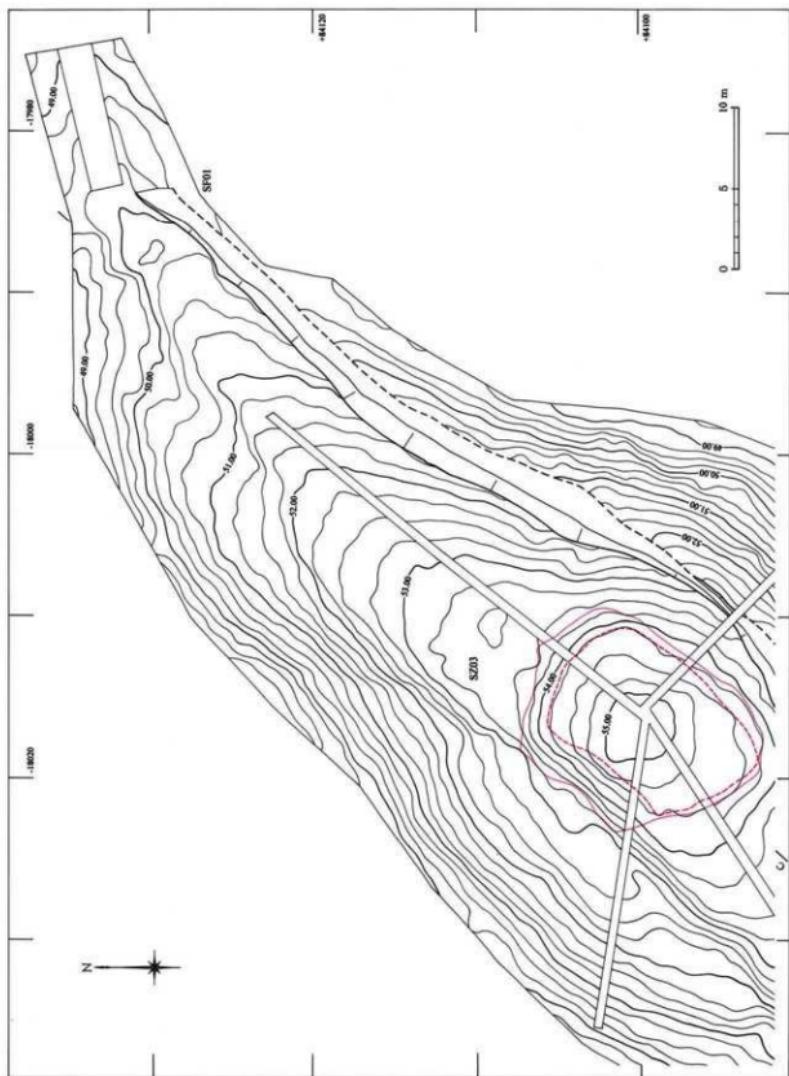
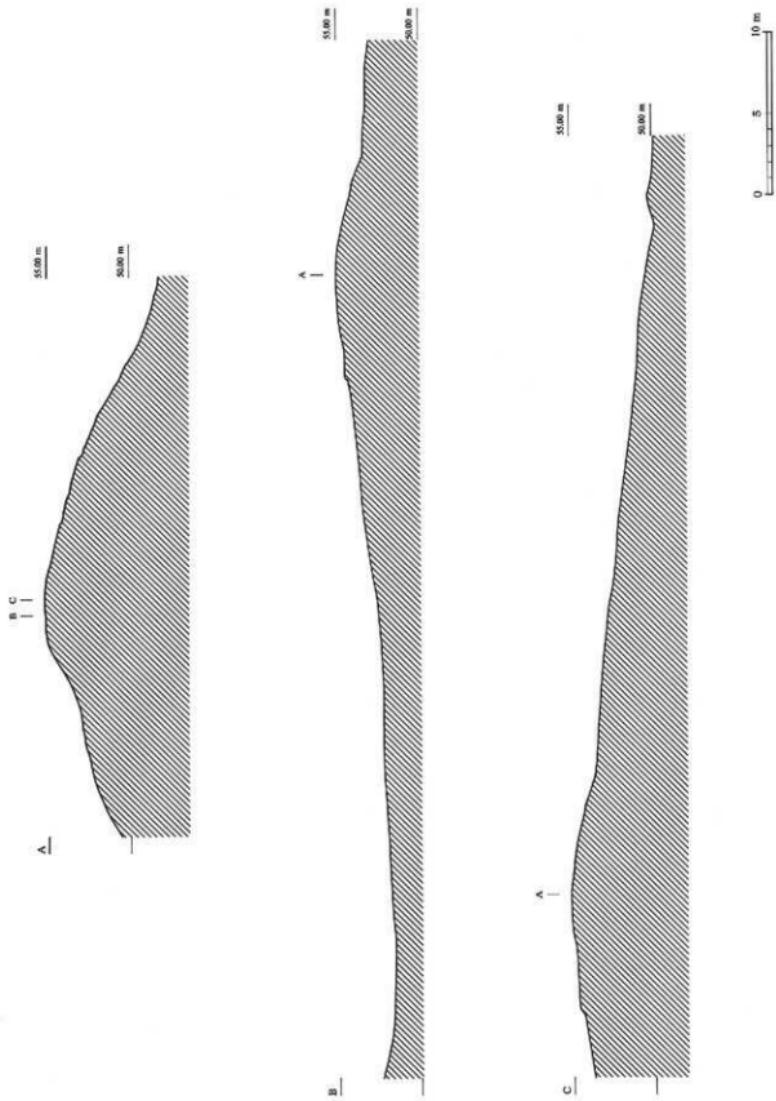


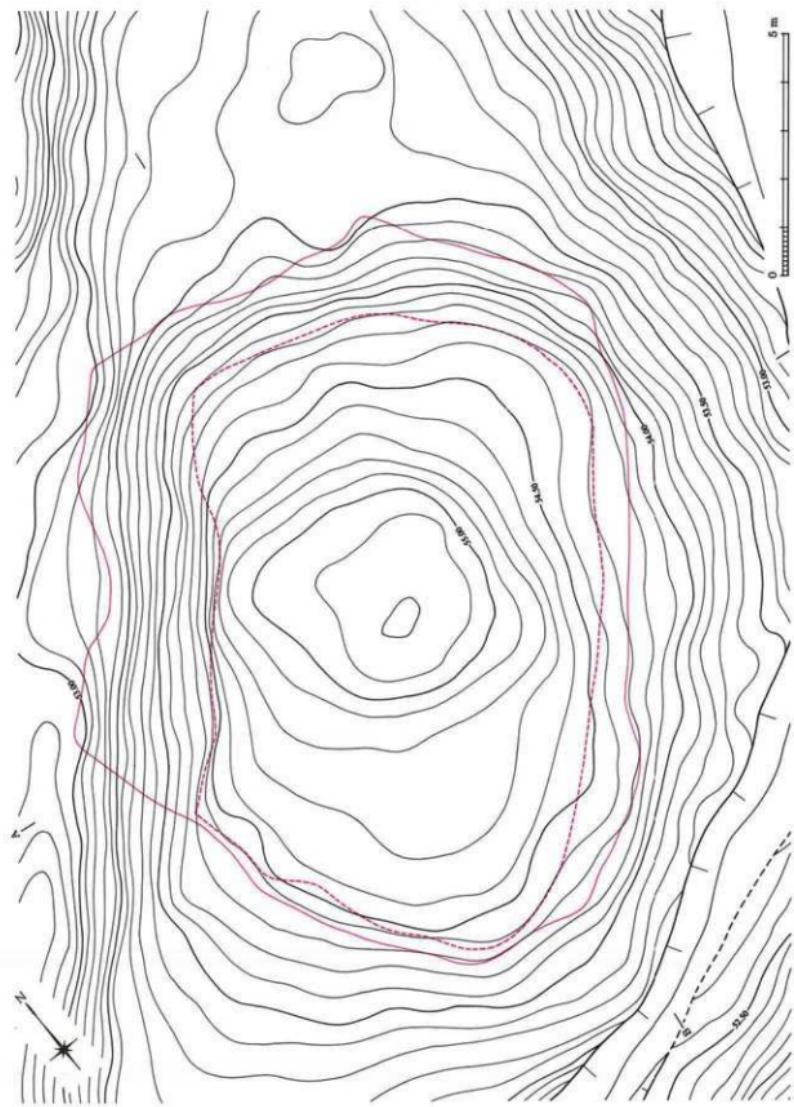
図111 遺跡実測図



平成11年度調査地区断面図

縮尺 1/300

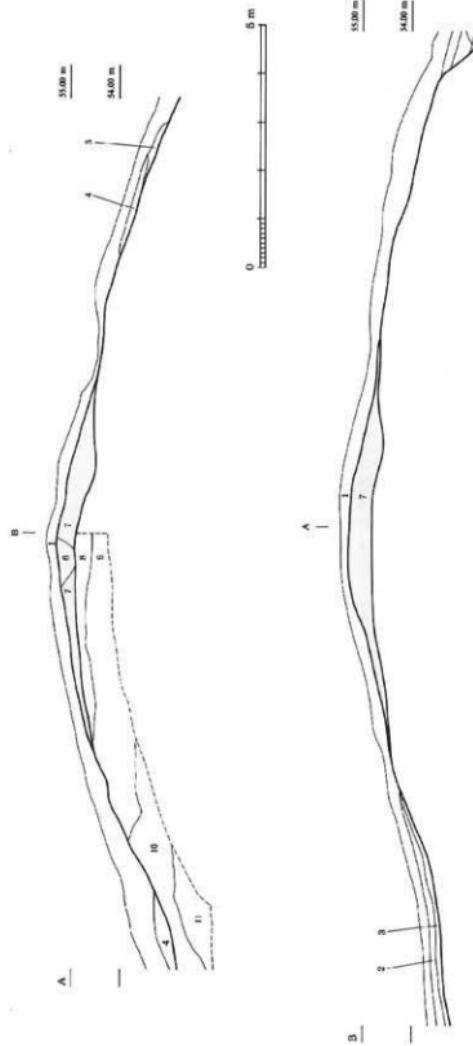
図面二三 遺構実測図



第3号墳埴丘測量図

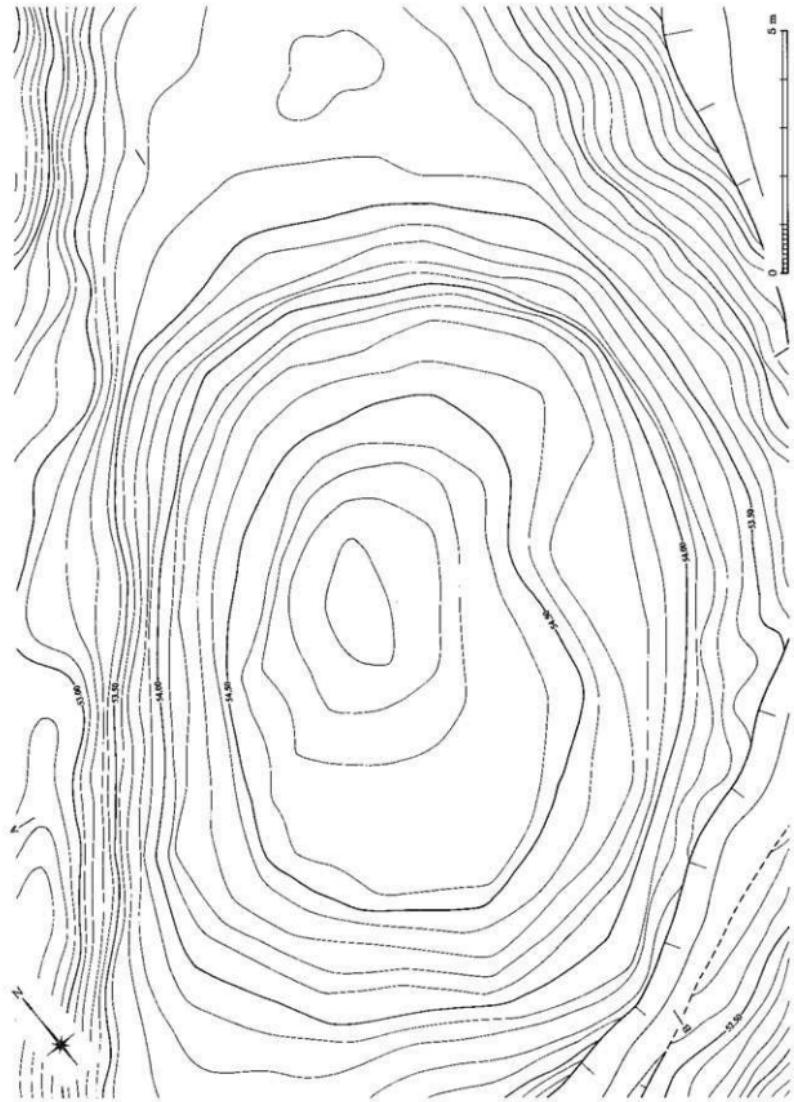
縮尺 1/100

図1断面  
造構実測図



1. 棕色土。黄土層、砂質土層に含む、しまり有粘性弱。
2. 黄褐色土。砂粒・炭化粒・泥岩類の岩片1cmまではに含む、しまり有粘性弱。
3. 棕色土。砂粒・炭化粒・泥岩類の岩片1～2cmまではに含む。
4. 棕色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩類の岩片1cmまではに含む、しまり有粘性弱。
5. 黄褐色土。泥岩類の岩片1～2cm・鰐歯土まではに含む、しまり有粘性なし。
6. 棕色土。盛土、7層と同一層であるが堆の表面が著しい、しまり弱粘性弱。
7. 棕色土。盛土、砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩類の岩片1cmまではに含む、しまり有粘性なし。
8. 黄褐色土。砂質、白色粒・泥岩類の岩片1～5cm程度に堆積し、鉄分が沈着する、しまり有粘性弱。
9. にかい黄褐色土。砂質、白色粒・泥岩類の岩片0.5～3cmまではに含む、しまり有粘性弱。
10. 黄褐色土。砂質、白色粒・泥岩類の岩片1～2cm少許含む、泥岩類の岩片の含有は少なくなる、しまり有粘性なし。
11. にかい黄褐色土。砂質、白色粒・泥岩類の岩片1～2cm少許含む、泥岩類の岩片の含有は少くなる、しまり有粘性なし。

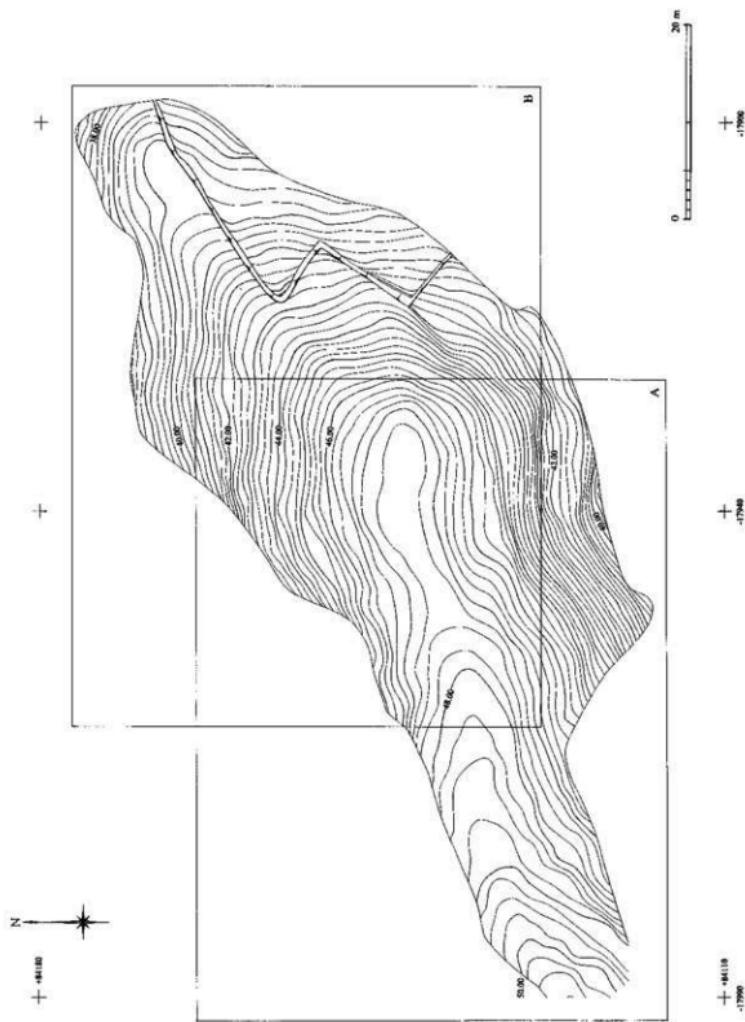
図二五 遺構実測図



第3号増光橋平面図

縮尺 1/100

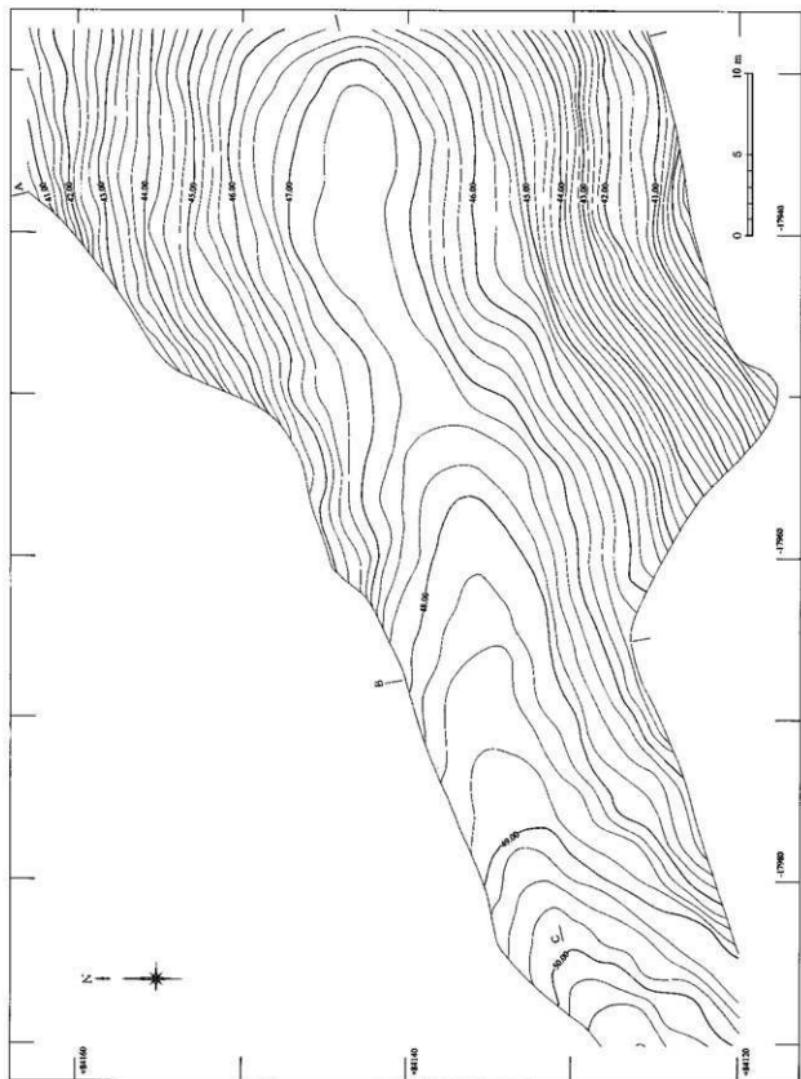
図面二六 遺跡実測図



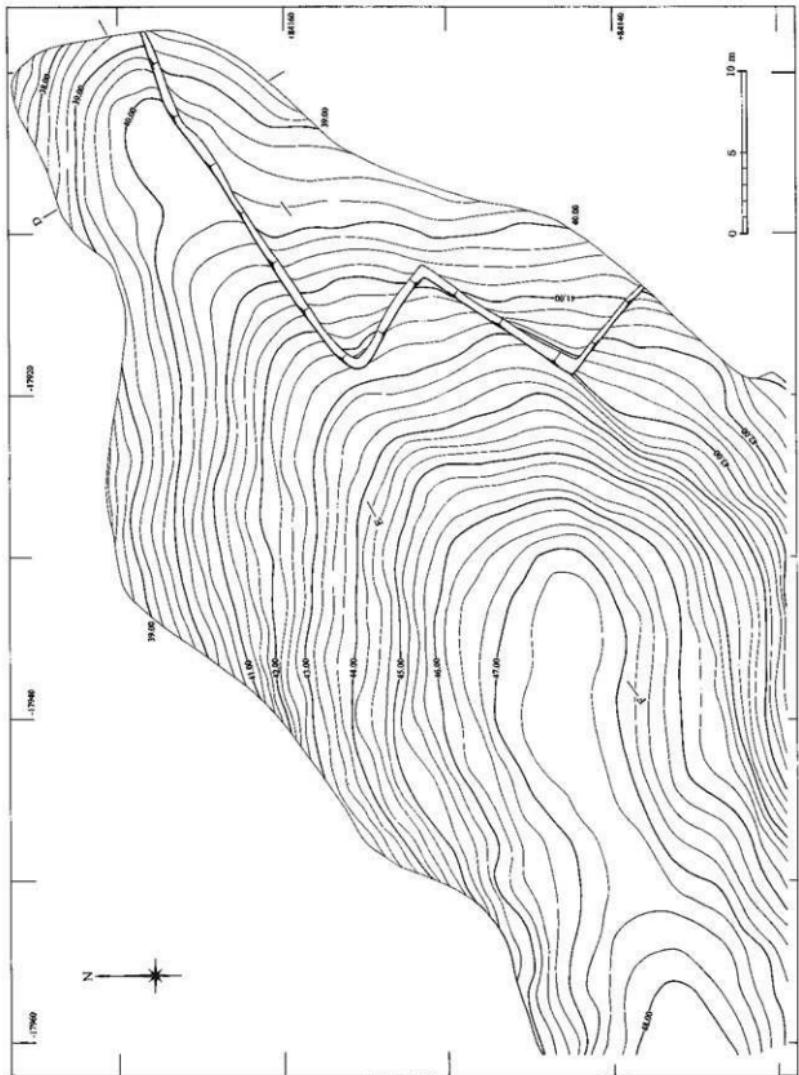
平成12年度調査地地形測量図面配置図

縮尺 1/500

A-図面27：平成12年度調査地区西側地形測量図、B-図面28：平成12年度調査地区東側地形測量図



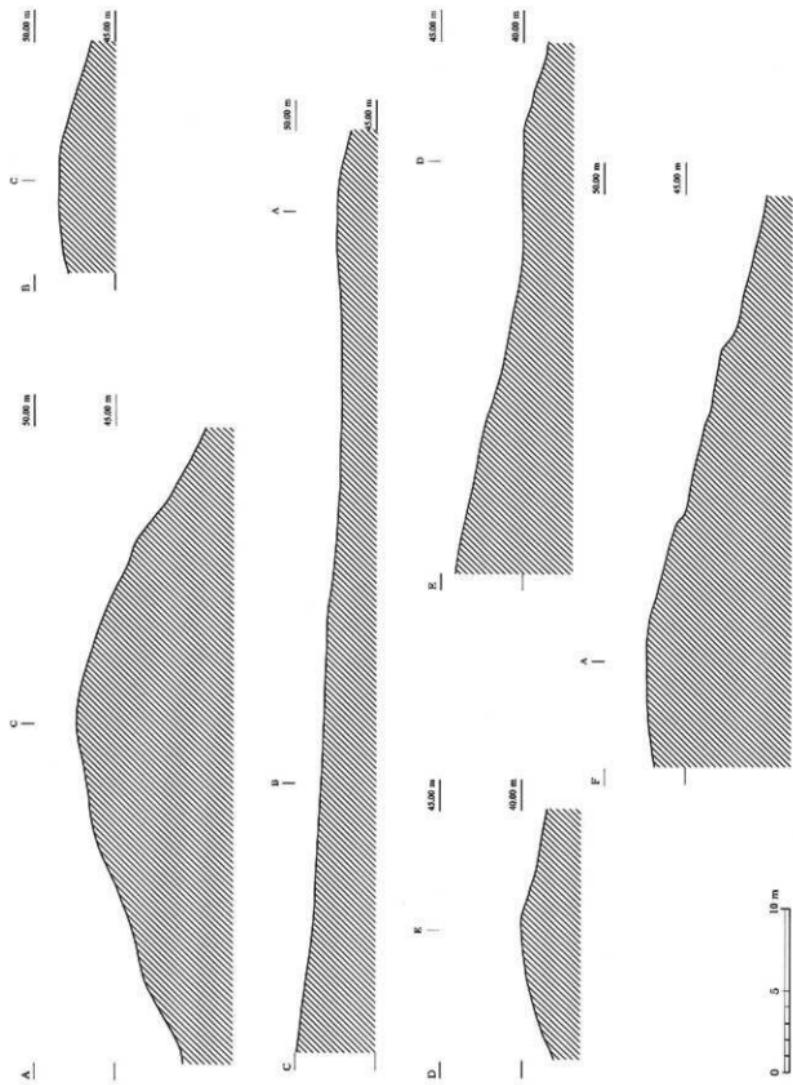
圖面二一八 遺跡実測図



平成12年度調査地区東側地形測量区

縮尺 1 / 300

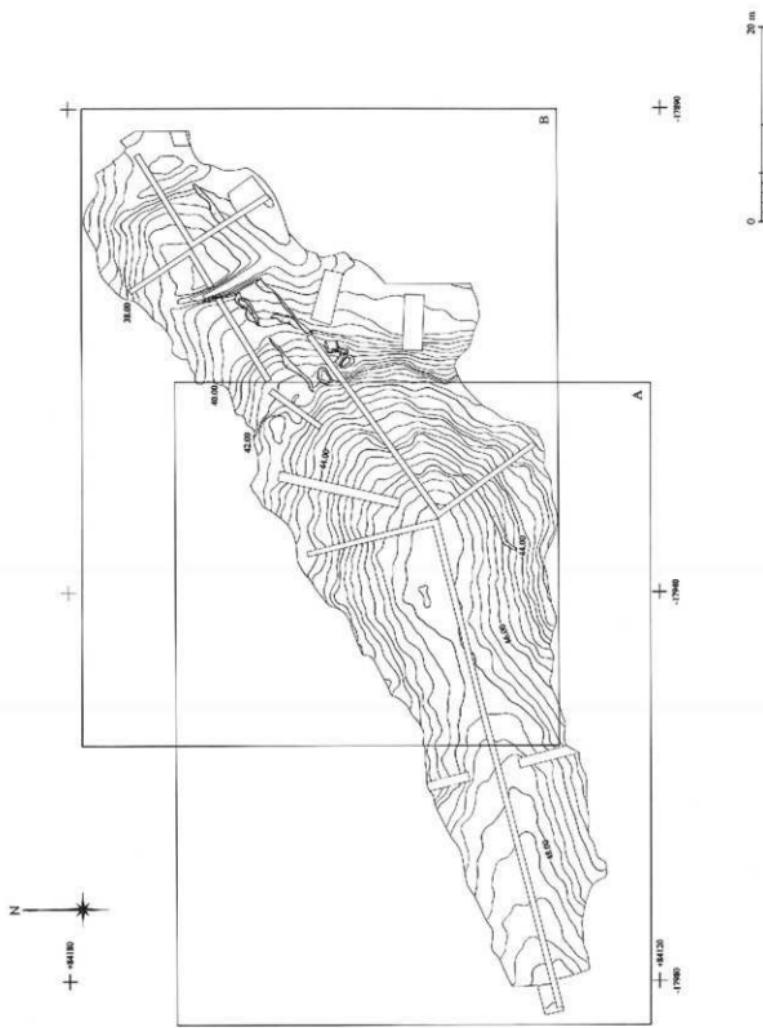
図面二九 遺跡実測図



平成12年度調査地区地形測量断面図

縮尺 1/300

図面三〇 遺跡実測図

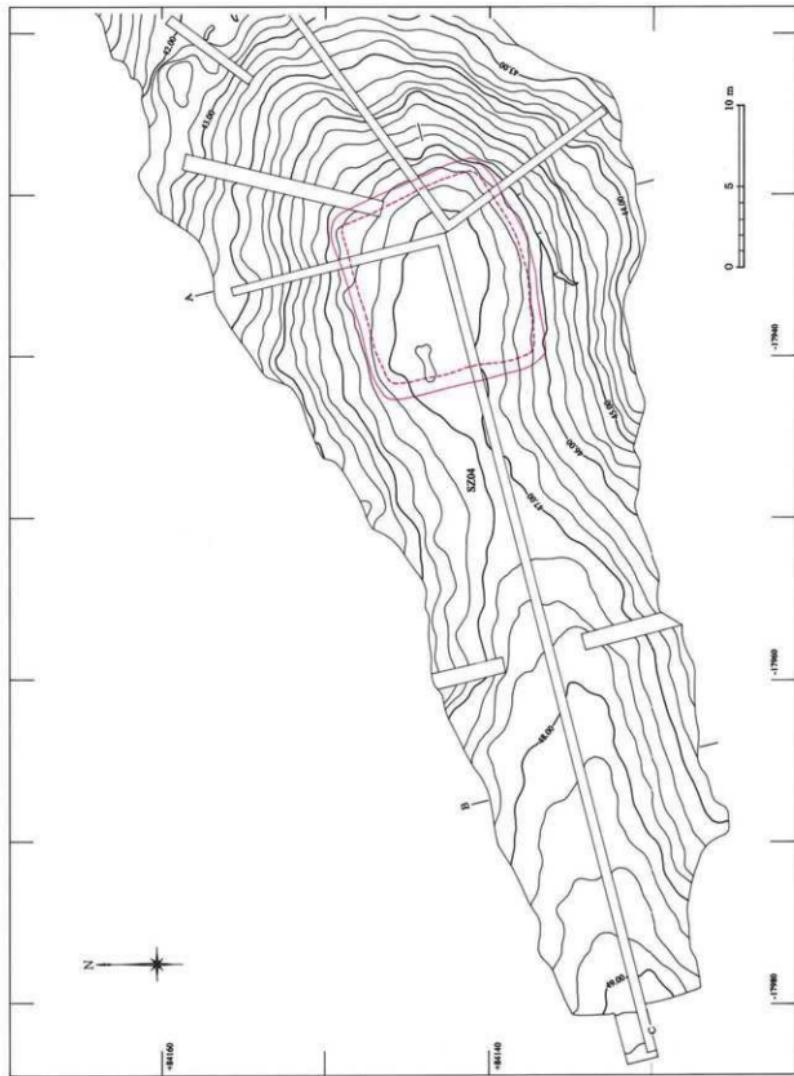


### 平成12年度調査地区全体図面配置図

縮尺 1 / 500

A - 図面31：平成12年度調査地区西側全体図、B - 図面32：平成12年度調査地区東側全体図

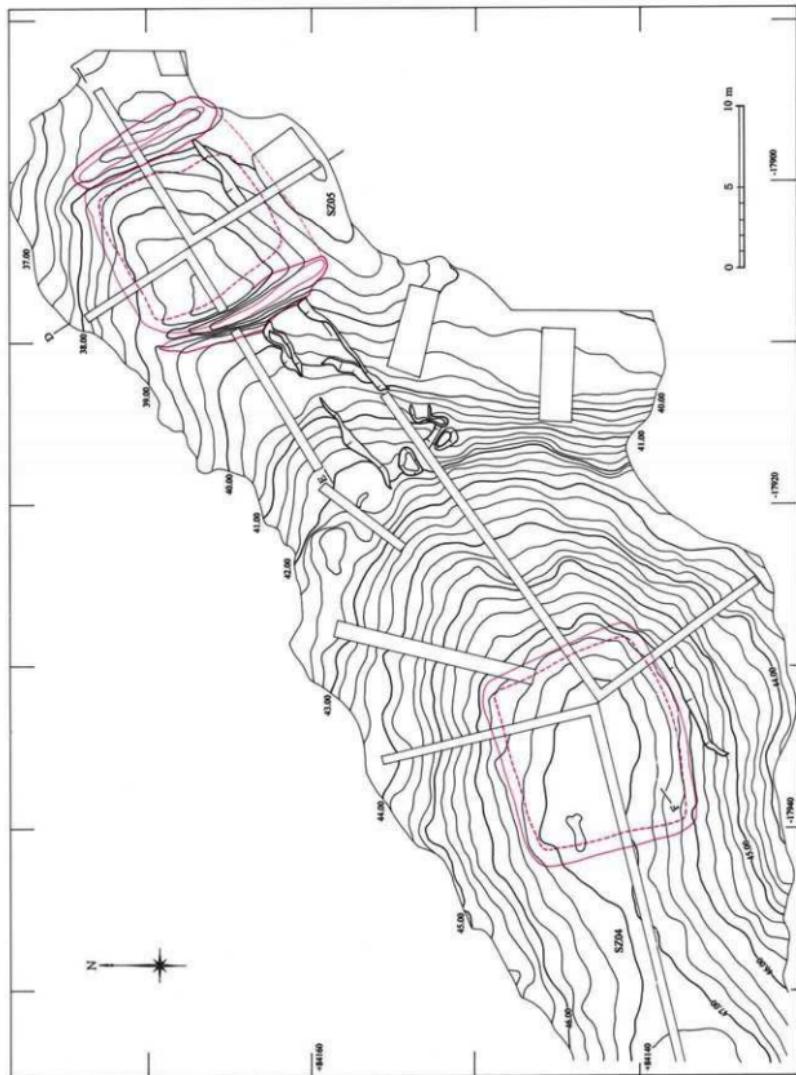
図面三一 遺跡実測図



平成12年度調査地区西側全体図

縮尺 1/300

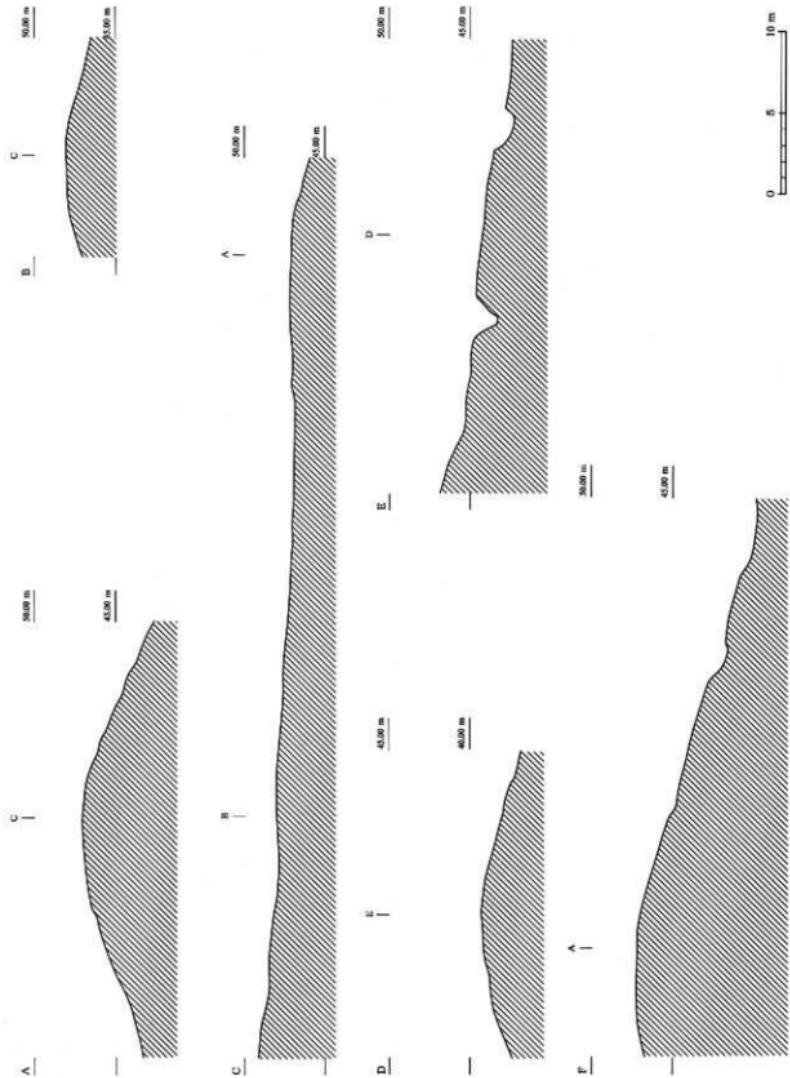
図III-1 遺跡実測図



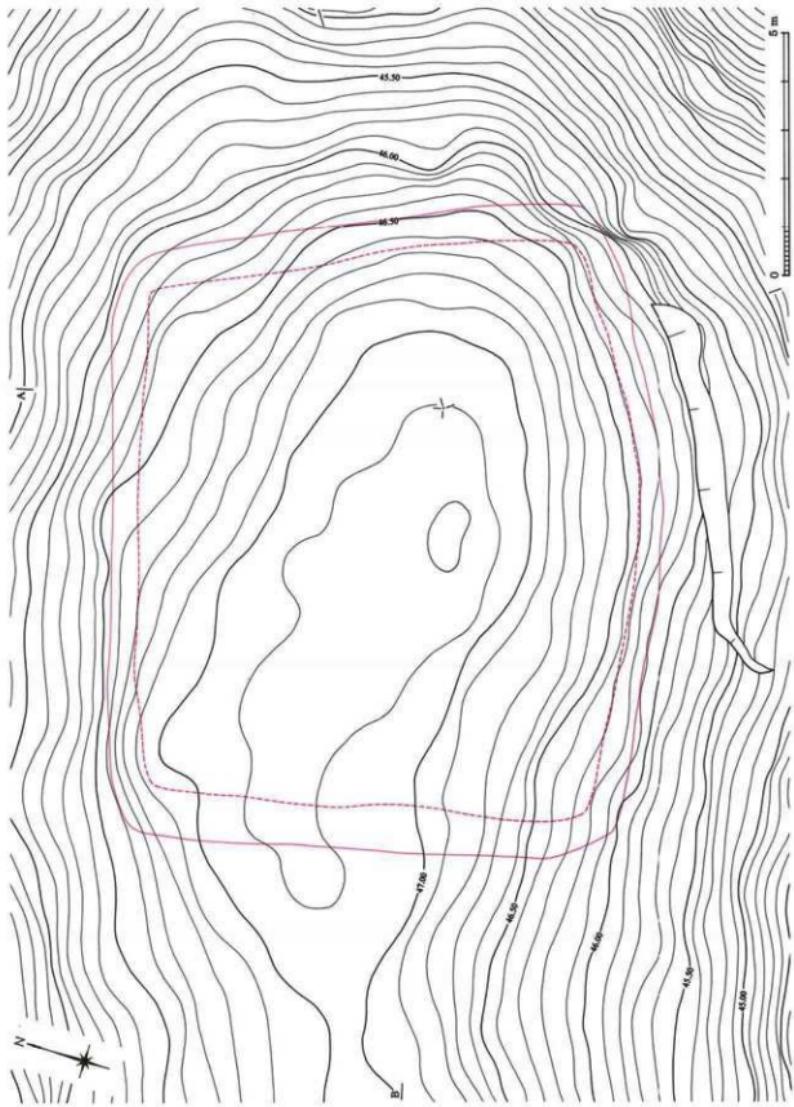
平成12年度調査地区東側全体図

縮尺 1/300

図三三 遺跡実測図



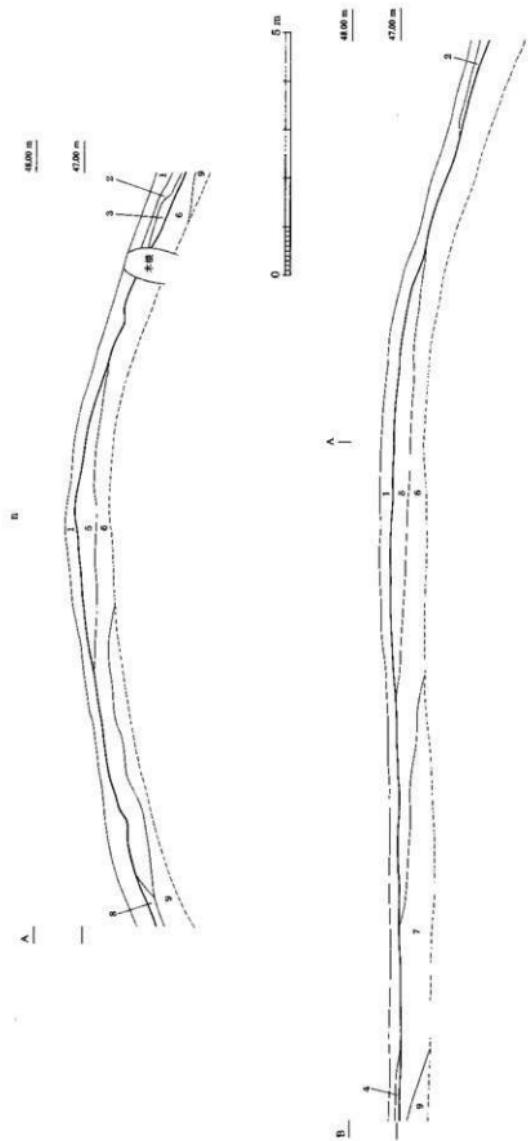
図面三四 遺構実測図



第4号墳全体図

縮尺 1/100

## 河川断面図

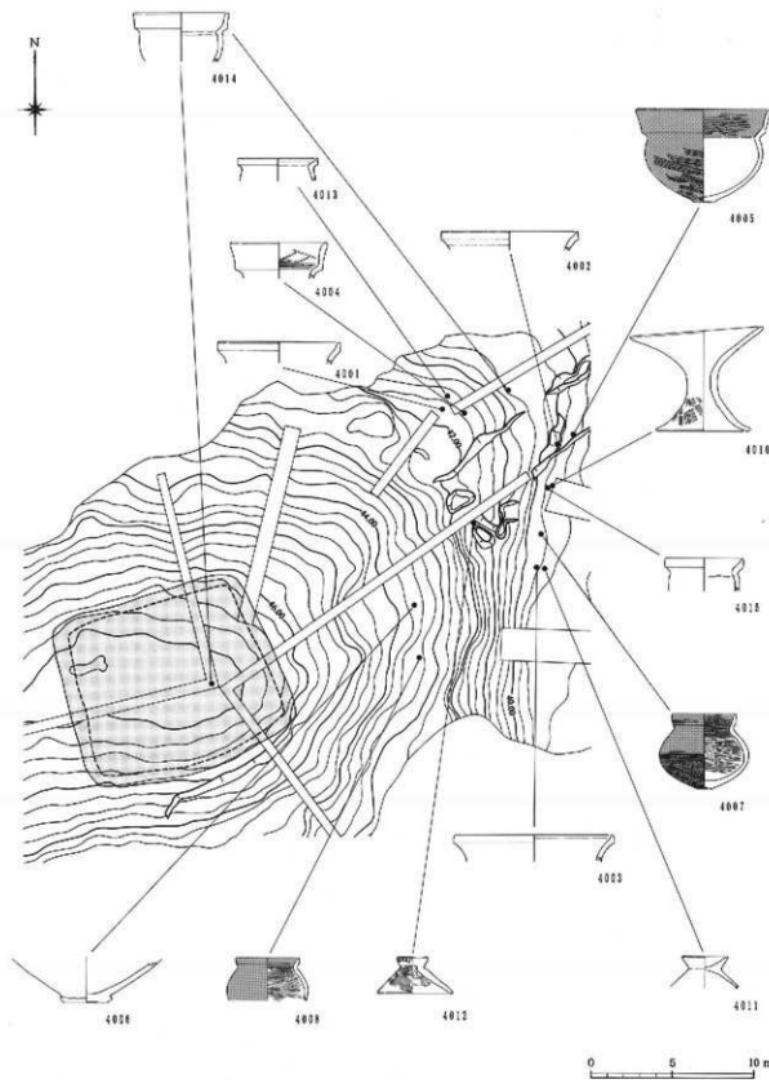


1. 暗褐色 [表土層] 砂質・白色土・白色砂・白色粘・泥炭層の岩片0.5~2cm・炭化木まばらに含む、しまり有特性なし、根の混入が著しく基盤層まで浸食する。
2. 黄褐色土。砂粒・白色粒・灰化粒・泥炭質の岩片1~5cmまばらに含む。
3. 敷地色土。砂粒・白色粒・灰化粒・泥炭質の岩片1~10cmまばらに含む、「しまり有特性なし」、2層よりやや深い。
4. にぶい黄褐色 [砂質・白色砂・灰化砂・泥炭層の岩片] 1~3cmまばらに含む、「しまり有特性なし」、根の混入が多い。
5. 黄褐色土。砂質・白色砂・泥炭質の岩片0.5~5cm層に含む、「しまり有特性なし」、基本的に6層と同様。
6. にぶい黄褐色土。砂質・白色砂・泥炭質の岩片0.5~5cm層に含む、「しまり有特性なし」。
7. 灰質褐色土。砂質・白色砂・泥炭質の岩片2~3cm層に含む、6層と比較的同時に形成されるが、鉄分の影響が認められる、しまり有特性なし。
8. にぶい黄褐色土。砂質・H色粒まばらに含む、「しまり有特性なし」。
9. 灰質褐色 [表土層] 砂質・白色土・白色砂・泥炭層の岩片1~2cmまばらに含む、「しまり有特性なし」。

第4号墳土岡断面図

縮尺1/100

図面三六 遺構実測図



第4号墳遺物出土状態図

縮尺 1/300

図面三七 遺構実測図

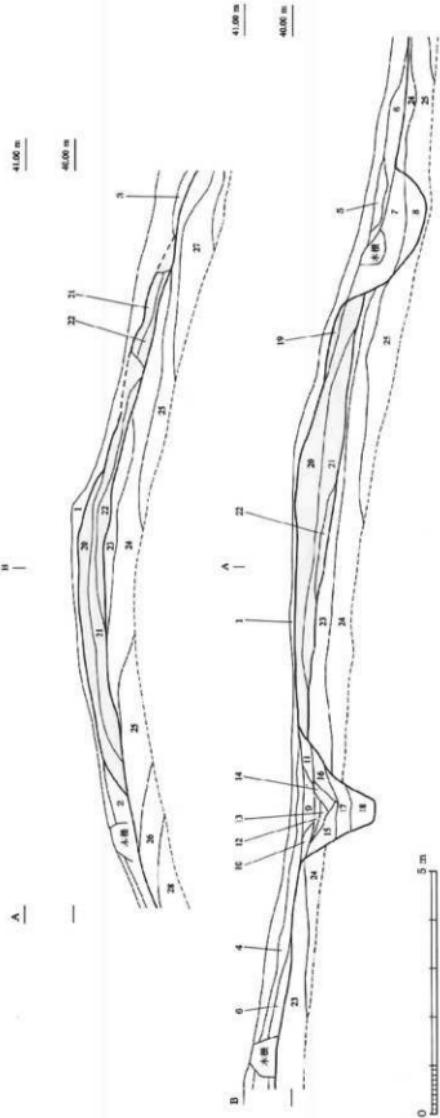


第5号墳墳丘測量図

縮尺 1/100

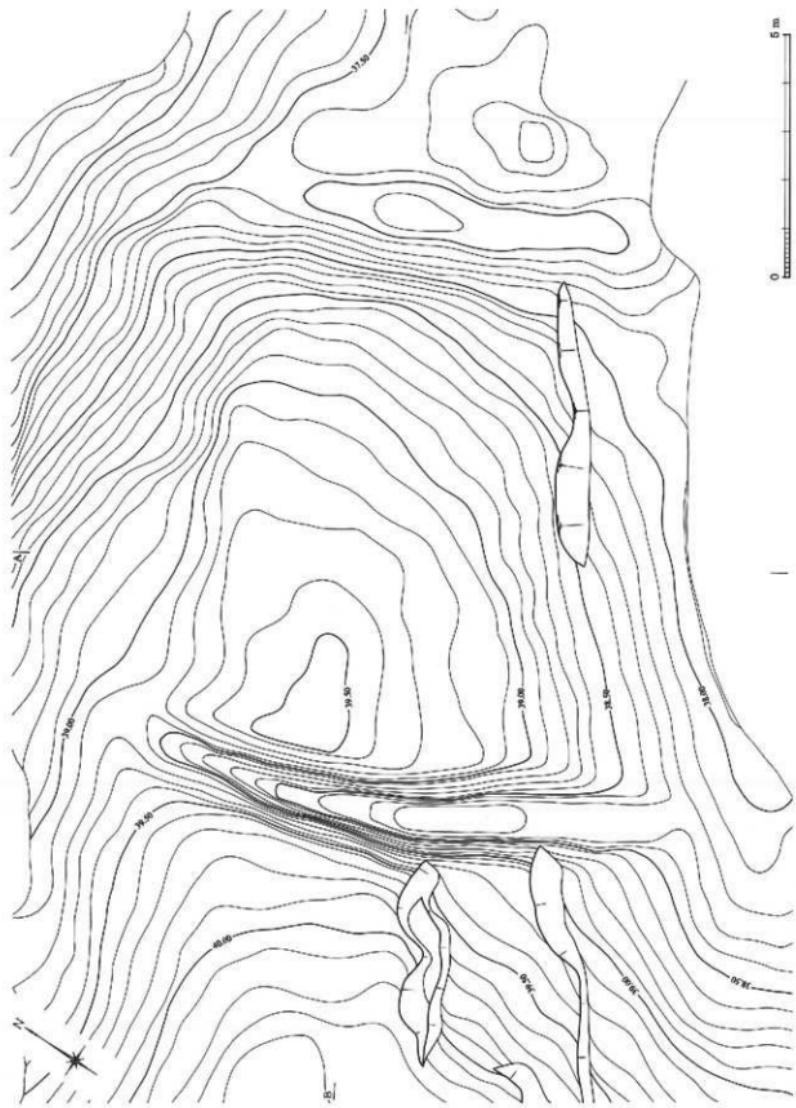
第5号填土断面図

縮尺 1/100



1. 黄褐色土。表土、砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.3~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。  
2. にぶい黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒まではらに含む、しまり有粘性弱。
3. 黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.5~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
4. 黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.5~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
5. にぶい黄褐色土。解褐色土との層十層、砂粒・白色粒・炭化粒まではらに含む、しまり有粘性弱。
6. 黄褐色土上。砂粒・白色粒・炭化粒まではらに含む、泥岩質の岩片 0.5~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
7. 黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒まではらに含む、しまり有粘性弱。
8. 黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.5~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
9. 黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.5~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
10. 黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.5~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
11. 黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.5~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
12. にぶい黄褐色土。解褐色土との層十層。砂粒・白色粒・炭化粒まではらに含む、しまり有粘性弱。
13. にぶい黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒まではらに含み粘分が増すする、砂の粒径は細い、しまり有粘性弱。
14. 黄褐色土上。砂質・白色粒・炭化粒まではらに含む、しまり有粘性弱。
15. にぶい黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.3~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
16. にぶい黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.3~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
17. にぶい黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.3~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
18. 黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.3~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
19. にぶい黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.3~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
20. にぶい黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.3~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
21. 黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.3~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
22. 黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.3~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
23. 黄褐色土。砂質・白色粒まではらに含む、しまり有粘性弱。
24. にぶい黄褐色土。砂質・白色粒まではらに含む、しまり有粘性弱。
25. にぶい黄褐色土。砂質・白色粒まではらに含む、しまり有粘性弱。
26. にぶい黄褐色土。砂質・白色粒まではらに含む、しまり有粘性弱。
27. 黄褐色土。砂粒・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.3~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。
28. にぶい黄褐色土。砂質・白色粒・炭化粒・泥岩質の岩片 0.3~1cm まではらに含む、しまり有粘性弱。

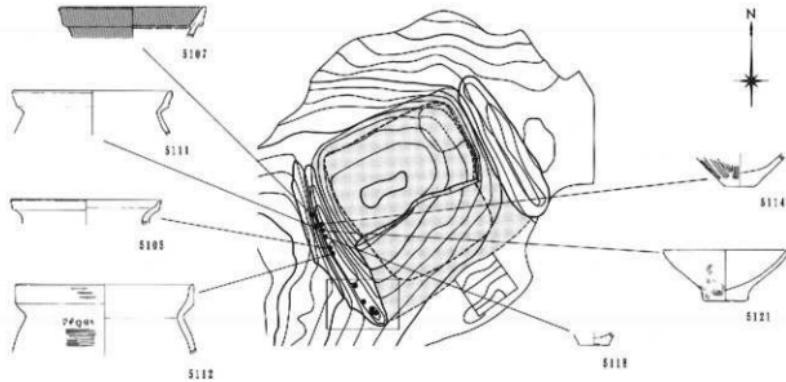
図面三九  
遺構実測図



第5号墳完掘平面図

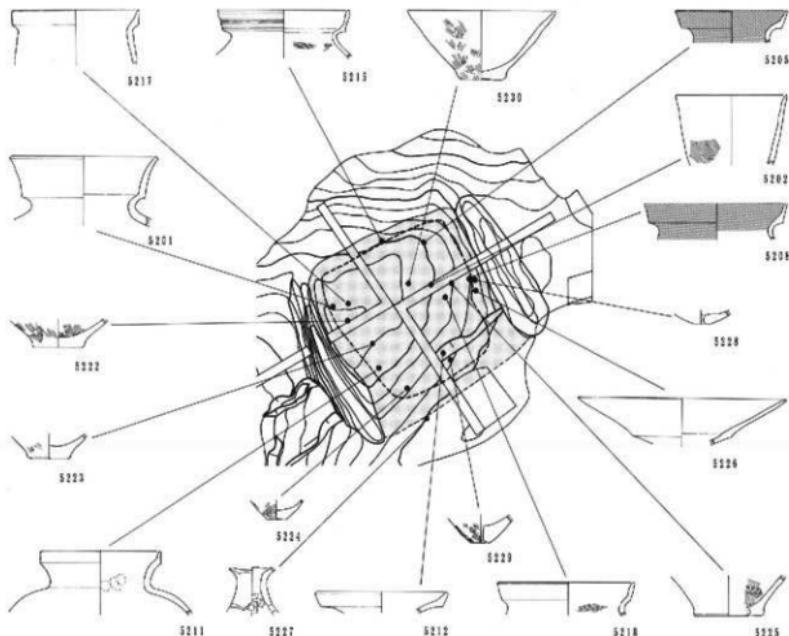
縮尺 1/100

図四〇 遺構実測図



1. 第5号墳遺物出土状態図・周溝内　縮尺1/300

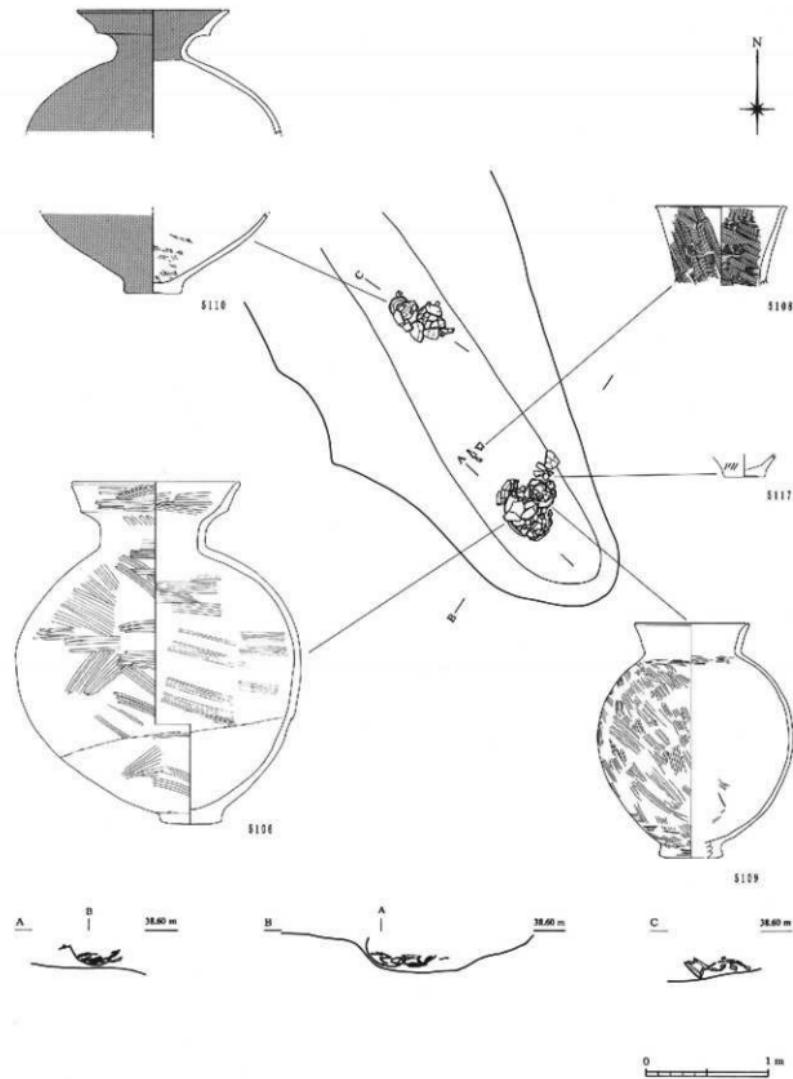
0 5 10 m



2. 第5号墳遺物出土状態図・旧表土上　縮尺1/300

0 5 10 m

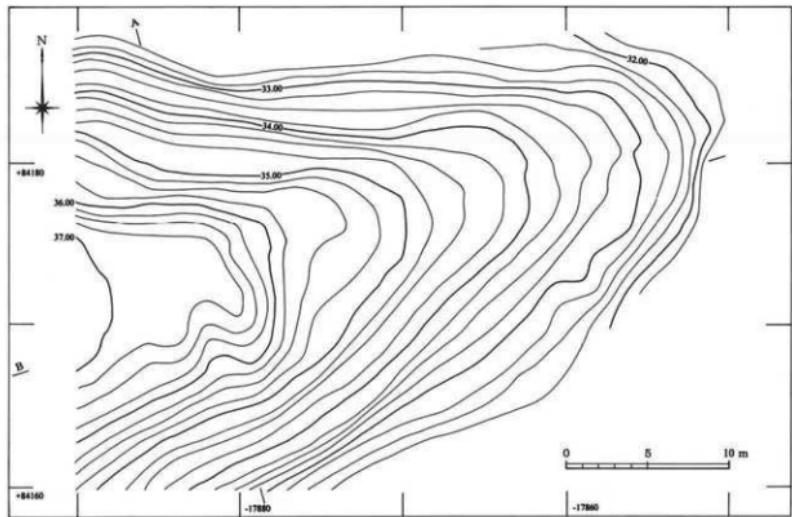
図面四一 遺構実測図



第5号墳遺物出土状態図・西側周溝内南端部

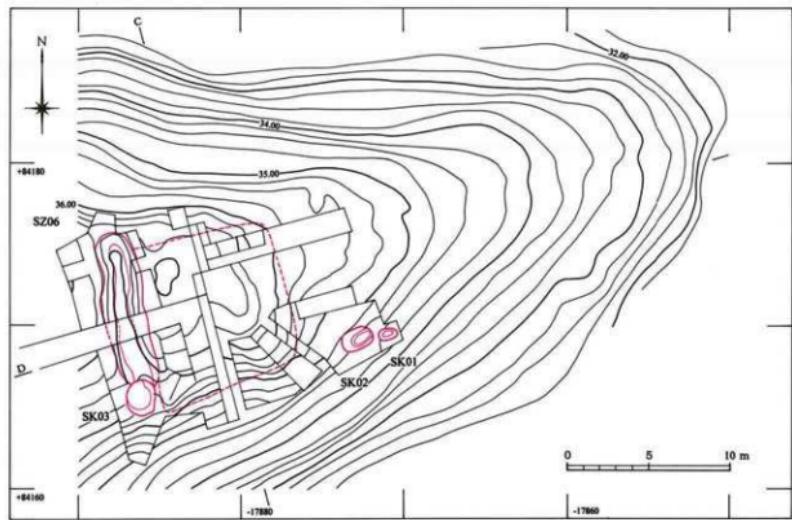
縮尺1/40

図面四二 遺構実測図



1. 第6号墳地形測量図

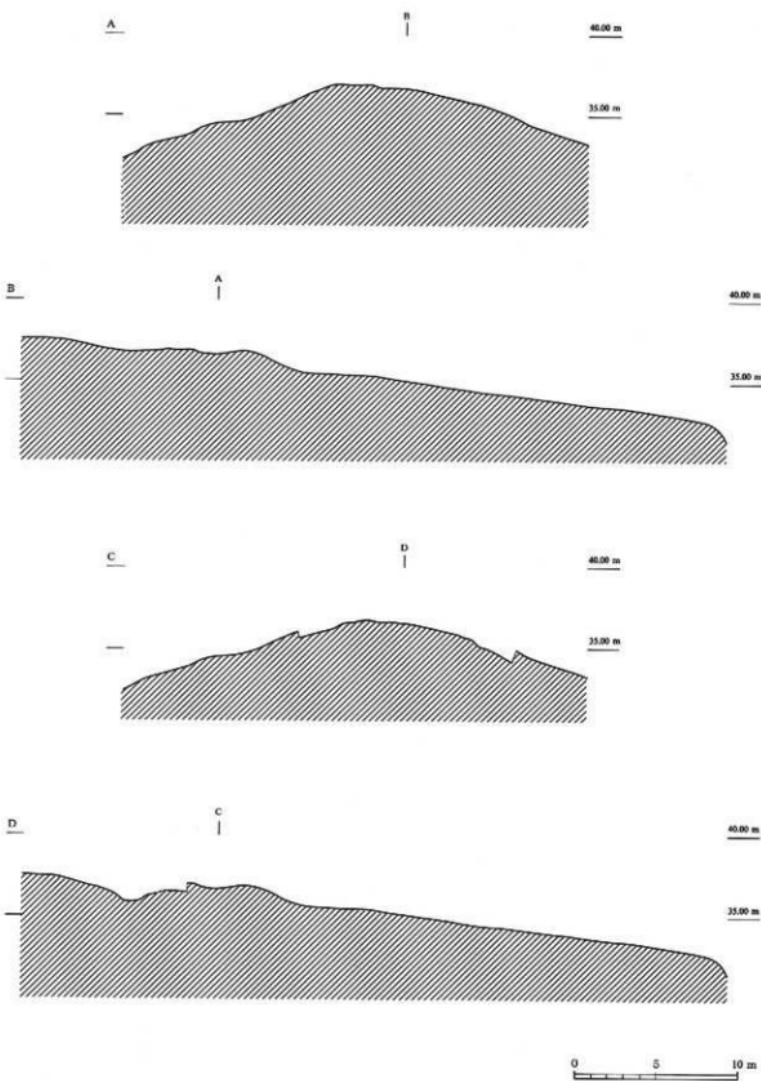
縮尺 1/300



2. 第6号墳全体図

縮尺 1/300

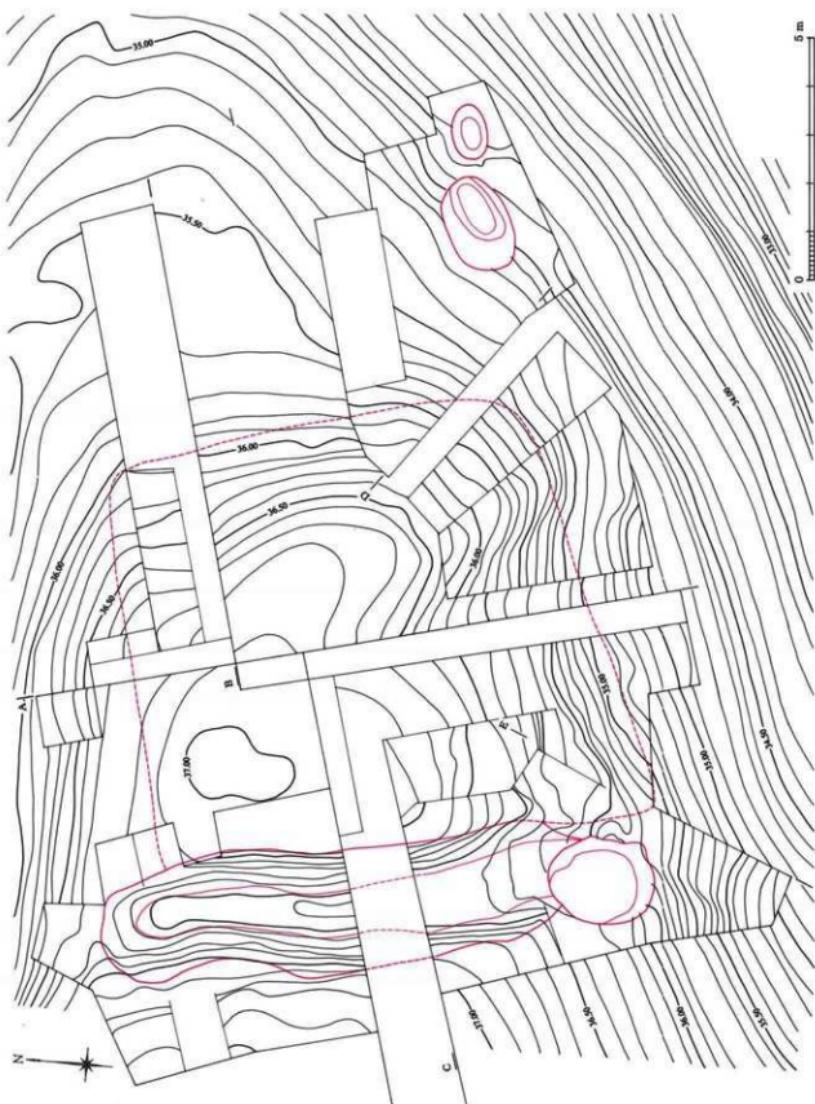
図面四三 造構実測図



第6号墳地形断面図

縮尺1/300

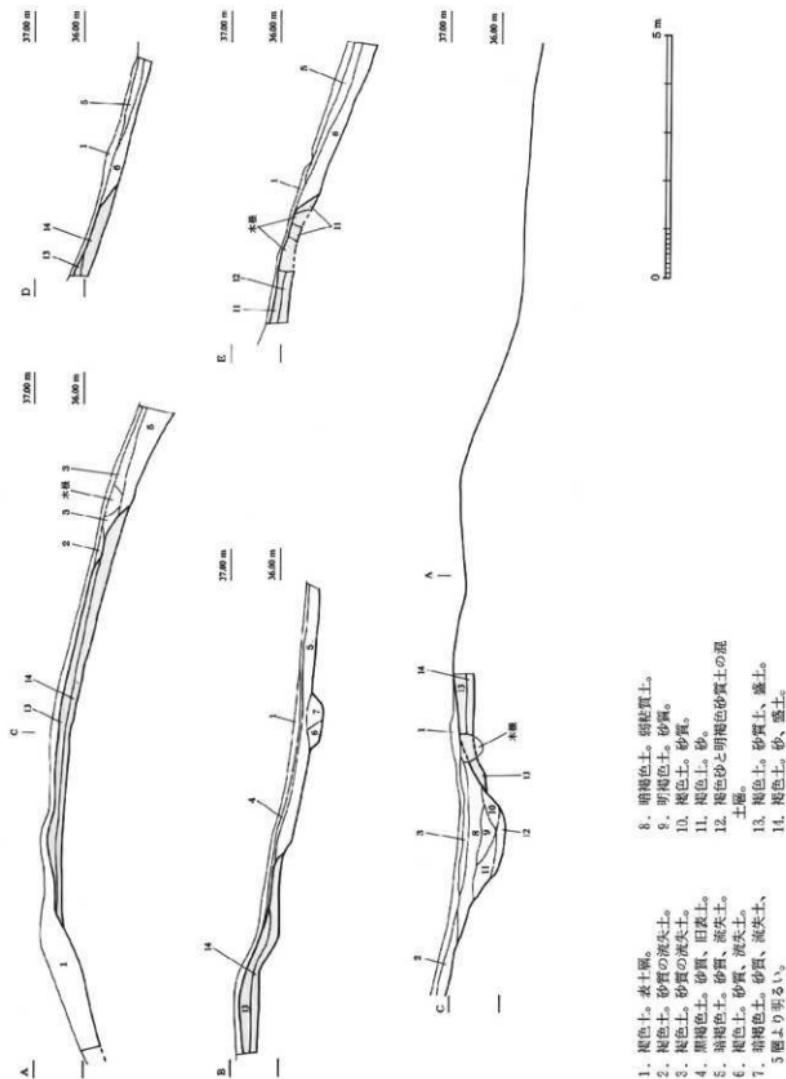
図面四四 遺構実測図



第6号墳墳丘測量図

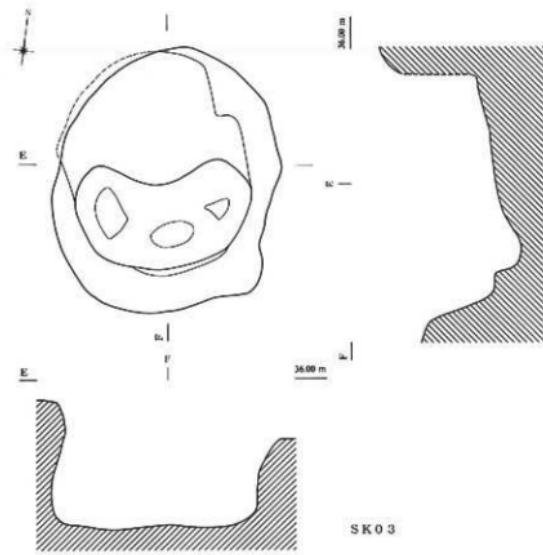
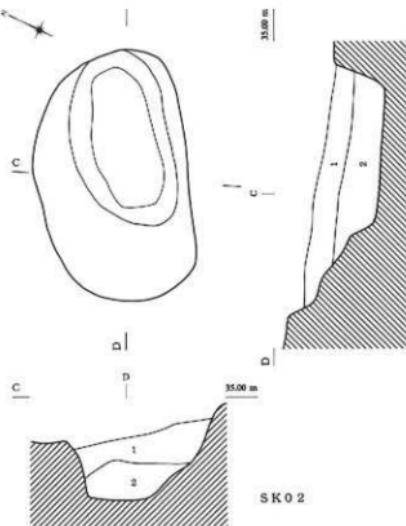
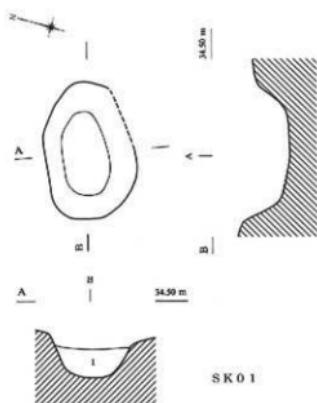
縮尺1/100

図四 遺構実測図



第6号墳土層断面図

縮尺 1/100

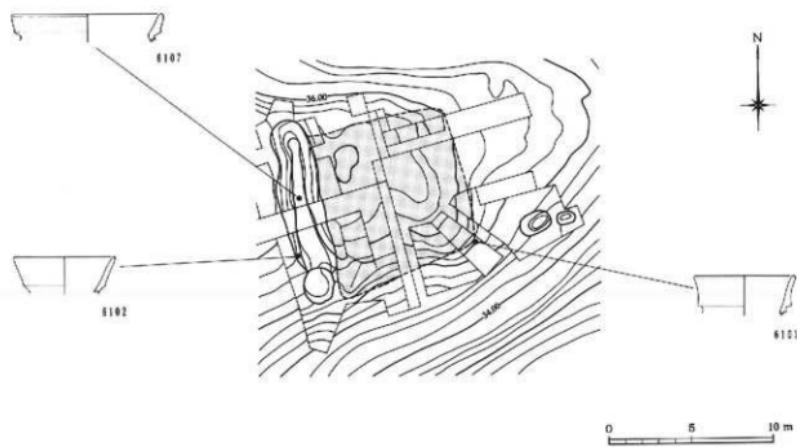


SK01  
1. 棕色土。砂質。

SK02  
1. 棕色土。砂質。  
2. 棕色土。砂質、赤色顔料の可能性のある赤色粒子を含む。

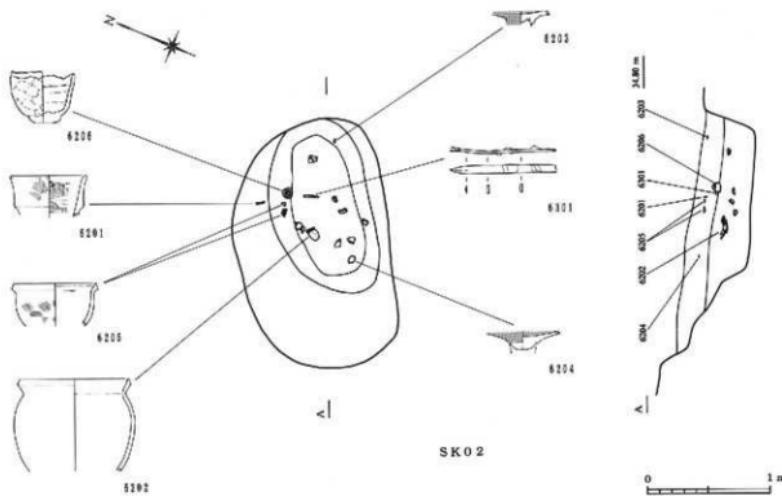
0 1 m

図面四七  
遺構実測図



1. 第6号墳遺物出土状態図

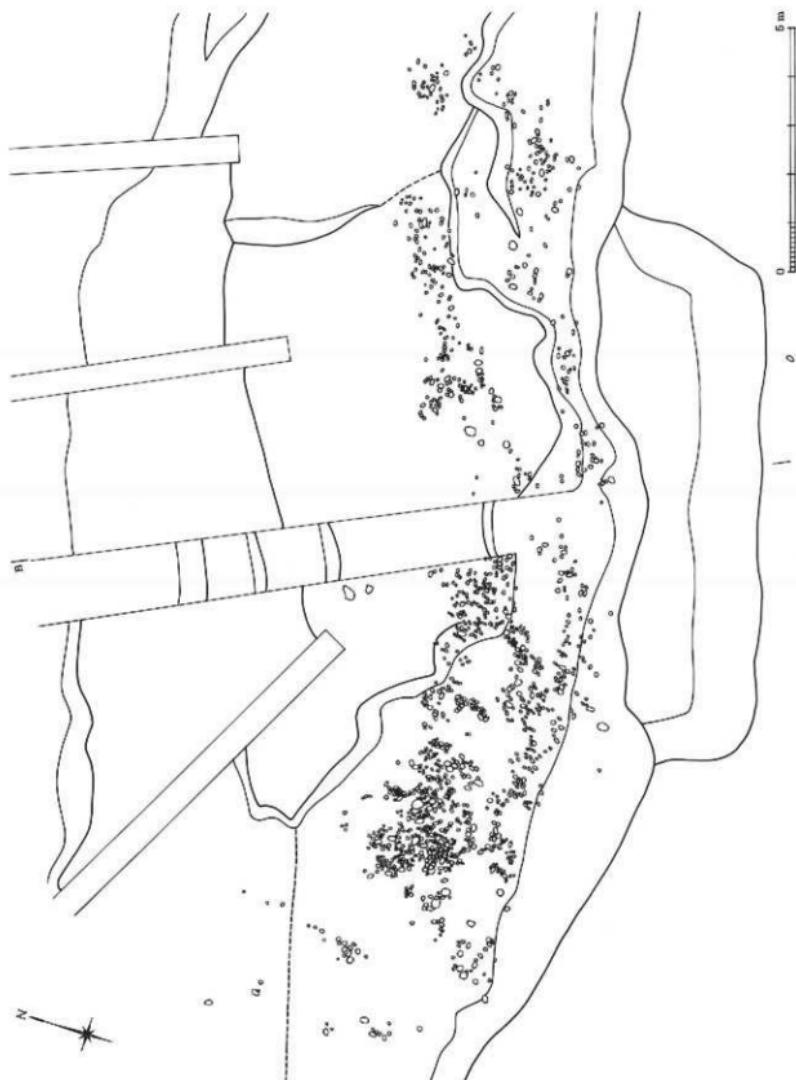
縮尺1/300



2. 第6号墳土坑SK02遺物出土状態図

縮尺1/40

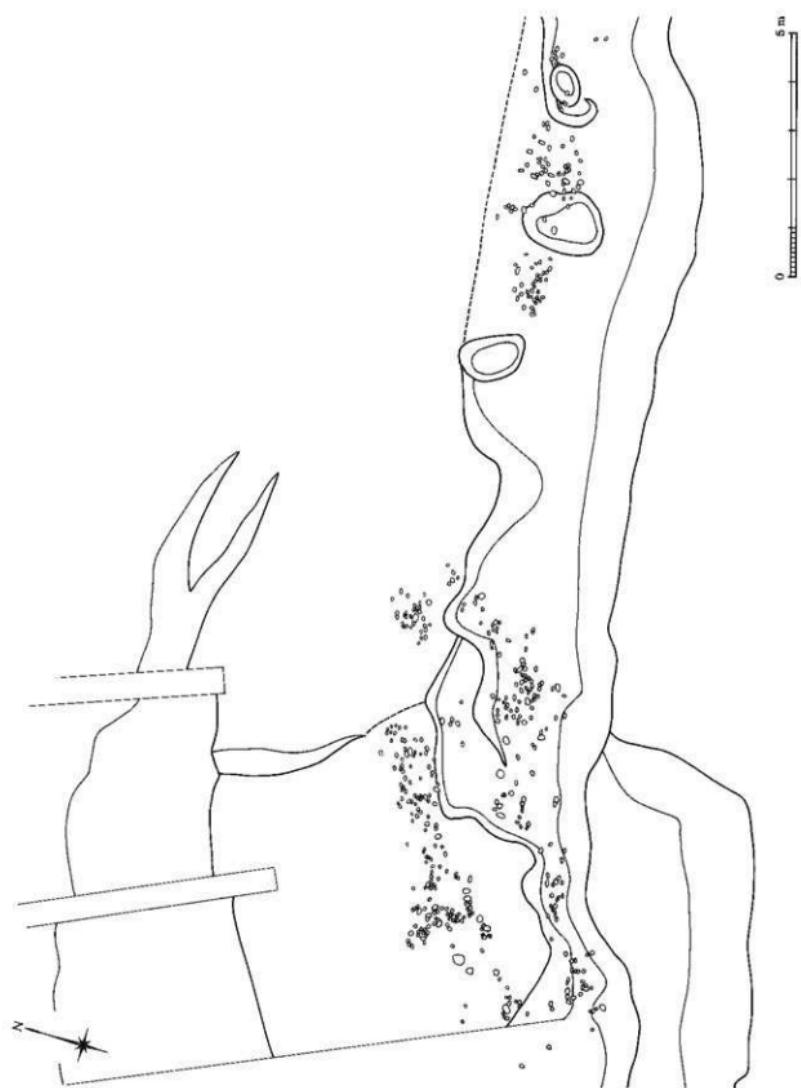
図面四八 造構実測図



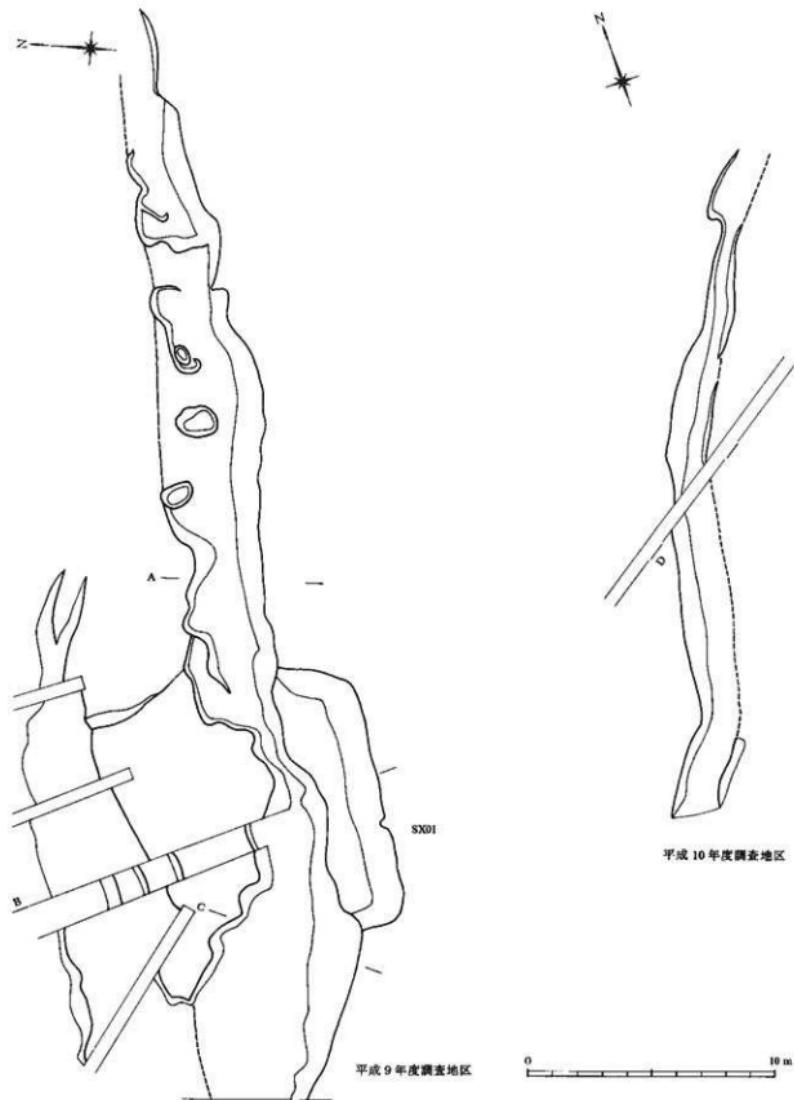
開削地全体図・段築造構全体図 [1]

縮尺 1/100

図面四九 遺構実測図



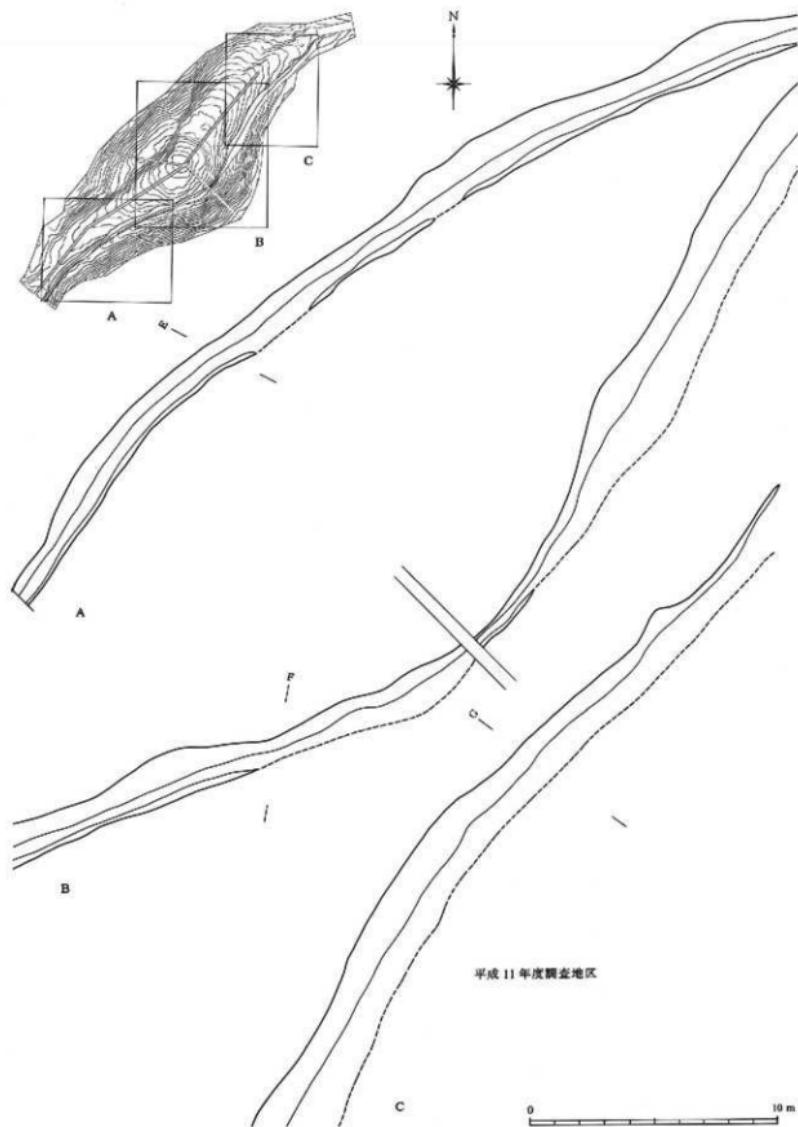
図面五〇 造構実測図

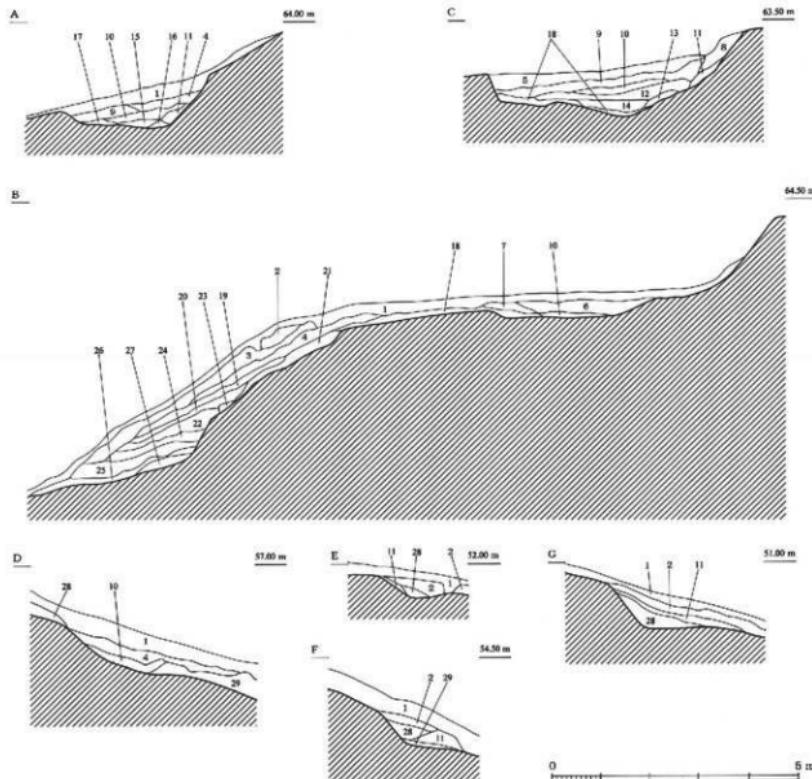


道路地全体図、平成 9・10 年度調査地区

縮尺 1/200

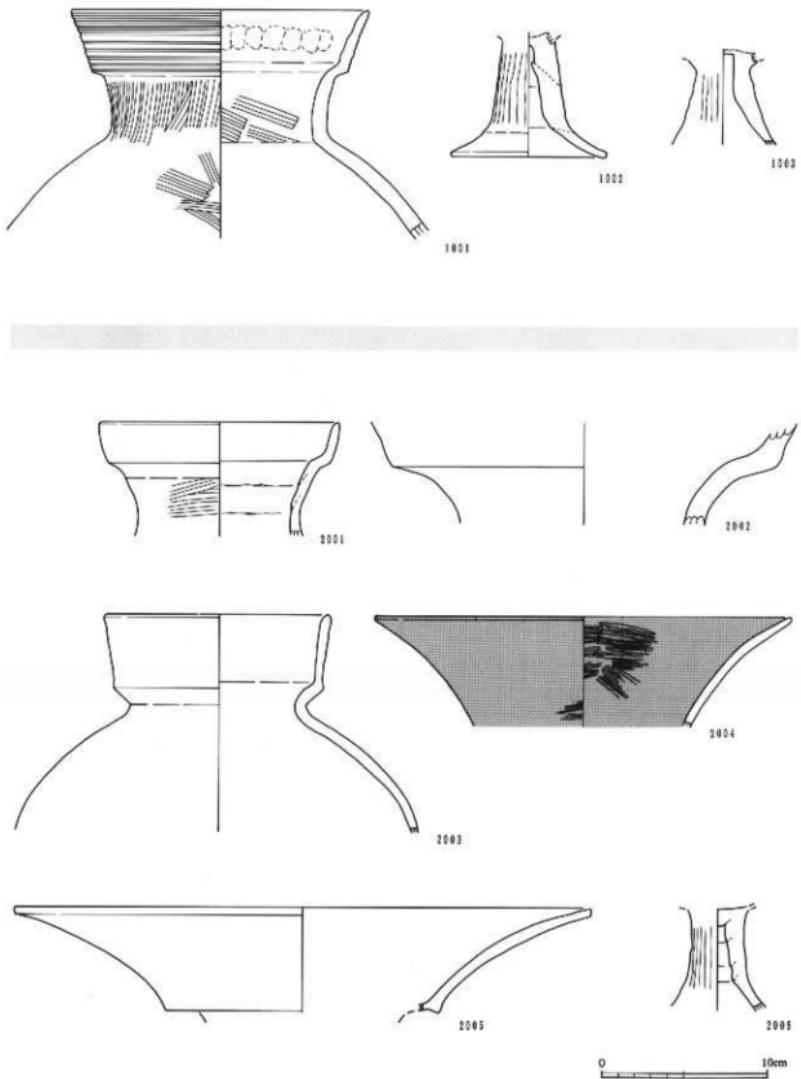
図面五  
一 造構実測図





1. 棕色土。表上、砂粒・小砂利まばらに含む。
2. 棕色土。砂粒・小砂利・炭化粒・泥岩類の岩片を含む。
3. 暗褐色土。砂粒・小砂利・泥岩類の岩片まばらに含む。
4. 暗褐色土。砂粒・小砂利まばらに含む。
5. 棕色土。砂質・小砂利・炭化粒まばらに含む。
6. 黒色土。砂粒・小砂利まばらに含む。
7. 黑褐色土。砂粒・小砂利・礫まばらに含む。
8. 棕色土。砂質・小砂利まばらに含む。
9. 黑褐色土。砂粒・小砂利まばらに含む。
10. 暗褐色土。砂粒・小砂利・泥岩類の岩片まばらに含む。
11. 棕色土。砂質・泥岩類の岩片まばらに含む。
12. 暗褐色土。小砂利・泥岩類の岩片まばらに含む。
13. 棕色土。小砂利・泥岩類の岩片まばらに含む。
14. 黑褐色土。砂粒・小砂利・泥岩類の岩片まばらに含む。
15. 黑色土。砂粒まばらに含む。
16. にぶい黄橙色土。砂層。
17. 黑褐色土。砂粒・小砂利まばらに含む。
18. 棕色土。砂粒・小砂利まばらに含む。
19. 棕色土。砂粒・小砂利・炭化粒まばらに含む。
20. 黑褐色土。砂粒まばらに含む。
21. 棕色土。砂粒まばらに含む。
22. 黑褐色土。砂粒・小砂利まばらに含む。
23. にぶい黄褐色土。砂粒まばらに含む。
24. 黑褐色土。砂粒まばらに含む。
25. 黑色土。砂粒・小砂利まばらに含む。
26. 棕色土。砂粒・小砂利まばらに含む。
27. 黑褐色土。砂粒・小砂利まばらに含む。
28. 棕色土。砂粒・白色粒・小砂利まばらに含む。
29. 黄褐色土。炭化粒・泥岩類の岩片まばらに含む。

図面五三 造物実測図



1. 第1号埴出土遺物<上段> 土器：1001～1003

2. 第2号埴出土遺物<下段> 土器：2001～2006

縮尺 1/3

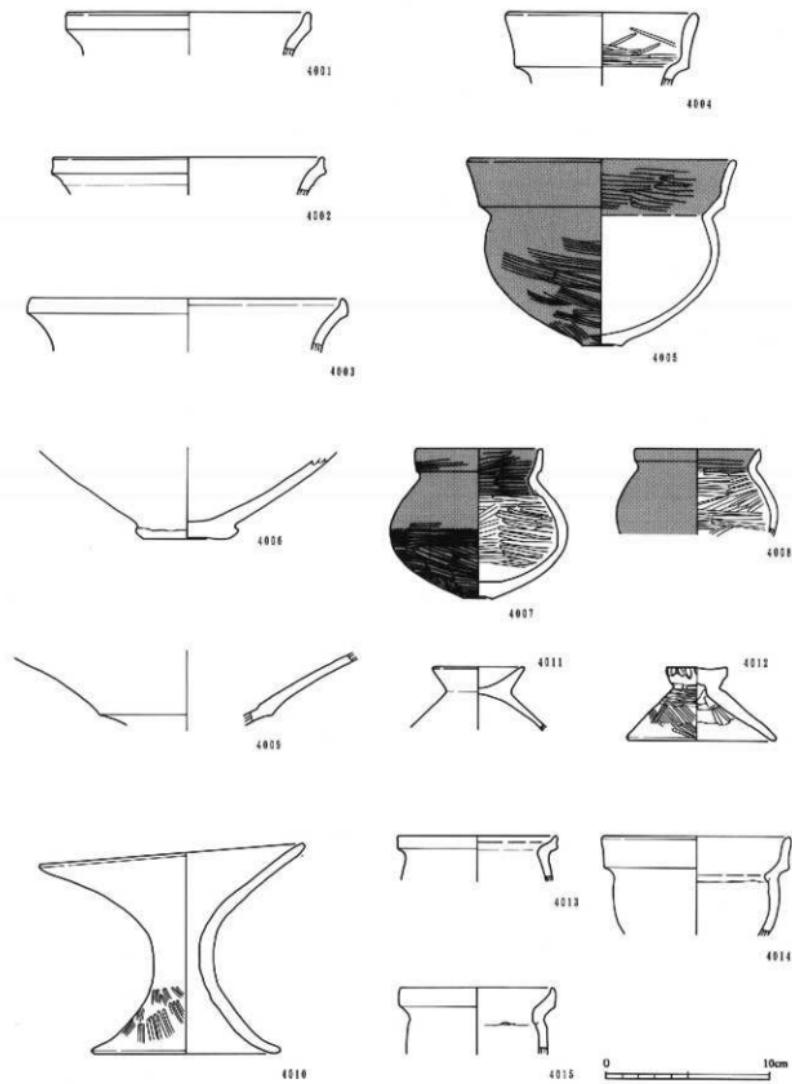
縮尺 1/3



1. 第2号墳出土遺物<上段> 土師器：2007～2017  
2. 第3号墳出土遺物<下段> 土師器：3001～3003

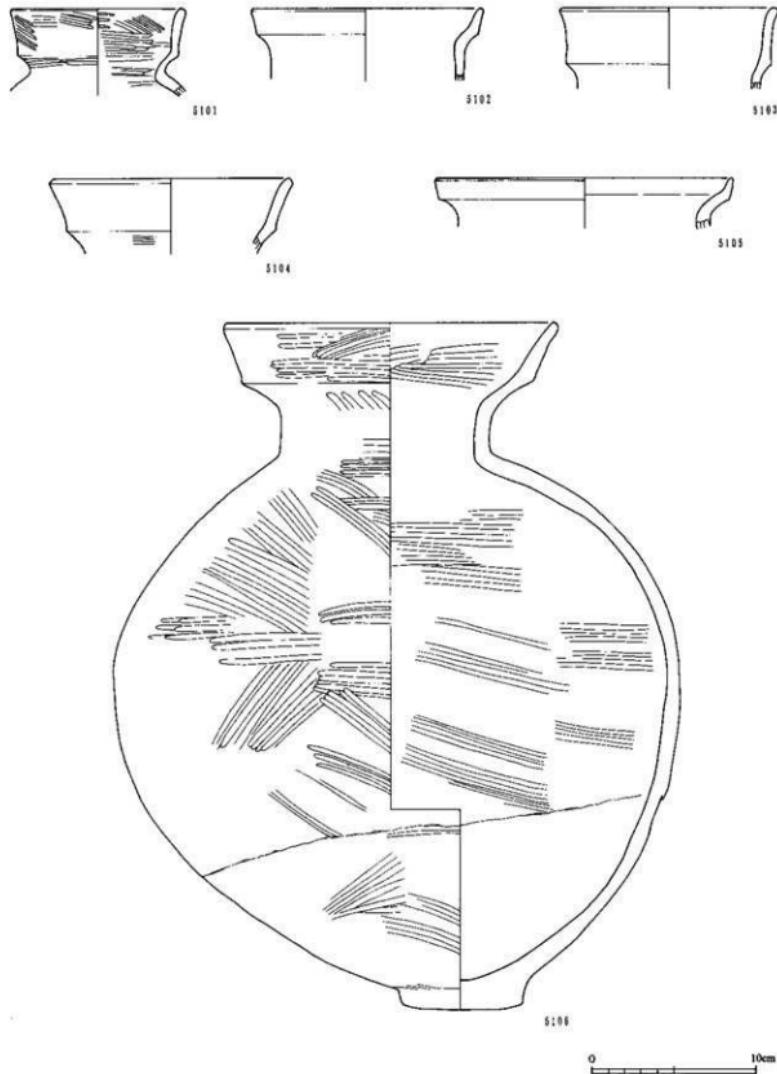
縮尺1/3  
縮尺1/3

図面五五  
遺物実測図



第4号墳出土遺物  
土師器：4001～4015

縮尺1/3

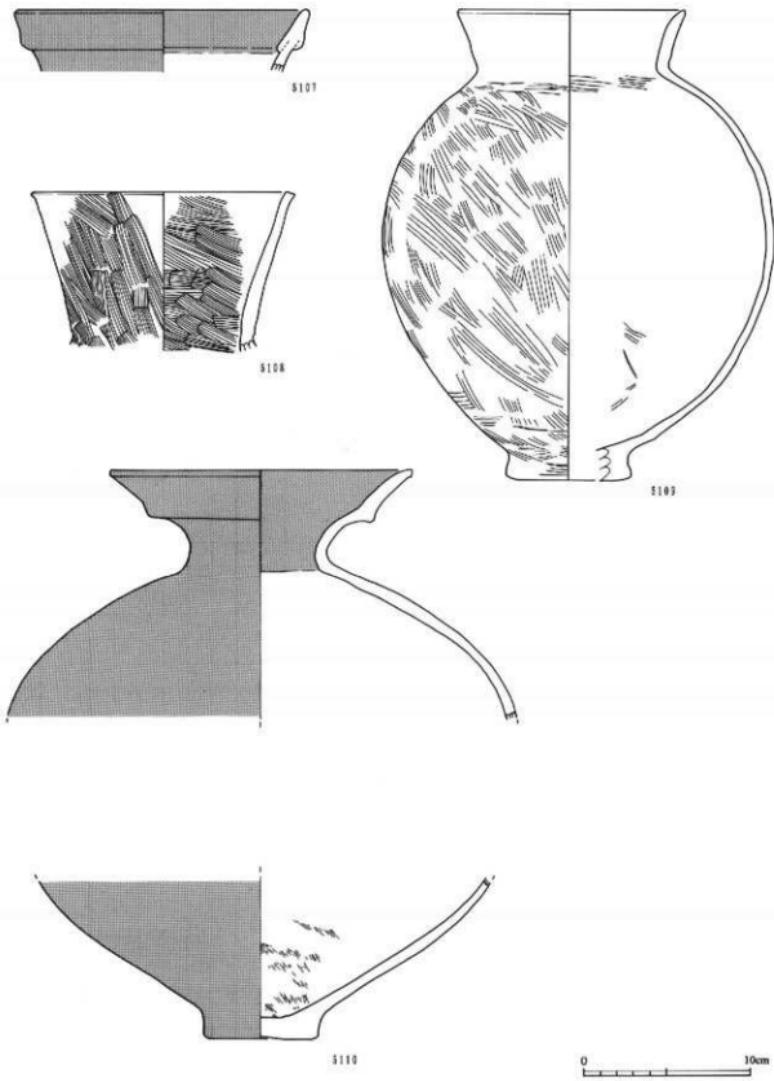


第5号墳出土遺物  
周溝内出土・土師器：S101～S106

縮尺1/3

0 10cm

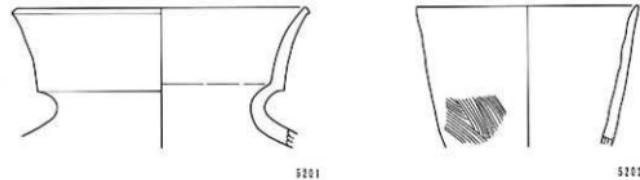
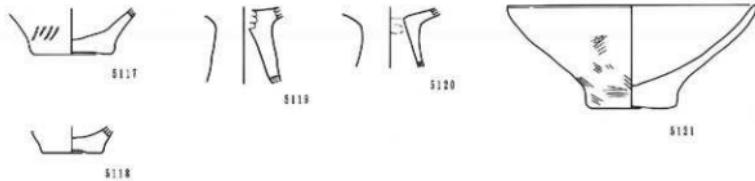
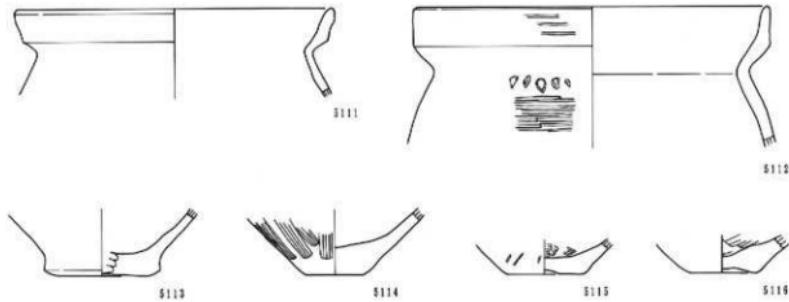
図面五七　遺物実測図



第5号墳出土遺物

周溝内出土・土師器：S107～S110

縮尺 1/3

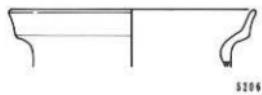


0 10cm

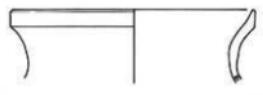
第5号墳出土遺物

周溝内出土・土師器：S111～S121、旧表土上出土・土師器：S201～S205

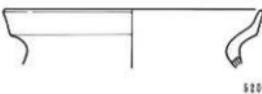
縮尺1/3



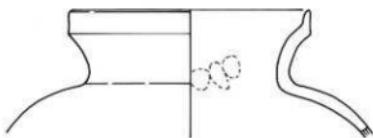
5206



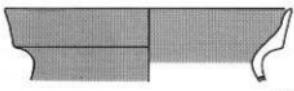
5210



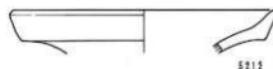
5207



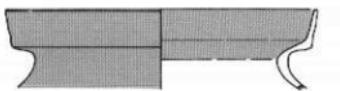
5211



5208



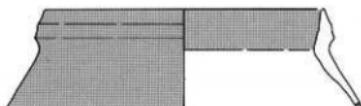
5212



5209



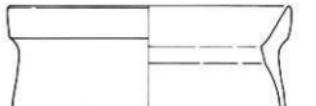
5213



5214



5215



5216



5217

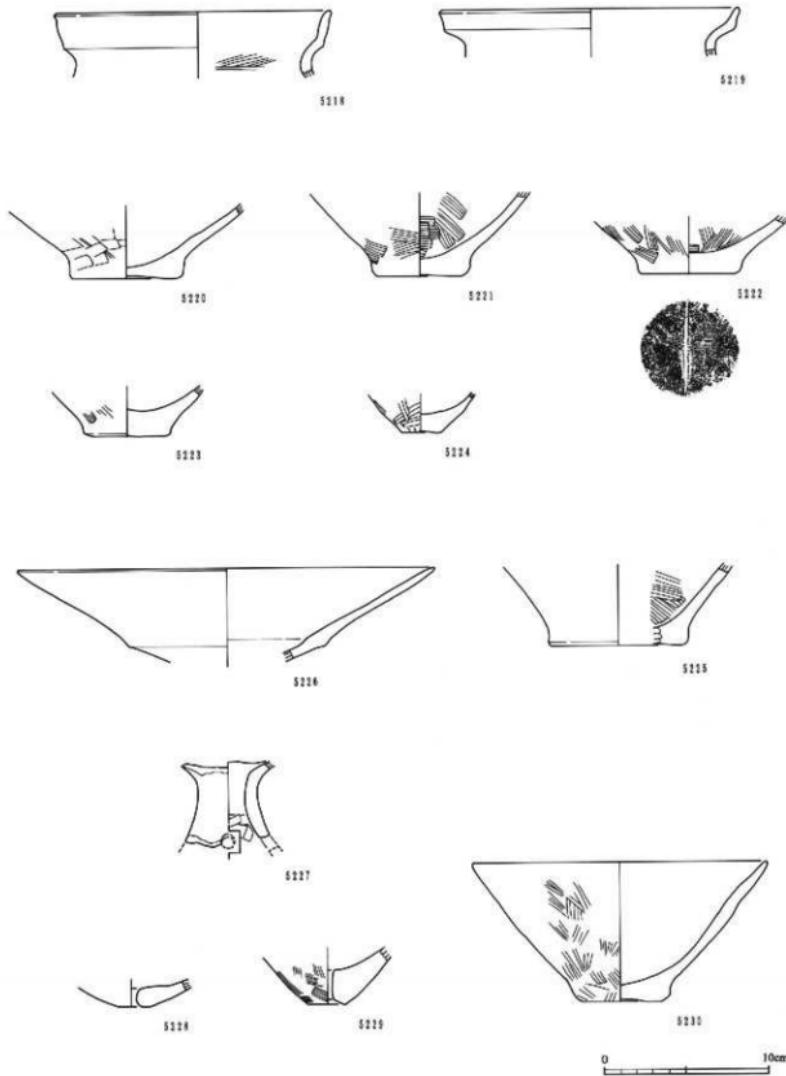


第5号墳出土遺物

旧表土上出土・土師器：5206～5217

縮尺1/3

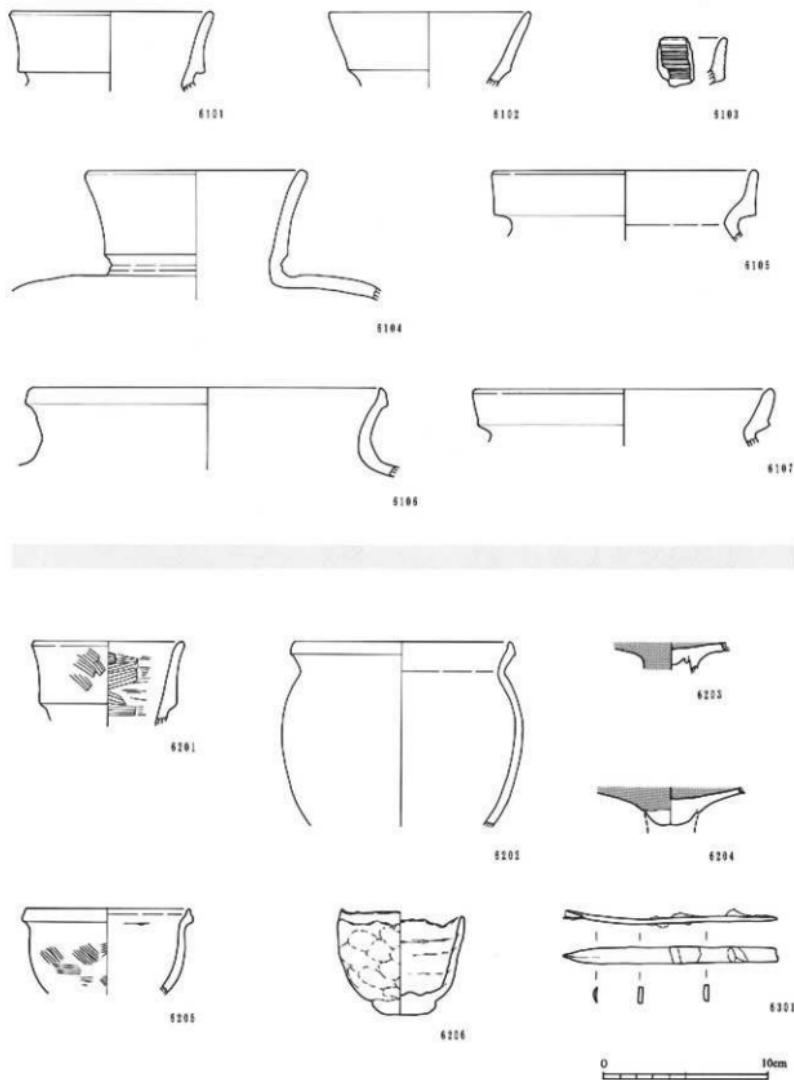
図面六〇  
遺物実測図



第5号墳出土遺物

旧表土上出土・土師器：S218～S230

縮尺 1／3

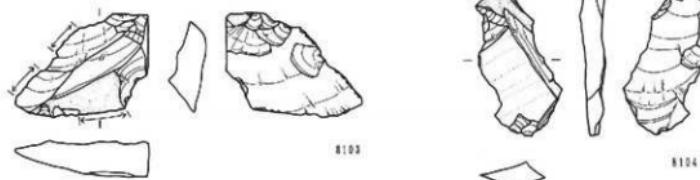
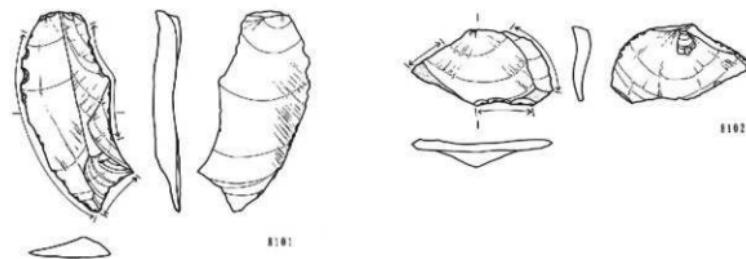
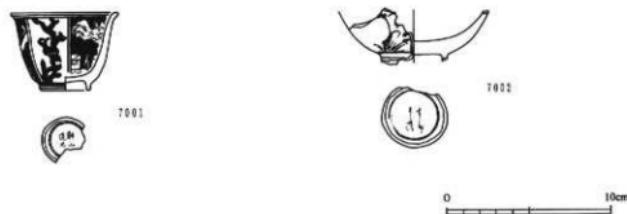


第6号墳出土遺物

第6号墳出土・土師器：6101～6107、土坑SK02出土・土器類：6201～6206、土坑SK02出土・施：6301

縮尺1/3

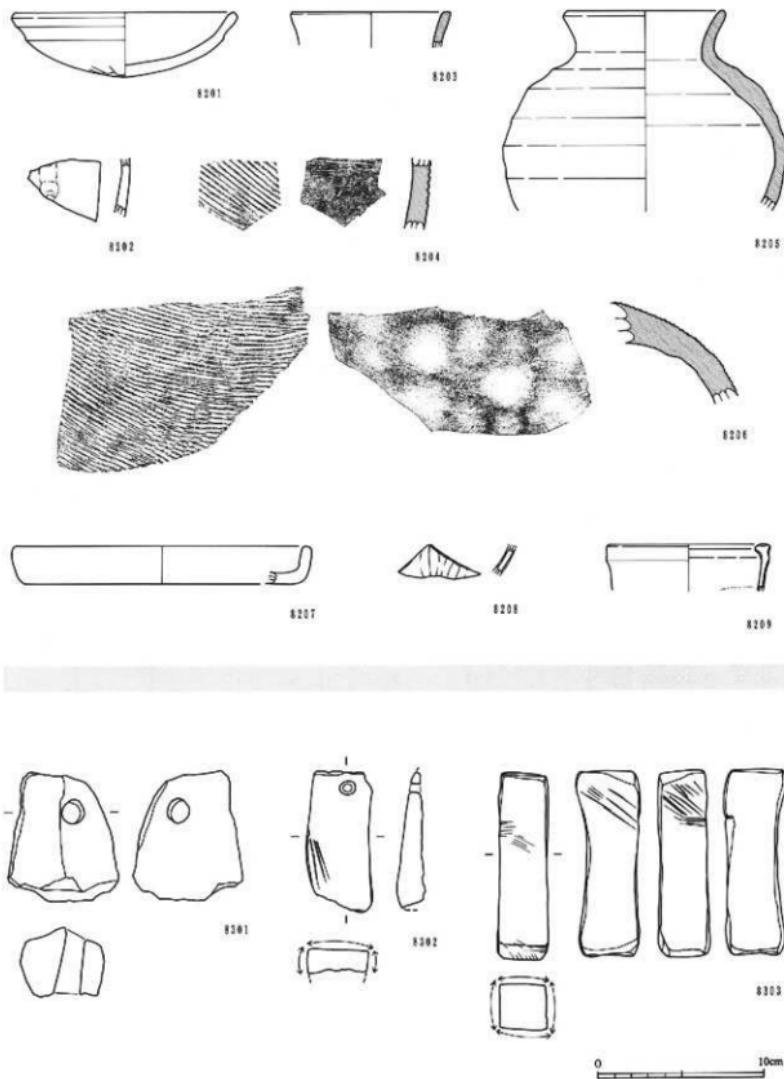
圖面六二  
遺物実測図



1. 開削地出土遺物<上段> 陶器：7001・7002  
2. 遺構外出土遺物・石器<下段> 旧石器：8101～8104

縮尺1/3  
縮尺1/2

図面六三 遺物実測図

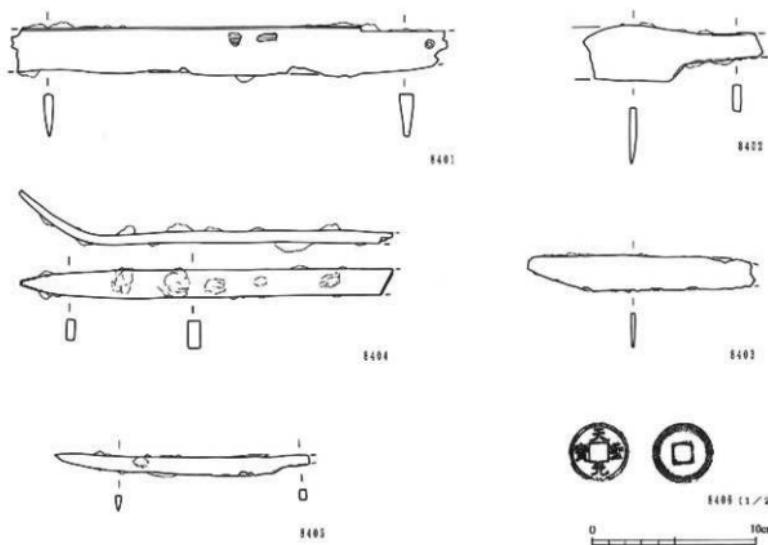
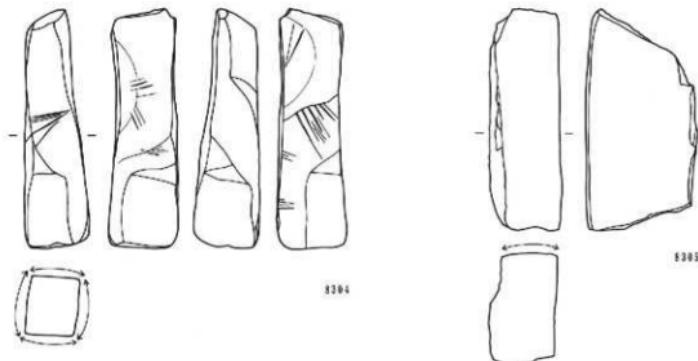


1. 遺構外出土遺物・土器類<上段> 珠洲他: E201~E209

2. 遺構外出土遺物・石製品<下段> 延石: E301~E303

縮尺 1/3

縮尺 1/3



1. 造構外出土遺物・石製品<上段> 砥石: E304・E305

2. 造構外出土遺物・金属製品<下段> 鉄製品: E401~E405、銅製品: E406 (E406のみ縮尺1/2)

縮尺1/3

縮尺1/3

図 版



1. 遠景（西）



2. 遠景（南）



1. 第1号墳全景（西）



2. 第1号墳遺物出土状態近景（南西）



1. 第2号墳全景（北東）



2. 第2号墳全景（南西）



1. 第2号墳周溝堆積状態（南東）



2. 第2号墳遺物出土状態近景（北西）



1. 第3号墳全景（北東）



2. 第4号墳全景（南西）



1. 第4・5号墳全貌（東）



2. 第5号墳全貌（南）



1. 第5号墳西側周溝堆積狀態（南）



2. 第5号墳西側周溝内遺物出土状態近景（東）



1. 第6号墳調査状態（南西）



2. 第6号墳周溝構築状態（南）



1. 遠景(西)



2. 遠景(東)



1. 平成9年度調査地区現況（北西）



2. 平成9年度調査地区現況（北）



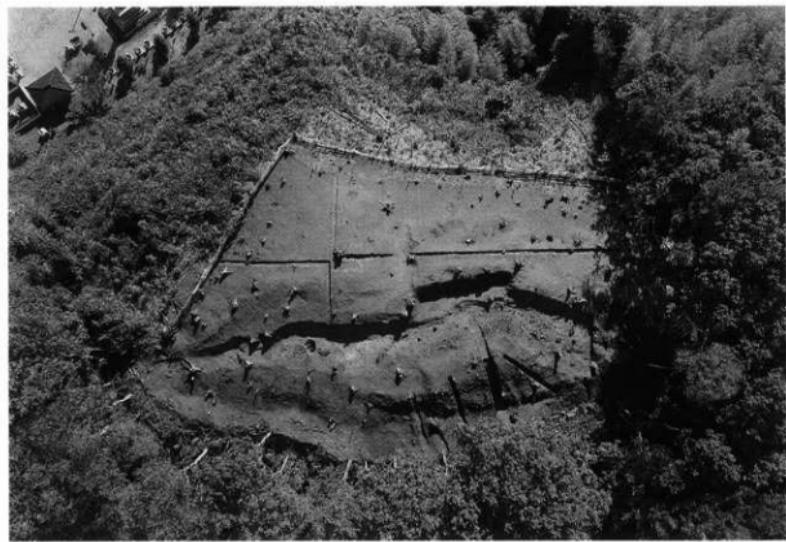
1. 平成9年度調査地区現況(西)



2. 第1号墳現況(北西)



1. 平成9年度調査地区完掘遺景（西）



2. 平成9年度調査地区完掘全景（垂直）



1. 平成9年度調査地区完掘全景(西)



2. 平成9年度調査地区完掘全景(東)



3. 平成9年度調査地区完掘全景(南)



1. 第1号墳全景(西)



2. 第1号墳全景(西)



1. 第1号墳全景(北東)



2. 第1号墳周溝検出状態  
(南西)



3. 第1号墳調査風景  
(北西)



1. 平成10年度調査地区現況（南西）



2. 平成10年度調査地区現況（北東）



1. 平成10年度調査地区現況（南西）



2. 第2号墳現況（北東）

図版一八 遺跡写真



1. 平成10年度調査地区全景（南西）



2. 平成10年度調査地区発掘全景（垂直）



1. 平成10年度調査地区完  
掘全景（南）



2. 平成10年度調査地区完  
掘全景（北）



3. 平成10年度調査地区完  
掘全景（北東）



1. 第2号墳遠景（南西）



2. 第2号墳全景（北東）



1. 第2号墳全景（北西）



2. 第2号墳全景（南東）



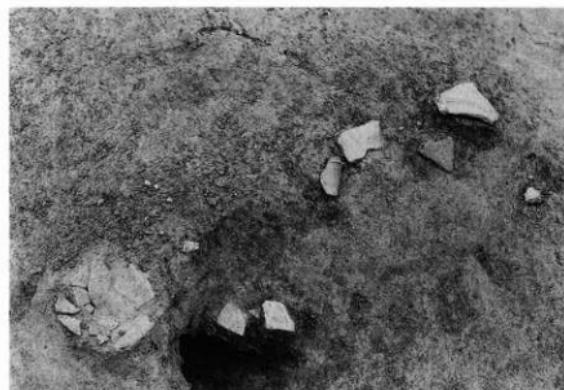
1. 第2号墳周溝内遺物出土状態（南西）



2. 第2号墳北斜面遺物出土状態（北西）



3. 第2号墳北斜面遺物出土状態近景（北西）



1. 第2号墳北斜面遺物出土状態近景（北西）



2. 第2号墳南西斜面地積状態（北東）



3. 第2号墳北斜面遺物出土状態（北東）



1. 平成11年度調査地区現況（南西）



2. 平成11年度調査地区現況（北）



1. 第3号墳現況（北東）



2. 第3号墳現況（南東）



1. 平成11年度調査地区表土除去状態（南西）



2. 平成11年度調査地区表土除去状態（北東）



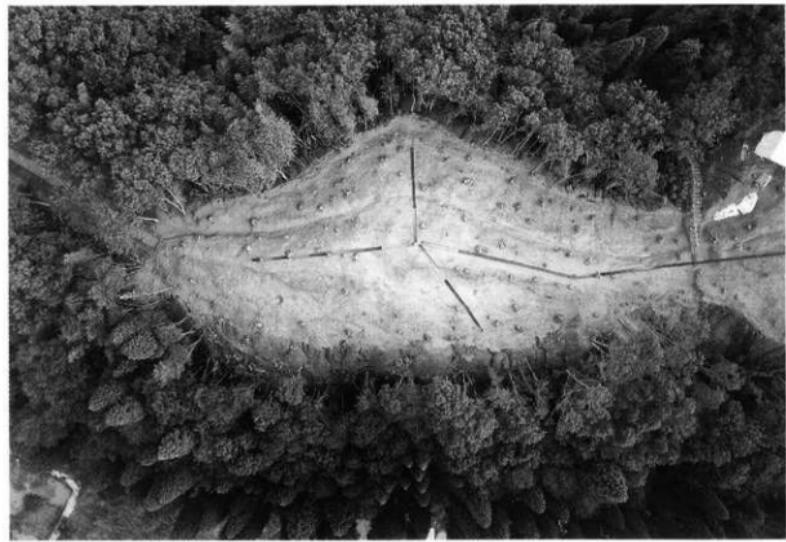
1. 第3号墳表土除去状態（北）



2. 第3号墳表土除去状態（南東）



1. 平成10・11年度調査地区完掘全景（北東）



2. 平成11年度調査地区完掘全景（垂直）



1. 第3号墳全景(北東)



2. 第3号墳全景(北)



1. 平成12年度調査地区現況（南西）



2. 平成12年度調査地区現況（北）



1. 第4号墳表土除去状態（南西）



2. 第4号墳表土除去状態（南）



1. 第4号墳全景（南西）



2. 第4号墳全景（北東）



1. 第4号墳東斜面遺物出土状態近景（東）



2. 第4号墳東斜面遺物出土状態近景（東）



3. 第4号墳調査風景  
(南西)



1. 第5号墳現況（南西）



2. 第5号墳現況（北東）



1. 第5号墳現況（西）



2. 第5号墳現況（南）



1. 第5号墳調査状態  
(南西)



2. 第5号墳盛土土層断面  
(南東)



3. 第5号墳西側周溝堆積  
状態(南)



1. 第5号墳東側周溝堆積  
状態（南）



2. 第5号墳南斜面堆積状  
態（北）



3. 第5号墳南西斜面堆積  
状態（北）



1. 第5号墳全景（南西）



2. 第5号墳全景（南）



1. 第5号墳盛土土層断面  
(北東)



2. 第5号墳盛土土層断面  
(南西)



3. 第5号墳旧表土上遺物  
出土状態近景 (北東)



1. 第5号墳西側周溝内遺物出土状態近景（南）



2. 第5号墳西側周溝内遺物出土状態近景（北）



3. 第5号墳調査風景  
(四)



1. 平成12年度調査地区完掘全景（延直）



2. 第5号墳完掘全景（南西）



1. 第6号墳現況（西）



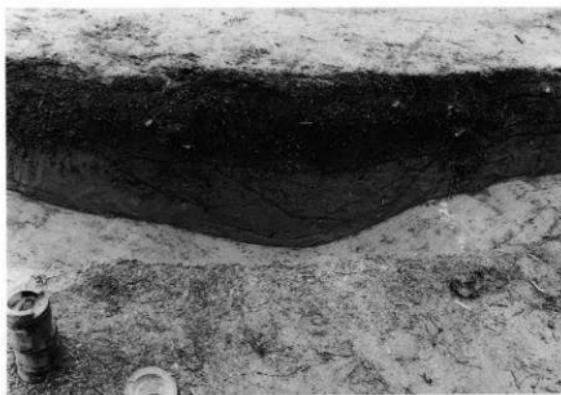
2. 第6号墳現況（東）



1. 第6号墳調査状態（北西）



2. 第6号墳調査状態（東）



1. 第6号墳周溝堆積状態  
(南)



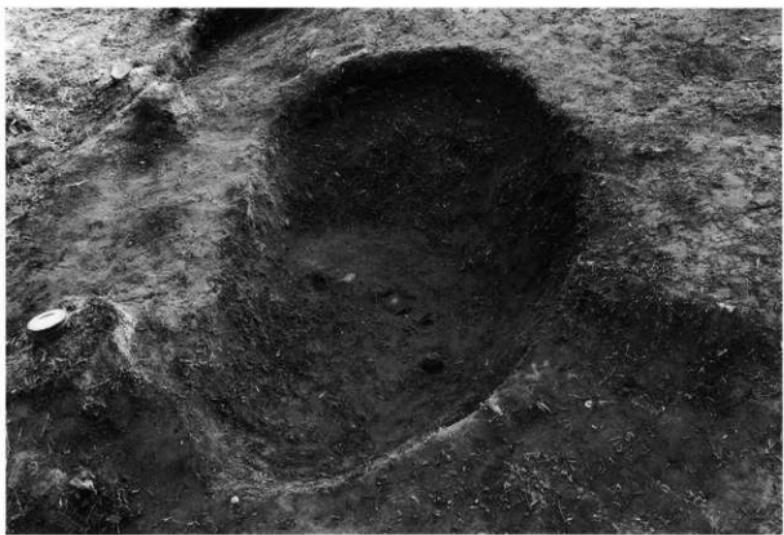
2. 第6号墳南側墳丘基部検出状態 (西)



3. 第6号墳周溝内遺物出土状態 (東)



1. 第6号填土坑SK01・02全景(南西)



2. 第6号填土坑SK02遺物出土狀態(南西)



1. 第6号墳土坑SK02  
製品出土状態近景(南西)



2. 第6号墳土坑SK02  
遺物出土状態近景(東)



3. 第6号墳土坑SK02全  
景(西)



1. 第6号墳土坑SK03全  
景(東)



2. 第6号墳土坑SK02調  
査風景(東)



3. 第6号墳調査風景  
(南)



1. 開削地現況（西）



2. 開削地現況（東）



1. 開削地調査状況（西）



2. 開削地調査状況（南東）



1. 平成 9 年度調査地区道路址礫敷検出状態（南東）



2. 平成 9 年度調査地区道路址礫敷検出状態（南西）



1. 平成9年度調査地区道路址跡敷設状態（東）



2. 平成9年度調査地区開削地・道路址上層断面（西）



1. 平成9年度調査地区道路址西側土層断面（西）



2. 平成9年度調査地区道路址東側土層断面（西）



3. 平成9年度調査地区道路址調査風景（西）



1. 平成 9 年度調査地区道路址全景（西）



2. 平成 9 年度調査地区道路址全景（東）



1. 平成10・11年度調査地区道路址全景（東）



2. 平成10・11年度調査地区道路址全景（西）



1. 平成11年度調査地区道  
路址構築状態（東）



2. 平成11年度調査地区道  
路址構築状態（西）



3. 平成11年度調査地区道  
路址土層断面（東）



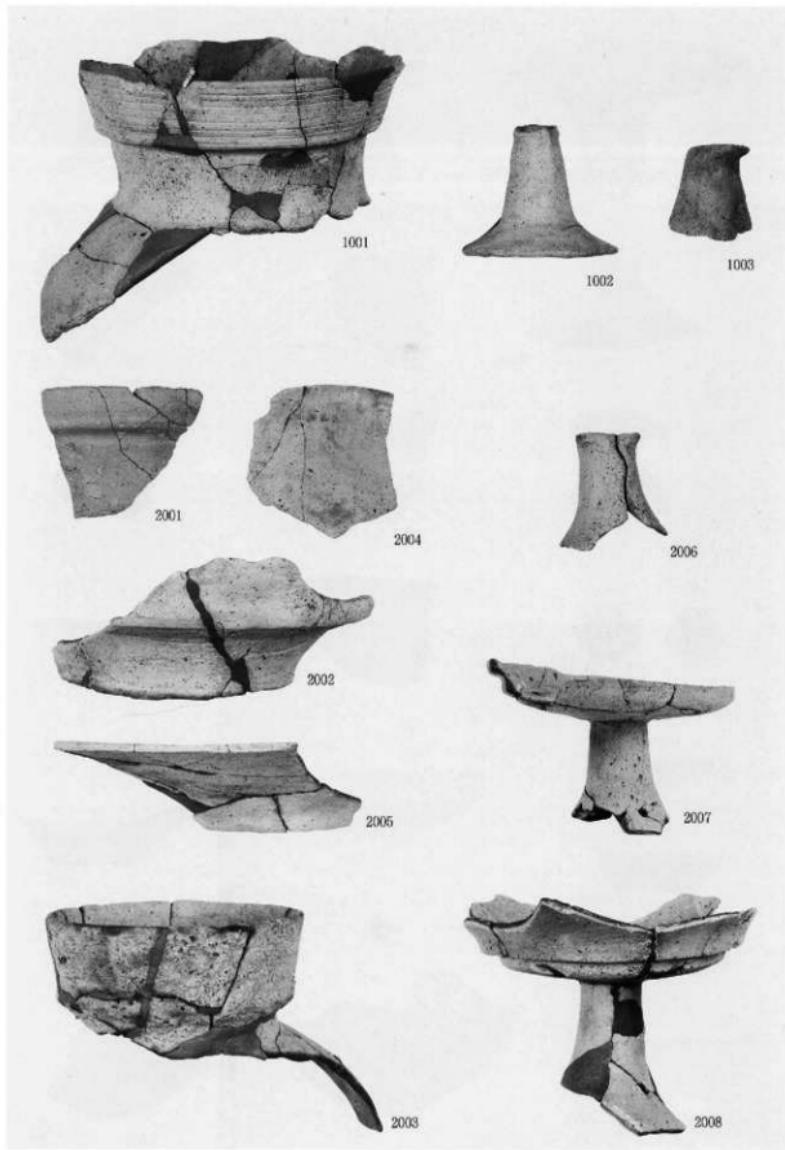
1. 旧石器遺物出土状態近景  
(西)



2. 中世遺物出土状態近景  
(南)

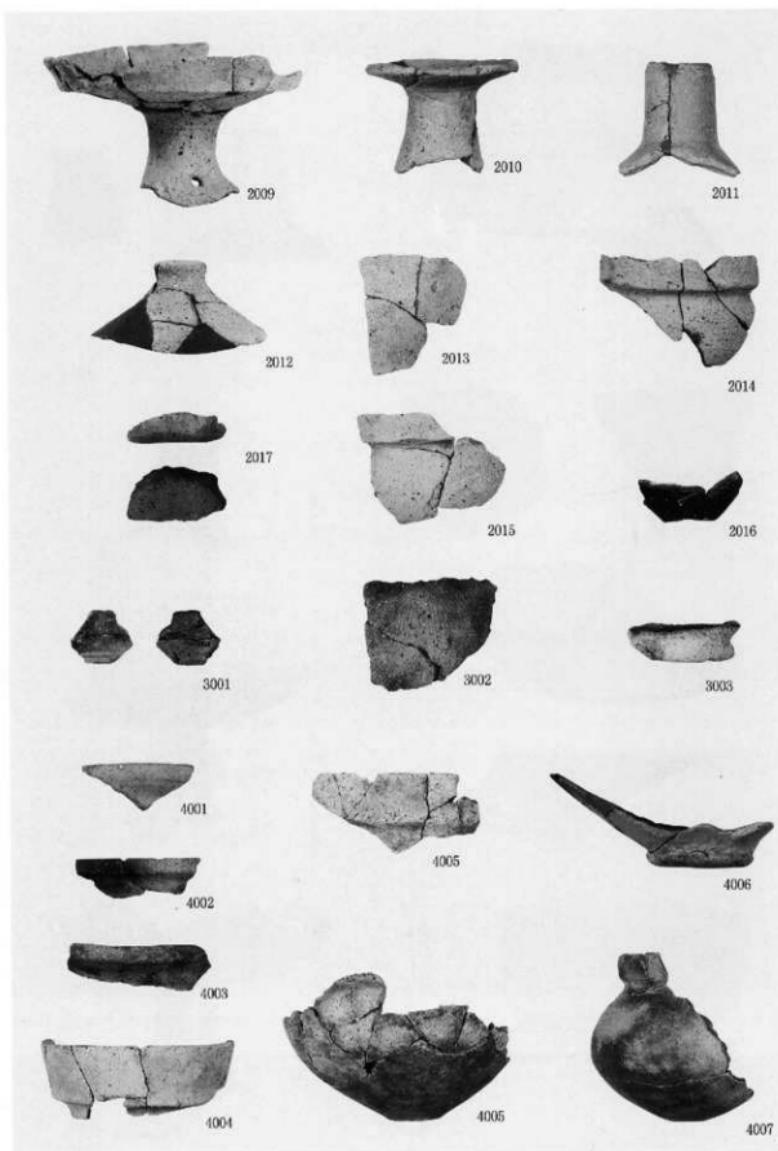


3. 鐵製品出土状態近景  
(南)

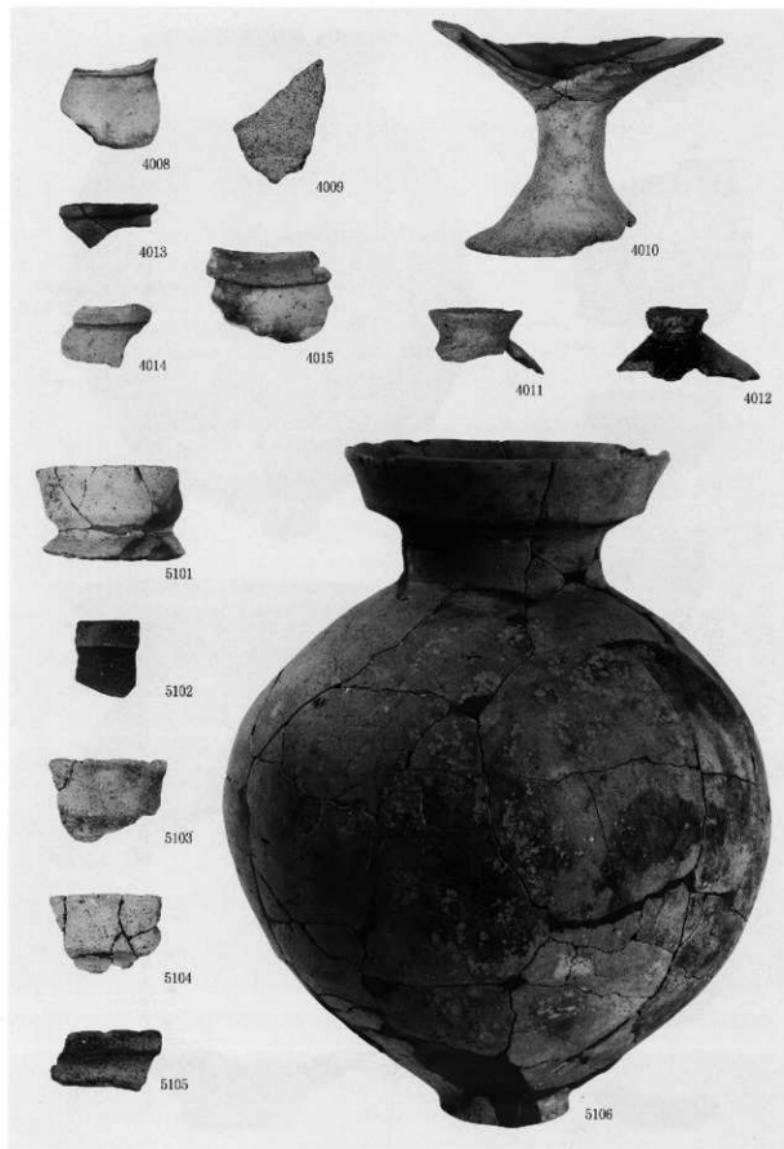


第1・2号坑出土遺物

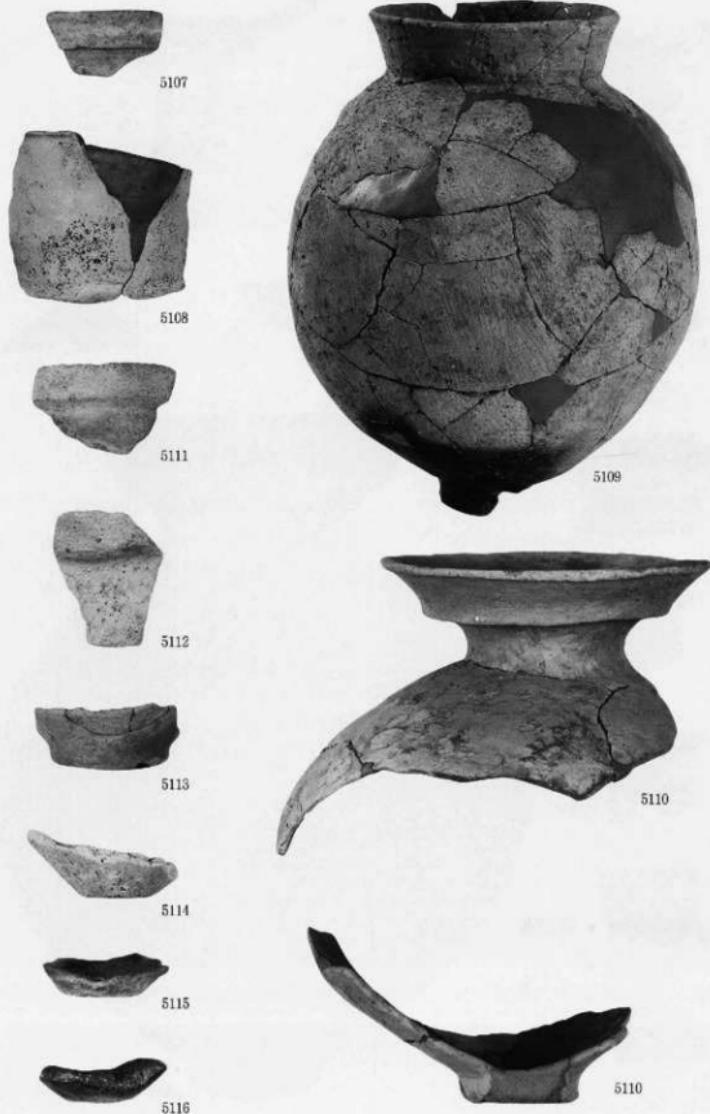
圖版五八 遺物寫真



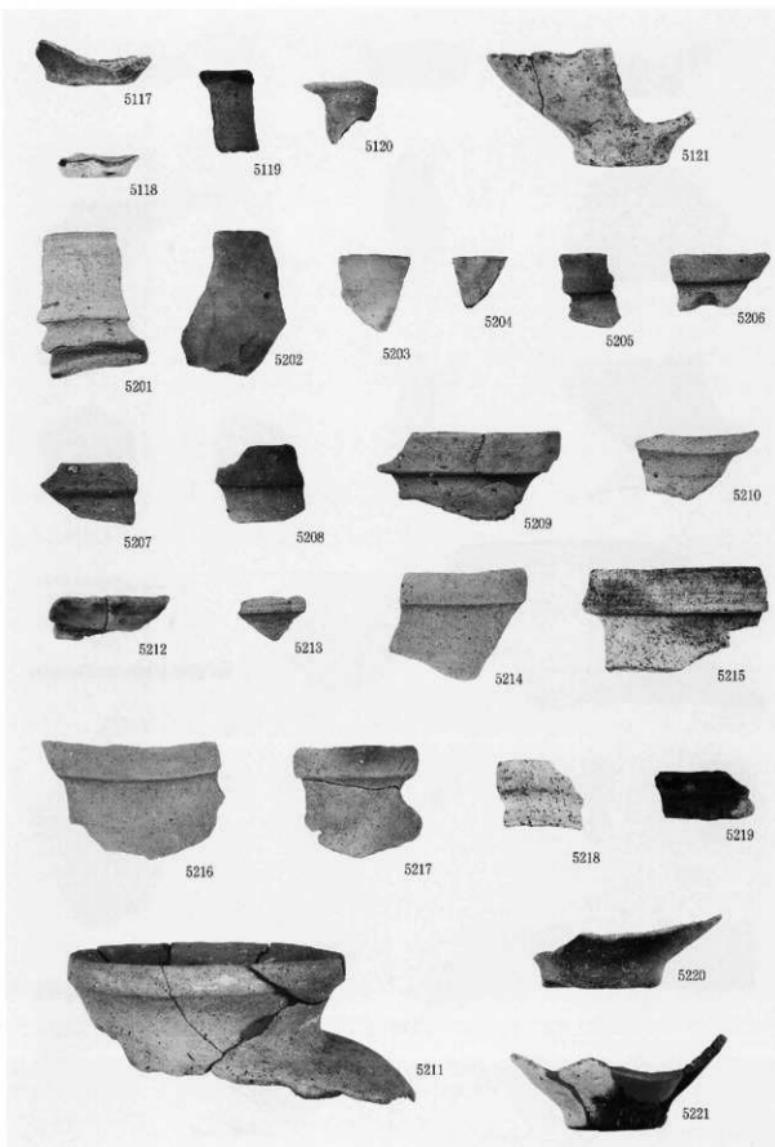
第2・3・4号墳出土遺物



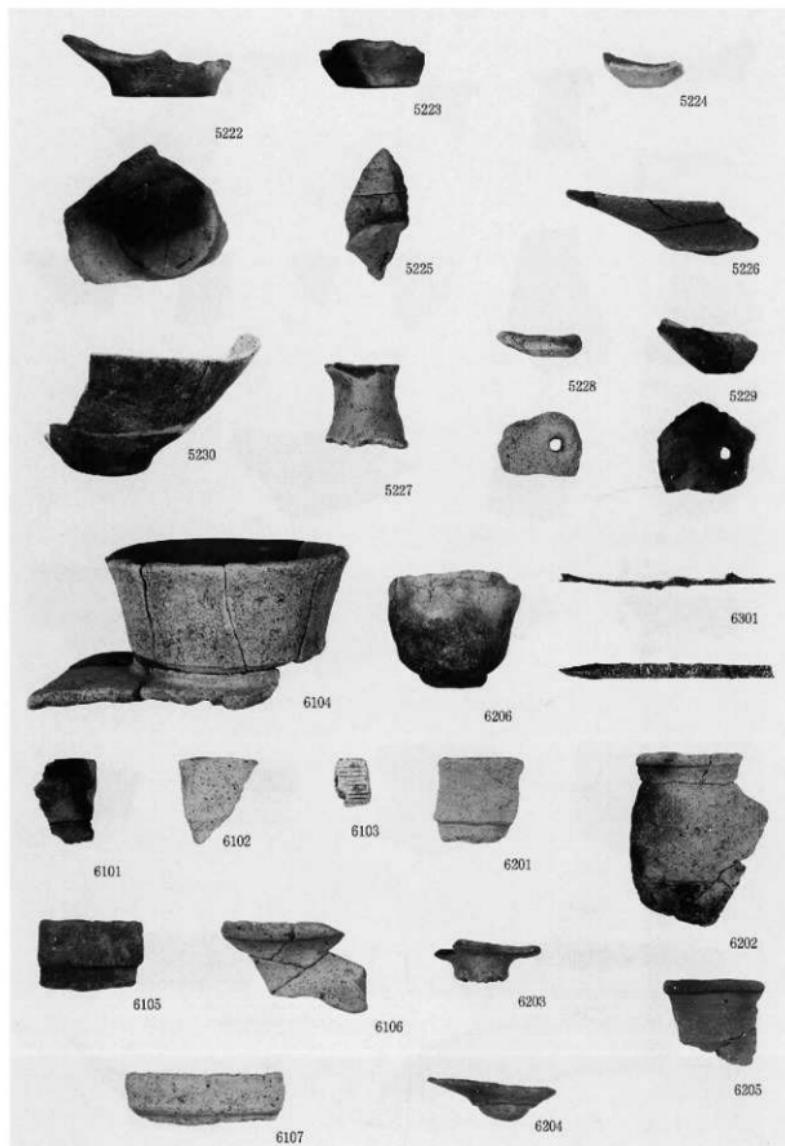
第4・5号墳出土遺物



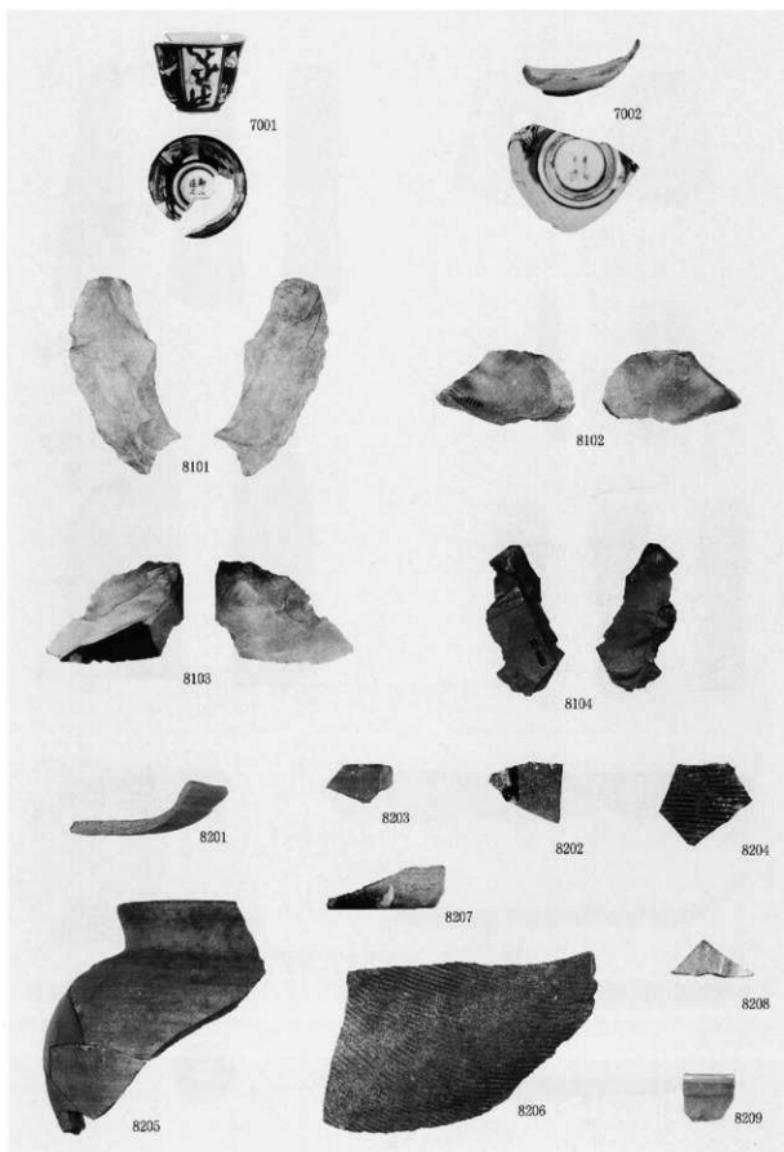
第5号墳出土遺物



第5号墳出土遺物



第5・6号墳出土遺物



開削地・道標外出土遺物



8301



8304



8302



8303



8305



8401



8402



8404



8403



8405



8406



## 報告書抄録

ふりがな	(ひにぬくらうはうじ)							
書名	倉谷古墳群調査報告							
副書名	能越自動車道造成土砂採取に伴う平成9~12年度の調査							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第9冊							
編著者名	間宮正光、日沖剛史、山口辰一							
編集機関	山武考古学研究所 〒286-0045 千葉県成田市並木町221							
発行機関	高岡市教育委員会 〒933-0067 富山県高岡市山小路7番50号							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯 ○○° ○○'	東経 ○○° ○○'	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
倉谷古墳群 手洗野	富山県高岡市	016202	202067	36° 45' 27"	136° 57' 57"	970804 010330	7,870m <sup>2</sup>	能越自動車道建設 に伴う造成土砂採取事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
倉谷古墳群	古墳	古墳時代	古墳6基 開削地1基 道路址1条	上陸器 旧石器 施			古墳時代初頭の方 墳6基の調査	

---

高岡市埋蔵文化財調査報告第9冊  
倉谷古墳群調査報告

発行者 高岡市教育委員会  
富山県高岡市庄小路7番50号

印刷所 株式会社チューエツ高岡営業所  
富山県高岡市木津458-1

---

2002年3月29日

